
ダイブゲームで恋姫＋無双 （元：恋姫＋無双オンライン）

山本君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイブゲームで恋姫†無双（元：恋姫†無双オンライン）

【Nコード】

N9996Y

【作者名】

山本君

【あらすじ】

恋姫無双……前世紀において、歴史美少女物というジャンルにあつて、一時代を築いた作品とされているゲームタイトル。

そして、今世紀初頭に開発された、仮想現実に入る為のシステムが民間で実用化されて以来、幾度かリメイクされている為に、その知名度・人気は高い。

しかし、主人公「ホンゴウ・カズト」その人に配置されての追体験に主眼を置かれていた、今までのそれらは、残念ながら佳作の内に終わる事が多かった。

そんな中、「真・恋姫無双」を多人数参加型のフルダイブ型ロールプレイ、しかもギリギリまで制限を外し、「戦争も恋もギリギリ」を謳い文句にした、ビッグタイトルが急浮上した。

開発から発表までの紆余曲折、新技術の導入やブレイクスルー、既存の規制からの脱却……。

それこそ「某プロジェクトなんか」じみた話もあったが、今回の話には関係ない。

この話は唐突な泡銭を抱え、現実に辟易した主人公が、他人に渡す位ならとゲームに金を注ぎ込み、のめり込んでいく。

そんな話です。

12/20 紛らわしいと突っ込みがありましたので、題名を「恋姫十無双オンライン」から「ダイブゲームで恋姫十無双」へ変更しました。（元題はそのうち消します）

ご迷惑おかけ致しました。

バイト先の先輩に、人数合わせで連れてかれたカラオケの後、ラーメン屋に行く途中で何気なく皆で買ったロトくじ。

丁度キャリアオーバーで二十億ちょいの週に八人当選、そのうち三口買った俺に八億程転がり込む事に。

まるでどこかのラノベ染みた出来事に、何かしらの出会いや出来事が始まるのかと、期待半分のおっかなびつくりで数日過ごしてみたものの、まったく言って良い程に何時もの生活が続いている。

いや、悪い意味での変化は有ったか。

何処から漏れたのか、通ってる大学の中に当選者が居るらしいとかな噂が流れたし、何故か苦学生アピールする連中が増えた。

奇特な奴が金でも回してくれると考えているのやら……元から貧乏でバイト三昧の苦学生やつてる俺までが、同じような括りで眺められるのは中々に業腹なので辞めていただきたいものだ。

さて、八億の使い道だが一括で貰うと目減りする為、半金の四億貰って後の半金は十年分割というプランに。

この先の十年間は、月あたり三百万オーバーの入金がある事になる……なんか、こういう事になると、人生が十年以内に終わったらどうしようとかいう、馬鹿な事を考えてしまうな。

とりあえずの四億の内、苦労掛けている両親に一億程送っておいた。

少なくとも、これで家のローンだとか修繕費だとか差っぴいても俺が働きたすのも併せて、年金貰う辺まで安泰だろう……無茶な使い方する程に多趣味でもないし。

それから、年金やらの先払い出来る奴は突っ込んでおく。

国民年金は一年払いしか出来ないのはどうかと思うが……個人年

金等では、入院保障のある終身の奴を三社程に撒いて全払いしておいた。

そんなこんなで将来の安心を、気持ちだけでも準備できたので、目先の欲に走ろうと思う。

人によれば、車買ったり贅沢したりって方に走るかもしれないが、俺としては、今の生活を大きく変えるのも面倒くさいので、興味の有ったダイブ系のゲームに走ろうと思う。

今まで、バイト先の慰安旅行とかの際、アミューズメントセンターで体験した事はあるが、中々刺激的な代物だった。

ただ残念な事に、今のアパートには、ダイブに必要な機器を置くのが困難という事で、別途にマンションを購入する羽目になってしまった。

賃貸でも良かったのだが、割と近くにダイブのシステム込みで千五百万位の物件（新築以来入居なし三年落ち）があり、北の端部屋で微妙に狭かったりするのだが、どうせダイブする時に使う位で週末しか来ないような所だしと、即金で購入。

今になって思うと、湿気とかどうなんだろうと若干不安である。

色々面倒くさかったのと、気が大きくなってたんだろう。

ともかくそんな感じで今の生活のうち、週末のバイトを削り、空いた時間でダイブ三昧の準備は出来たのだった。

新しい生活の初めての週末。

この日までに、色々とネットで情報収集を始め、何が良さそうかと調べた結果、戦闘メインのファンタジーやFPSはチーム的な事が基本で、一見には厳しい物が有るようだし、ロボットや戦闘機に乗ってのアクションシューティングも、あまりやり込む性質でもないのでパス。

となると、R18枠のアダルトかなーと色々探っていると、戦闘もあり恋愛もあり、立ち位置によって、役人では内政物、商人になれば成り上がり、將軍や武将になつての采配や一騎打ち、一兵士での殴り合い、野盜や荒くれ者でヒヤッハ も可能というタイトルを発見した。

タイトル名『真・恋姫無双 真Empires立志伝 parallel dive』一見、某歴史メーカーのタイトルかと思う代物だが、れっきとしたアダルト枠だ。

ぱつとみて、一体、何をすれば良いのかと悩む所だが、簡単に言うところ外史という三国志世界のパラレルワールドで好き勝手しろ（意識）とパッケージのクイックスタートに書いてあった。

基本的には、同名コンシューマーのタイトルと同じような流れの歴史の中で（若干の設定のブレは意図的に入れてあるそうだが）一兵士だとか役人だとかになって過ごす事になる。

その中で、恋姫武將と色々……な訳だが、パラレルダイブ（複数人同時没入）というジャンル上、他のプレイヤーの影響も出てくる為、攻略対象が被ると残念な事になったりもする。

更には「ホンゴウ・カズト」という、本来の主人公まで居る訳で、中々にオリジナルのメンバーは難易度が高いようだ。

まあ、一般モブ・ネームドモブ・ユニークモブ等も用意されている為、キャラクターに拘りなく、単に色々するだけなら、それ程の

難易度はないらしいのが救いか。

また、外史一周の時間は感覚が圧縮されている為に約一時間とお手軽。

セーブなどは無く、一発勝負で、死んだら途中退場。

まあ、自分でリタイヤした以外では、一分以内に次の外史が始まるので、其れにJOINすれば良い。

自分でリタイヤした場合は、抜けた外史が終わるまで再スタート出来ない。

等というチュートリアルを流しつつ、基本のパッケージ分のインストールが終了した後、更新分のダウンロードとインストールが進んでいく。

さて、しばらくして、コンソールに作業終了の表示が出て機体が再起動。

ショートカットからタイトルを起動、初期設定のキャッシュカードの登録やポイント購入の自動追加払い込み方法等等々が済み、タイトル開始メニューが表示されると、自動でキャラクターの新規作成が始まった。

キャラクター自体は幾つか登録できる物を、繰り返す外史の中で使いまわす事になる。

各キャラクター毎に成長要素もあり、レベルが上がれば、其れなりに攻略等で有利になるとか。

パラ的には大雑把に統率・武力・知力・政治力・魅力・運といった、ありがちな代物だが、他にもスキルだの特性だの隠しパラだのが存在するようだ。

まあ、最初に決められるのは初めに挙げた6つの能力値だけらしいので、余り気にする部分はないみたいだが。

「ふむ、名前はどうか」

基本的に、主人公である「北郷一刀」を見るように、まんまの名前でも構わないようだが（アイテムで、一周だけ名前を変更する代物もあるそうだし）ここは、それっぽい名前にしておこう。

三国志で金持ちといえば……袁家だったり、金使いでは演技の魯肅が色々と逸話があるそうだけでも、此処は水滸伝から盧俊義とか……無いわな。

趙員外……誰も判らんな。

やめた、姓は金、名は千、字は満腹にしよう。

『金満腹』、ラーメン屋の親父か……斬新すぎる。

アヴァターも、自分取り込みとかやってられないので、ランダムでモブっぽい奴を……おお、ちよい背が低い小太りの中年オヤジ、小金を持ってそうだけど、そこはかとなく女運とか無さそうな酒屋のオッサンみたいなのが出来たな（でもハゲじゃないのは拘りだ）そんな感じで、サクツと名前を入力してやると、パラメーターが表示された。

統率 18・武力 13・知力 18・政治 21・魅力 20・運 19
ボーナス：42

大凡、13から21迄に収まっているが、プレイヤーのベース能力値はマックス40（運除く）までらしいので、特に振り直しはせずにボーナスポイントを振る事にする。

ボーナスポイントは42ポイント……能力値の低い物を一つ40にしてしまいか、高い物を二つ40に上げるか、制限のない運に突っ込むか、はたまた万遍なく上げるか……WIKIを見ると、できれば二つは40にしておくのが良いとされていた。

そうして、複数キャラを作って、方向性を変えて登録するのが基本のようだが……。

T i p s .

Q・お勧めの初期キャラ、パラ振りは？

A・出来れば、統率・武力マックスの余りを知力振るか、政治・知力マックスの、余りを統率振り。

軍閥トッププレイの魅力・運振りは素人にはお勧めできない。

A・初期に、一番高いポイントの能力値には、隠しパラ乗るので、マックス振りのポイントが二つよりは39・40にするのがお勧め
(未確認)

A・マイ外史の事とか考えたら、運に一点振りで、作成後にパラUP突っ込んで、オール40スタートの1キャラプレイが最強じゃねえ？

A・運以外40にするのに、平均20突っ込んで計100ポイントUPで十万か、今まで突っ込んだ課金アイテム考えたら高いのか安いのか……なんにしろ、懐が寒くなるな。

という書き込みが有ったので、やってみる事にする。

運に全振りで61まで上げて、キャラクター作成。

その後、パラUPアイテムを、110個購入……十一万円なり。

さあ、キャラクターが作成完了。

課金アイテム突っ込んで、初期とは思えないパラメーターだが、レベルが低いので色々足りない部分は有るだろうから（熟練度っぽい物が有るようだ）この先の成長に期待だ。

で、ここまでは、ダイブシステム付属のコンソールから作業していたのだが、この先は作品にダイブしての行動になる。

今までにも何回かは体験している物の、自分専用の機械からのダイブというのは、中々に感じが違うものだと思う。

強いて言うなれば、平日の夜と連休前の金曜の夜の違いとか？

基本的に際限なく、自分でやめたいと思う迄続けられるとか、半端じゃなくテンションが上がる。

よし、始めよう。

ダイブといっても、液体の入ったポッドみたいな大がかりな代物は必要ない。

サブコンソール用のHUDグラス（こめかみにサブの受信機）と、首の後ろにセットする送受信機兼ミキサのヘッドセットに、右手か左手の筋電位マウスグローブ付けて完了。

後は楽な姿勢で横になればOK。

そのうちに半覚醒状態に移行し、安定すればタイトルがスタートする。

感覚的には、一瞬、気が遠くなっていたかと感じた次の瞬間には、ダイブ状態に移行しているといった感じだ。

今回も、何かに気を取られていたような状態から、ハッとした時には、自分が水中に居るような浮遊状態になっていた。

目の前には、メニューを模した球体が浮かんでいる。

それらに触れながら、「キャラクター選択」、「新たな外史へ」と進む。

「いらっしゃーああい　お・は・つ　のお客様ねえん」

いきなり、何か唸るような音が、世界を震わせた。

「あーら、驚かせちゃったかしらあん。

わ・た・し、当ダイブタイトルのチュートリアルを担当するパソナルの貂蝉よおん」

ぐはあ、無言で、右手のイメージを操作。

オプションを開いて、設定を変更しようとして……。

「ごらあ、誰が超リアルホラーのボスも慄く、発禁グロだとお!!」

誰もそんな事は言っていない。

「と・に・か・くう、チュートリアルが終わるまでは、設定変更不可よおん」

これはキツイ。

見てもないのに、筋肉マッチョがくねくねしているイメージが伝わってくる。

なんで、こんな所に力入ってるんだ。

「まずは、スタート位置の設定ねん。

本当はランダム設定か、マップ表示の中から選択してもらうんだけど、

今回はチュートリアルだから、此方で指定させて貰うわよん」

メニューが開き、位置指定設定へ進み、マップ上の光点がマップ上部へ移動していく。

光点が止まり、意思確認がYで進む。

幽州か……確か、地味の人のお膝元か。

「じゃあ、開始するわねん」

言葉が終わるか終わらないかの瞬間、風景が切り替わり、自分の姿が登録してあったアヴァターに置き替わる。

体に重力を感じ、肌に風を判じる感覚が、意識を鮮明にさせる。

でも、半分寝てるんだよなあと、変な感心をしてしまう。

腹を触ると太鼓腹の感触。

そのくせ、能力値のせいかな身は軽い。

そんな違和感を楽しんでいると、声が降って来る。

「時間はスタート時点から少し進めてあるわ。

星ちゃんが客将になっていて、貴方は白蓮ちゃんに以前から仕えてるってところかしらん」

なるほど、やはり普通の人に仕えているのか。

自分の風体を見ると、御用聞きの商人だか下っ端役人だかの、どちらでもいけそうな感じだが、どの程度の位置に居るんだろうか。

「うーむ」

「金千どの？」

腕を組んで首を傾げていると、不思議そうな声で、脇から声を掛けられた。

今まで、マツチヨの声に慣らされていたせいか、リアルで鈴の鳴るようなという喩えを頭に浮かべる事になった。
って、感心している場合じゃないな。

「おっと、これは失礼」

振り向くと、何という……艶やかな。

ぶっちゃけデザインは中国舐めてんのかって風に、あり得ないのだが、胸元足元の挑発度合いに全てを持っていかれて納得させられてしまう。

健康的な色気というには透き通るように白い肌が艶かく、仄かに朱に染まっているのは調練でも行っていたのであるうか。
思わずガン見してしまいそうになるが。

「駄目よん、乙女の柔肌ガン見しちゃ。

紳士たるもの、焦っちゃ駄・目。

でも、そのパトス、ああん、あつついわああん」

絶対に、お前にや注がねえよ！！

うげえ……思わず変な想像になりかけて意識が飛びそうになったわ。

「これはこれは、趙雲殿。いつも変わらずに、お美しい」

「いやいや金千どの。そのように真っ直ぐ褒められると、参りましたな」

意識がそれた後、勝手にキャラが応対している。

「今みたいに、プレイヤーとキャラクターの同調が離れると、体感時間が加速されて、キャラクターは自律して動き出すの。」

キャラクターは特に対象や行動を指定していないなら、基本的に無難な行動をするから、よっぽど微妙な情勢でもなければ変な事にはならないわ、安心してねん」

気がつくと、趙雲の姿はなく、いつの間にか部屋で竹巻もって書き物をしていた。

この辺も自律して勝手に進んでいるらしいが。

「あ、そうそう。自律している時の行動の達成度は能力値基準になるのだけど、意識して行動することで、効果を上げる事ができるわ。

簡単に言うと、運のパラメーターを消費して、不足分の能力値のかさ上げだったり、成果の達成度を上昇させたりできるのよん。

運のパラメーターは暫くすれば、上限までゆっくり回復するから、旨く使ってねん」

それからも、兵の訓練だの政務の進め方だの、基本的な行為判定なんかを、割とちゃんと解説してくれるマツチヨに感謝しつつ、チュートリアルを進めていく。

基本的に能力値が足りている為か、特に失敗もない。

「あらん、能力の及ばない行為判定について、運のパラメーターを使ったカバリングのチュートリアルが出来なかったわねん。

あなたってば凄いのねえ」

言外にどんな意味が含まれているのか気になったが、褒め言葉と思っスルしておいた。

「それじゃあ、最後にイベントの処理を行っわよん」

「イベント？」

「今まではあくまでも日常の行為ねん。

基本的に外史の流れには影響の出ない、競う相手もない己の評価を積み上げたり経験を積むような事柄だったのね。

今から始まるイベントは、対プレイヤーだったり、外史の基本線にズレを起こすような戦争だったり結果の変更だったりするのよん

」

地味な人にそんなイベントってあったんだっけか？

どうやら普通の人は、イベントに巻き込まれる側だったらしい。城下に『劉』旗を挙げた団体さんがやってきて、騒ぎになっているそう。

どうやら、自分のキャラクター、内政やってる下っ端の役人じゃなく、それなり以上の決定権握られてる上に、趙雲さんに公孫賛さまの下下次の次の次くらいの隊長職までやっているそう。

どんだけ人が居らんのだ。

王門、関靖、嚴綱、単経、田楷、田豫あたりは居るっぽいけど、モブなのか名前だけで登場しないし。

仕方ないので、警備の兵を引き連れて、城下に押し出ると。

「金千どの」

趙雲さんが、騒ぎを聞きつけて、やってきてしまった。

どう考えても蜀への移籍フラグだな。

確かにコンシューマーのタイトルでも、蜀ルートでこんなイベントがあった。

北郷さんの仕込みで、劉備さんが普通の人になるに行くような話だったか。

主人公視点だと、なんかうまくやった感じだったが、こっち側に居て、こうこられると迷惑すぎる話だな。

つか、主人公登場なのか!?

うわ、チュートリアルのは最後は負けイベントかよ!!

「そこは、あなたの腕次第ねん」

どう考えても無理臭い所へ、マツチヨの声に促され進むことに。

城下に出ると、野次馬と不安におののく民の声、迷惑すぎる相手は、なんか旗と武将だけは立派で、後ろに並ぶというかついて回ってる連中は貧相なことこの上ない。

どう見ても盗賊団です、ありがとうございました。

「とにかく、やるべきは劉備と普通の人の面会阻止。
できればこのままお帰り頂くってところか」

と思ってる脇で。

「ほほう、なかなか」とか、趙雲さんが、なんか良く判らん部分で、ファーストインプレッションを受けたようです。

先を思いやられながらも、とにかく仕事をするしかない。

「その連中待て！！ 城下を騒がせるとは何事か！！
さっさと出て行かねば、「我らは劉備玄德、天の御遣い率いる義
勇軍である！！」おうふ」

「ほほう、あれが噂の……」

……趙雲さんよ、完全に見物モードか。
関羽さんも話を聞けよなあ。

「劉備様のご学友、公孫伯珪殿に目通り願いたい！！」

見た目、そんなに大柄でも無い美人さんなのになあ。
やたら声がでかいし、馬乗ってるから見下ろされて、凄い勢いで
威圧されるし。

どうみても、俺の事は木端役人というか、モブ扱いですね、兵士
Aとかか。

黄巾の色違い使いまわし辺りに見えてるのか。
いや、こつち見てないか。

なんとなく、趙雲さんの方を気にしてるのか。
おかげで、近くで見上げると、えらいミニで馬乗ってるから……
白いのがチラチラしてるんですが。

じゃなくて。

「確かに、劉備どのの名は聞いた事がありますな。
天の御遣いという者の噂も聞いた事が有りますが……」

「それでは、」

「それと面会は別の話ですな。
義勇軍と申されましたが……どうみても、この街で見覚えのある、
あぶれ者を集めただけにしか見えませんぞ。

大体において、給金を提示しての募兵に応じなかったこの連中が、
いきなり志に目覚めてなんぞ……。

ちゃんちゃら可笑しいわ!!

きさまら、本気で義勇軍だというなら、今から賊の討伐に行つて
貰おうか!!

そこで死んだら、実家に見舞金の一つでも包んでやろつさ!!」

俺の一喝に、蜘蛛の子を散らすよう、ばらけて逃げ去る、あぶれ
者連中。

「で、面会でしたか……」

「はは、は」

なんか、乾いた笑いで固まってる、劉備さん御一行。

「策を用いて取り入ろうとされるなど、ご友人といえど許される事

ではありませんな。

申し訳ありませんが、お引き取りを」

ちと怖いが、一步踏み出して、城門を指差す。

「ふむふむ、これは金千どのが一本上手でしたなあ」

こいつ、メンマをツマミに酒呑んでやがる。

「ですが、そう堅い事を言わずに、取り次いでやってもよいのではないですか？」

「ほんとか!!」

「趙雲どの!？」

ぐああ、後ろから撃たれたああ。

主人公さんが、凄い勢いで食いついて来てるし。

「ご学友を追い返したとなれば、伯珪どのも残念がるのではありませんかな？」

「其れは御尤もですが、どう見ても己の基盤の無さを棚上げして此方に頼る気の者を。」

しかも平身低頭して乞うならば、いざ知らず。

策を弄してなし崩しに、人の良さに付けこもう等と、徳ある者の行いとは思えぬ所業。

そんな者を、勝手・狭量と言われようと、取り次ぐ訳にはいきませんな!!」

これでどうだ!!

「あーら、お見事ねん。」

プレイヤーの行動は、そのロールプレイでも能力値の優劣以外の部分で作用するの。

今のは相手の裏技めいた行いを、物の道理を押した正攻法で押し返したから、結構きいてるわよお」

マツチヨの解説はいったー。

「貴様、桃香さまを愚弄するか！！」「お姉ちゃんをいじめるなのだ！！」

「お願いします、白蓮ちゃんに会わせて下さい！！」「騙そうとしたのは俺のせいなんだ、だから頼む、桃香を会わせてやってくれな
いか！！」

力づくの詰め寄り、そして劉備さんから凄まじい、お願いパワーが！？

何というフェイス・フラッシュ。

これが、漢王朝皇族の力かあ！！

因みに主人公さんからは、女性限定なのか、特に何も感じなかったが。

じゃなくて、抵抗しないと、なし崩しにズルズル行ってしまう
うだ。

「なら、ここで、運を使つてのりカバリーねん」

運の61ポイント全てを、魅力の40にのせて、抵抗！！
流されそうだった場の勢いが、此方に戻って来た。

恐らくは、序盤で未だ覚醒前の劉備さんだったおかげで、抵抗が
出来たんだろう。

この勢いなら言える。

「だが断る！！」

そこからは、一瞬の内に全てが起こった。

断られて、へちゃんと腰を落とす劉備さん。

失意に固まる主人公。

激昂・マジ切れして、得物を振り上げる関羽・張飛の二人。

流石に、割って入ろうとする趙雲さん。

目の前であー、ヤバイなーと思いつつ、動けない俺。

ゆっくり動く中で、趙雲さんの槍が、おチビさんの蛇矛を反らし、火花が散る。

其れを見て、関羽さんは一瞬、我に返ったか刃が鈍り、なんとかたたっ切られずに済みそうに思えた所で、眼の端に普通の人がやってくるのが見え。

このままだと、なんか結局はシナリオ通りになってしまいそうで、妙にムカついたので。

止まりかけた刃に向かって、一歩踏み込んでみた。

5（前書き）

12/7ポイント間違い修正

バツサリ・ズバア

なんか、そんなギャグっぽい擬音が書き文字にされそうな呆気無さで、肩口から胸元に浅く傷が走った。

一瞬、何も感じなくて、おや？　と思った途端、傷に沿って熱の線が走った。

アツイ・イタイ・アツイ・イタイ、実際は随分と減衰している筈なんだろうけど、上手い事死ねなくて、気絶もしない程度のダメージが、俺の神経を思いつきり痛めつけてくれる。

こりゃ確かに、成人粋だわ。

どれくらいの時間が続いているのか判らないが、周囲の動きが微かに見える。

普通の人が何か叫んで、趙雲さんはびっくりした顔で、此方を見ていた。

俺と視線が遭ったので、空元気押しでニヤリとしてみると、何が受けたのか、堪え切れないように、大笑いをかましていた。

其処ら辺を見た後は、何も覚えていない。

次に見た景色は、相変わらず、外史世界の中だった。

どうやら、ゲームオーバーにはならなかった模様。

自室の寝台から体を起こすと、何故か趙雲さんが傍らに居て、一人酒盛りをしていた。

相変わらず、ツマミはメンマか。

体には、違和感というか、鈍い圧迫感を感じる。

傷の分の行動ペナルティのようなものだろう。

継続的に痛みを押し付けられる仕様じゃなくて良かった。

さて、あれからどうなった？

ステータスというか、情報画面を見ると、あれから丸二日経っているらしい。

物問いたげな顔をしていたのか、趙雲さんが「無茶をしますなあ」と、ひとしきり笑ってから、あれからの事を教えてくれた。

結果から言うと、俺の企んだ通り、流石に配下たたっ切られては、普通の人も劉備さんを友人扱いは出来なかったらしい。

幾らか餞別を渡して、放り出す予定らしいが、今は謹慎させているそうだ。

「それで、趙雲さんは？」

何をしてらっしゃるの？ と問いかけようとした所で。

「どうか、星と呼んで頂きたい」

「おや、どうという風の吹きまわしで？」

真名は未だ、誰にも預けていなかったようですが。

「いや、色々と感じ入る所がありましたな。

我ながら、随分と金千どのを見くびっておったなと。

己の増長、見る目の無さなど、色々と思い知らされ、目から鱗でしたぞ」

「ほほう」

「例えばですな、あの全てを惹きつけずにはいられない、あの劉備どのの媚を吹き払う気迫」

「ほう……」

「天の御遣いの名に怖じず、策を弄した非を断じる信念」

「ほう……」

「最後に英雄豪傑たる、関雲長に笑って斬られにいく胆力。

この趙子竜、引けを取るつもりはありませぬが、あの真似はできませんぞ」

「は、はははは、は」

もう二度とやんねえよ！！

ばったりと寝台へ倒れ込んだ。

「あらん、随分と流れが変わっちゃったわねえ。

予定だと白蓮ちゃんと真名交換するスケジュールだったんだけど」

あ、マツチヨの声か。

そうだったのね、普通の人。

チュートリアルに使われるんだ……普通の人。

「ここで、最後のチュートリアルよ。

アイテムボックスを見て頂戴」

ん、なんか指輪が点滅しとる。

「それは、外史に入る際に支給される、契約指輪（支給品）よ。

新しい外史に入る度に一つ支給されるから、どんどん使っちゃってねん。

あ、一つ以上は支給されないし、外史を出る際には消えちゃうから、注意よん。

まあ、ポイントで追加購入できるものはスタックして、保存もできるから、よかったら使ってみてねん。

で、ここでは、その指輪の使い方を教えちゃうわよお。

おおよそ、真名を預けて貰えるっていうのは、一つの目安なのね。

ある程度の信頼や愛情・興味でもいいかしらん。

それを対象が貴方に向けているってことなの。

その時に、貴方がその契約指輪を相手に渡して、受け取って貰えたらのなら。

それは、その相手を貴方のM y外史に連れて行けるってことなのよん

でも注意してねん、M y外史に連れて行けるキャラクターは、一回の外史では重複できないの。

ここでは星ちゃんを貴方が連れて行くことになる、他のプレイヤーは星ちゃんに手が出せないのね。無論、桃香ちゃんだったり、愛紗ちゃんだったりなら問題ないわ……でも、その場合はご主人様がお邪魔伽羅してるから大変なんだけど（ボソ）

それから、指輪の機能なんだけど、M y外史へのマーカー以外に、他のプレイヤーやご主人様からの干渉を100ポイント分吸収してくれるのよん。

他にも貴方が星ちゃんに失望されたりする分も吸収してくれるから、指輪をつけている間は愛情だったり忠誠度だったりは下がらないのだけど、100ポイント超えちゃうと指輪壊れちゃうのよね。

だから、そうなったら新しい指輪を渡さないとM y外史には連れて行けないから注意してねん。

あと、条件としては外史終了や自分でのリタイヤだと問題はないけれど、プレイヤー死亡でのゲームオーバーだとキャンセルされちゃうから、こちらも注意よん。

それ目的のPK行為も有効だから、あまり欲張らないでリタイヤするのも大事ねん

それじゃ、チュートリアルは終わりよん。 シーユーねえん

なるほど。

指輪ねえ、ポイントで購入できるって言うと、どれくらいなんだ？

ああ、外史内で稼いだ給金みたいなポイントでも購入できるのか。

1000ポイントね、安くはないけど買えなくはない……って、上位版もあるのか。

5000ポイントで200負荷吸収、10000ポイントで300負荷吸収……ポイント換算がリアル10000円で100000ポイントだから、200版は500円、300で10000円かよ。

なんという、課金げー。

まあ、通常の支給品と同じのは1000円で事だから、一応はそこまで外道でもないのか？

って、なんかキャンペーンのポップアップが……なんか、知ってる名前の宝飾品ブランドが。

何々？ 期間限定コラボ企画、ブティック・ミクニの契約指輪をリアルで買おう？

ダイブタイトルの中の指輪を、リアルで同じデザインで作ったのか……気軽にプレゼントできないんじゃないかなあ。

まじで、普通にデザインはいいけど18万か。

それが今だと15万で、更に購入アイテムの新規追加コードつきね。

買う奴いんのかよ！！

ポチっとな。

6 (前書き)

1 2 / 7 誤字修正

品物は、当日発送いたしますというメッセージが帰ってきた。

キーコードは、発送番号だの何だのと一緒に、確認メールで送られてきたので、コピー入力。

「ポイントショップに新しいアイテムが追加されました」旨のメッセージに、確認しようとショップのウィンドウを開く。

NEWと新規追加のマークを探すと、50000ポイント・吸収
負荷上限なし・常時忠誠度上昇（微）という品が……リアルで5000円か。

たけえ、普通にアクセサリ買えちまう。

でも値段分の効果はあるんだろうな、これを見たら買わずにはいられないだろうってくらいの。

まさに悪魔のシステムだな。

まあ、買うけど。

おっと、外史の方に意識を戻さないと。

「では、趙雲どの、いや星どの。

私からは真名の代わりに、これを受け取ってはいただけませんか
な」

流れて、それとなく指輪を渡してみる。

「これは……いや、ありがたく頂いておきましょう」

趙雲さんは、目の前で指に指輪をはめてくれた。

普通であれば、ここで即座にリタイアしない限り、ここから他のプレイヤーだったり主人公の本郷一刀相手に、趙雲さんを掛けた丁々発止が始まるのだが……この課金アイテムのお陰で、とりあえず

俺が殺されてゲームオーバーにならない限り、キープできてしまう。
なんというバランスブレイカー。

とはいえ、実際に確実にキープできているのか、何かしらの手段で持って行かれたりはしないか。

この作品の定石や、その対策なんて、まだ無知も良い所なだけに、せつかくのレアな武将を確保できたこの機会は、欲を出さずに素直にリタイヤしておくのがよさそうなんだけど……せつかくだから、普通の人にも指輪を送りたい。

多分、チュートリアルで用意されたんだし、ライバルは居ない筈。と考え事をしていたら、気を利かせてくれたのか、趙雲さんが「少しお休みになれるのがよいでしょう」と席を外し、伯珪どのには目を覚まされたと伝えておきますとの事。

お言葉に甘えて、少し時間を進める事にした。

さて、アイテムボックスを色々と眺めてみると、自律行動中に購入したのか、結構色々と持っている+1や+2の装備型アイテムと+10や+15の消費型回復アイテム。

武器だったり、本だったり、アクセサリだったり、酒だったり食べ物だったり。

武器は武力、防具はダメージ軽減、本は知力や政治、軍配や羽扇は統率、アクセサリは魅力、酒や食物は運や体力等の回復に対応している。

また、プレゼントすれば忠誠度や親密度なんかが上がるのはい言うまでもない。

因みに外史世界の町中の商店で購入できる物は、其れなりの発展度なんかで判定されるらしく、+1や+2なんかが並んでいるのは俺の稼ぎが悪いのか、店の品揃えが悪いのか……というか、酒とメシが多いのはどういう事だ、自律中に趙雲さんの餌付けをしているという事か？

まあ、有力な武将を自勢力にキープしておく為、色々やっつい

たんだろっ。

そのお陰で、イベント一発で指環を渡せるくらいの親密度になっ
たんだろっ……と思っておこっ。

決して、たかられてた訳じゃないと信じておこっ。

とはいえ、街レベルの影響を受ける店売りは、購入できるタイミ
ングや場所に制限はあるが、かなり購入ポイントが控えめになっ
ている。

ポイントショップでは、何時でもどこでも購入可能で、品物も無
くなる事無く、課金アイテムも高レベルアイテムも無差別に置い
てあるが……桁が違う値段になっている訳だ。

お、忠誠度UPオンリー10UPが10000ポイント、20U
Pが15000ポイント、50UPが30000ポイント。

流石に支給リングを一発で吹っ飛ばす100UPは無いかと思っ
たら、100UPは50000ポイントで有りました。

「という事なら、50UPの酒と指環を買っという」

とかやっていたら、戸を叩く音が。

「満腹、起きてるか？」

「ええ、はい。大丈夫でございますよ」

応えると、姿を現したのは我が上司の普通の人。

普通の人といっても、美人とは平均値の事だっという通り、立派
に美人である。

赤毛のポニーテールが映える細い首元やうなじも、すんなりした
理想的なスタイルも、十分リアルでは、お目に掛かれない代物であ
る。

「どうした？　じろじろ見て。私なんか、珍しい物でもないだろ

う」

「とんでもない、何時も通りお美しいですよ。

騎馬を率いる時の伯珪殿は何時も惚れ惚れいたします」

「ば、ばか!!」

「はっはっは」

可愛いなあ。

「お見舞い頂いたお礼に此方はいかがですか？

良い酒が手に入ったのですが、傷に障るといわれまして、手元に置いておくと気になってしょうが有りませんので」

「ほう、そうか。 頂いておこう」

ふむ、受け取って貰えたか。

「なあ、こいつを貰ったからって訳じゃないんだが。

真名を受け取って貰えないか」

「よろしいのですかな？」

「ああ、是非とも受け取ってくれ。

というか、星の奴の真名は受け取ったらしいじゃないか」

「ああ、まあ、成り行きで、お預かりいたしましたが」

「ふん……私も色々と考えさせられたんだ。

いつとくが、今回の事は余計なお世話だぞ。

これでも、友人の助けになる度量くらいは持っている。

それなのに、バツサリ斬られて……聞くと斬られに行ったらしいな。

気持は嬉しいが、お前でも居ないと色々滞って大変なんだから」

「それは、済みません」

お前でも、と言われると少々傷付くが、まだレベル低いせいかなあ。

「星の奴も、お前の見舞いと称して、ひよいひよい居なくなるしな」

あー、それについては、俺のせいなんですか。

「ともかくだ、私はお前の事が見えていなかった。

居れば便利位に思っていたが、居なくなつて、これ程バタバタするとは思っていなかった。

星の奴を引き留めようと色々やってはいたが、お前が居る事には当たり前とも感じてたんだ。

だから、真名を預ける事もしてなかったしな。

でも、今回の事で、お前がこの土地を、どう思ってくれてるのか判つてな。

恥ずかしくなつたんだ」

「それは、買被りというものでは」

「えーい、うるさい。良いから受け取れ」

「では、私からは此方を」

といって、指輪を送ると。

「へえ、洒落てるじゃないか」

と、あっさり受け取ってくれた。

よし、普通の人ゲットだぜ。

じゃ、このままログアウトしますかね。

「ところでな」

おっと？

「実は、お前が倒れてから、仕事が滞っていてな。
その分を桃香達にやらせようかと思っっているんだが。
いや。もし、お前が気にするっていうんなら、すぐに追い出す
つもりだけだな」

どうだ？ と聞かれてしまえば。

「いえいえ、別段に恨みに思っている訳ではございませんので。
はくけ、いや、白蓮どのの思う通りにして頂いて結構でございますよ」

伯珪どの、と言いかけた時に妙な殺気を感じたので、慌てて言い直したが正解だったようだ。

「そうか、それじゃあ遠慮なく使う事にして、お前にも監督くらいはして貰うからな」

じゃあ、今日は体を休めておけよ。

と言い残していく普通の人……これは、チャンスなのか？

たしか、wikiでは関羽ゲットはまだ無かった筈。
もう一回、確認してみよう。

FAQ

Q 武将ゲットって、どの辺りまで実績あるの？

オススメと方法とか教えて下さい。

A、オリジナルでここにカキコのあるのは、チュートリアル時に普通の人。

黄巾の時のドサクサで張三姉妹、河北決戦の時の袁紹陣営三人組。

孫呉復興時の袁術とバスガイド、南蛮でニヤンコと量産型。

未確認で、可能性の高そうなのが、赤壁時の瀕死黄蓋、定軍山のイベント時の夏侯淵、反董卓連合時の董卓・賈馱、華雄とかか？ あ、黄巾時のあわわ&はわわもか。

因みにチンコ太守が陣営に居ない時ね。

A、加入イベント前の、魏の三羽烏を忘れてる。

A、夏侯淵は無理じゃねえ？ イベントで、いくら下がってたと思うのに、100以上下げててもブレイクしねえ。

そして華琳さま登場後に、必死で300下げててもブレイクしねえ。

というか、三君主って忠誠上げ能力チートじゃね？
それか、無効化されてる？

A、魏陣営と接触前の三羽烏の内、于禁に社練のブランド抜具を必死で貢物。

慌てて100ロックかけてたのが、華琳さま登場の霸王オーラ一発でブレイクしたでござる。

A、蜀漢大徳フラッシュ・曹魏霸王オーラ・呉国三代ブラッドは所属陣営の相手だと100ロック簡単に抜いてくれるよな。

A、変な名前つけるな（w 因みにチンコ太守もナデポー一発で6

0 近く削ってくるぞ、陣営関係なしに。

A、食い物系の貢物を無限に食ってくれる張飛たん相手にテストした結果、陣営所属は凡そ300前後のロックが掛かっている模様。一回ブレイクして、100ロックかけて、またブレイクされたあとは100ロックが掛かっている。

ただし、この100に関しては、半端に削っても何時の間にか、上限まで戻ってるっぽい。

A、前述の夏侯淵の場合、削りよりも華琳さまパワーで上がる方が大きかったってことか？

それかブレイクしないとか？

A、袁術、袁紹、董卓組もだけど、基本的に君主がブレイクしないと他のメンバーが、アレ？ ブレイクしねえなってることねえ？ でも、そのすぐ後にブレイクするから、忠誠自体は落とせてると思う。多分、君主が落ちる前は1で残っちゃうんじゃねえ？

A、いや、それだと張飛がブレイクするのが、おかしい。相手が近くに居るとかの条件か？

A、おお、そういえば、あの時はチンコ太守も劉備も居なかったな。

A、雑談になってるが、纏めるところか。

陣営に所属してない・所属陣営がコケた辺りの武将はゲット出来る可能性が高い。

陣営所属者は初期に300ロックが掛かっている。

君主が居るところではブレイクしない。

ブレイクしても、またブレイクされると100ロックかかる

（回復あり）。

また君主が居なくても、チンコ太守に落とされると、そっちにも邪魔される。

こんなところか？

A、瀕死にして、首輪で何とかできないのかな？

A、うわ、外道が居るぞ。

首輪って、バイオレンス規制外して、ヒヤッハーするときし
か使いでがくないか？

それに自分で何とかできる相手くらいしか、無理っしょ。

武将相手だと黄巾部隊二千とかでも、サクッと逃げられるし。
山賊頭目とか、ヒヤッハーしても忠誠下がないモ武将を
十人くらい集めても、返り討ちでブツ殺されてロストだし。

下手に無理して割合ゲットしやすい普通の人とか使っても、
金掛けて最低200ロックとか使ってないと、闇討ち命令した時点
で1000ロックだと即ブレイクして出奔しちゃうし。

300でも、多分勝負が付く前にブレイクして割りに合わない
いし、一瞬のテストに1000円を人数分無駄にするとか無理だわ。

A、そこまで詳しく想定できるオマエが、ここ一番の外道じゃね
ーだろーか。

だれか、ブティック・ミクニのアレ買ってくれ。 500と
か、1000ロックとか買えるように、なるんじゃねえか？

A、アレ、今日の正午で、キャンペーン終わったらしい。
今新しいのが出てた。

5万のペンダント買ったなら、アイテム購入追加だつてさ。
結局、誰も買わなかったんだろーな。

5000ロックとか10000ロックとか、いらねえし。

300削れるって、どんだけアブノーマルなこと強要……いやいや。

イチャラブするなら200で十分だろ。

A、情報はエエ、つか、リアルタイムのチャットみたいになるな。

皆ダイブ中か？

因みに5万ならイケル！！　と言う事で人柱行ってきた。

500ロックが2000円で買える。

しかも、負荷の回復（弱）付き！！

恐らく、前のは800か1000ロックの回復付きが、3000円か4000円だったと思われ。

A、長い目で見れば……いや、前提の5万が無理だ。

やっぱし、いらねえなあ。

あ、首輪って結局は村人用とかか？

A、璃々ちゃんになら、璃々ちゃんにならいける！！
他にも軍師連中ならボコれるやもしれん！！

A、ちょ、おま、天才かオマエ！！

リリちゃん捕まえて、人質にして黄忠さんを！！

A、ちよつとまていい！！　お巡りサーン！！　犯罪者がここに居ます！！

因みに、上手く璃々ちゃん何とかできても、黄忠さんは見えない所からドタマにヘッドショット食らわしてくるから、脅迫状出して場所指定して待ってる時点で死亡確定です。

指定してなくても璃々ちゃん泣いた時点で、矢が飛んでくるけどな。

A、おまわりさーん！！

なんかグダグダすぎるが、情報は得られたな。

因みに新しいキャンペーン品も買っておいた。

ポチってコード入力したら、20000ポイントで500ロックが買えるように。

あと、首輪って……もしかして俺なら、忠誠下がない指輪を使える俺ならなんとかなるのかな？

なんというバランスブレイカー！。

だから、買った奴がいても、書きこむ奴が居ないのかもしれないな。

でも、それなら関羽・張飛は欲しいな。

ヒャッハーするかどうかは別にして、チャンスではある。

書き込みを見ていると、張飛は食い物系の貢物は無制限とか書いてるから、ブレイクさせやすいだろう。

ただ、対象を個別にしておかないといけないらしいから、仕事を割り振れる権限を握れそうなのが本当にチャンスかも知れない。

ここはアイテム買って、用心しながらダイブ継続だな。

7 (前書き)

本郷＞北郷に間違いを修正

はい、ちよろつとアイテム購入してきました。

一回死んでも、リタイアせずに復活できる、華佗のお守りです。

一個10000ポイント。

体力&運をマックス回復してくれる、ゴッドヴェイダー印のお粥も複数購入。

そして、運のパラをがっさり使うために、パラアップを十万使って百個購入。

運を161まで上げて見ました。

因みに、普通の人と趙雲さんに、華佗のお守りを渡しておく事でしょう。

なんかの弾みで死なれると困るし。

さて、翌日には何とか起き上がれるようになり、普通の人にお見舞いのお礼方々面会。

「それで、もう大丈夫か？」

「ええ、ご心配をおかけいたしましたして。

お陰様で、座り仕事でしたら問題なく」

「そうか、助かる。」

それで早速で悪いんだけどな、桃香達にも仕事をさせようと思う。

そこで、監督を頼めるか？」

「お言葉のままに。この満腹めにお任せ下さい。

確か劉備殿は、白蓮さまと同じ私塾の出身とか、関羽殿もそれに文も立つようですから、お二人には内向きの仕事を。

張飛殿は……少々、落ち着きが足りないようですので、星どのと賊討伐をお願いいたしましょうか。

それで、天の御遣い殿には、出来れば内向きの仕事をお願いした

いところですが……暴走しそうな、お二人の御目付けに……お気の毒ですが」

「そうだな、そんな所か」

実際は劉備さんは、だいぶ劣化してると言うか、どうしてこんなった！？　ってレベルになってるんだろうけどな。

普通の人の執務室を辞して、謹慎中の皆さんの部屋へ。

途中で主人公さんの一人部屋に寄って一緒に来てもらう。

チラチラと見られているのは、傷の心配か、それとも敵意なんだろうか？

誰も彼もNPC用のAIとは思えないような、感情をにじませた表情をするので、単純には判断できない。

「それで、金千さんだっけ？」

「満腹と呼んで頂いて結構ですよ。　北郷さん」

「満腹さん、俺達、どうなるんですか？」

ああ、今後の心配だったのかね。

「とりあえず、私の遅れた分の仕事を、やって頂きまして。

その分の給金を路銀の替わりにして頂こうかと。

まあ、そのまま留まって頂けるのなら、言う事はないのですが。

流石にそれは、劉備様の願いもあるでしょうし……」

という話をしていると、女性陣の部屋へ到着。

扉を叩いて声を掛けると、何故か趙雲さんまで居る。

「これは、ちょうど良かったのでしょうか……星どのの姿が見えないと、白蓮どのがばやいておりますが」

「ははは、いや満腹どのを探しておりますな。

「ここでこうして居れば逢えるだろうと」

「まあ、よろしいですが」

ははははとアチラ向いて笑う趙雲さん。

「それで、こうして伺ったのはですね」

「私達はどなるのです。」

あなたを切ったのは私だ。私を好きにすればいい。

桃香さまには咎はない」

「あー、そのへんのことは、私も年甲斐もなく、意固地になってしまいましたので、あまり気になさらないで頂きたい」

「自分で斬られに行く方が馬鹿なのだ」

「ちよつと、鈴々ちゃん」

「ははははは、これは一本取られましたな。」

とりあえず、皆さんには、私の遅れた仕事を手伝って頂きましようか。

その分の給金はお払いいたしますので」

「それでいいんですかっ？」

劉備さんが、えらい勢いで食いついて来たな。

「まず、劉備さんと関羽どには、役場の決済をお願いします。」

こちらは私も監督としてつきますので、判らないことが有ればお聞き下さい。

それから、張飛殿には賊の討伐に、お力をお借りしたい。

こちらは星どのが。

あと、御使い殿には突っ走りそうな、お二人の御目付けを、お願いしたい」

「え、俺？」

「ええ、すみませんが、流石に私も騎馬で遠乗りするまでには傷が

癒えておりませんので、流石のおふたりも、御遣い殿が居れば、そう無茶はしないと思いますので」

「……うん、分かったよ」

北郷さんの顔色が下降中なう。

だが俺は気にしない。

「よろしくお願いいたします」

よし、これでなんとか。

「では、お詫びと暫くの付き合いに、宴席を用意いたしました」

ポンと手を叩くと、数人の女官が宴席の用意を手に入ってきた。

ちなみに、この女官もアイテム屋で購入できる。

今回の場合、反応もろくに返さない、家具扱いのアイテムモブだ（帯をクルクルな悪代官ごっこはできない）ポイントかければ、それなりの能力値持ちのモブも雇えるらしい。

まあ、普通に周回して普通の人とかゲットして、副官扱いで侍って貰ったりする方が、能力高いし、コストも掛からないので、使う人は余り居ないらしいけど。

あ、因みに料理&スイートは忠誠100UPのアイテム仕込みです。

だいたい、一人あたり3つくらい当たるようには撒いてますが。流石に、皆が一緒だとブレイクしませんね。

「張飛殿は食べ盛りですからな、これもどうぞ」

やはり、追加で2つ渡してもブレイクしませんね。

「それでは、明日からよろしくお願いいたします。

あ、張飛殿と星どのは、少し兵達と顔合わせをお願いしても宜しいでしょうか？」

「そうですな」

「わかったのだ」

「俺は？」

「ああ、御使いどのは、しばし劉備どの達のお相手をお願いいたします」

「判ったよ」

で、引き離れた所で。

「おっと、張飛どの。 飴玉を出すのを忘れておりました。

皆には内緒ですが、いかがですか？」

「おっさんは、いい奴なのだ。

だから、鈴々を鈴々って呼んでもいいのだ」

「これはこれは、ありがとうございます。 では、これをどうぞ」

敢えて500ロツクの指輪を渡して置く。

リカバリーの効きやすそうな張飛さんには、どれくらい削れるのかの目安になって貰おう。

顔合わせのあと、二人と別れた。

「さて、明日からが楽しみだ」

で、翌日。

「うん、駄目だこりゃ」

「はうー」

決済の山を前にプシューと煙吹いているのは劉備さん。

劣化ってレベルじゃないぜとか思ったけど、考えたら政治のパラって俺の40とかより普通に高いはず。

それに、経験値がないのは俺も同じなわけで、多分劉備さんと同じか低い位な筈の関羽さんが、劉備さんを気にしつつも、こうもバリバリやれているのだから、何か違う要因のような気がする。

って、普通に頑張って仕事してる場合でもなかったか。

「煮詰まっているようですので、お茶にしましょうか」
「すみません」

というような理由をつけて、お茶とお菓子に1000UP系のアイテム仕込んでおく。

うまくすれば、これで劉備さんはブレイクするはずなのだが……。

「あー美味しーです」
「桃香様……」

ブレイクしませんでした。

なんか、君主には隠しの条件付でもあるのか。

関羽さんの場合には、何がしかのプレゼントなりを受け取って貰うのに、それなりの理由を用意しないと、好感度低い状態では固辞されてしまうから、攻略難易度が高いんだと思うが、劉備さんの条件ってなんぞ？

「ねー、満腹さん」
「はい、何でしょう」

あー、お茶うめえ。

「みんながみんな、笑って暮らせる世の中って、どうしたらいいのかなーって」

あー、そんな風に別のことを考えてるから能率ががががが。

じゃあ、そのへんに何かしら答えを上げれば、覚醒劉備になるのかね？

あー、なんか主人公の北郷さんも、そんな事やってたし、そのへんが攻略の鍵か？

でも、世の中みんな笑って暮らせるとか……ああ、理屈と方法だけの提示なら出来るか？

つか、そんなにどつかの二次創作見たくきつちりした答えじゃなくてもいいのかねえ？

社会主義とか仕込んだら、目をぐるぐるさせて、同士諸君とか言い出す劉備さんが見れたりするのだろうか？

うはー、ちよつと見てみたいが、ここは無難に行っておこう。

「劉備殿、この土地の者は、それなりに皆で笑って暮らせていると思いますが、如何でしょう？」

「うん、白蓮ちゃんが、頑張ってるんだね」

「だとすれば、この土地のやり方を学んで、笑顔のない土地で行えば、少なくともこの土地のようにすることは可能ではないでしょうか？」

実際は、上に居る連中をどうするかが難問なんだけど、今は触れないでおこう。

「そつか。そつかも知れない。」

でも、他の人達はその間も」

「劉備殿、一度に全てを行えると思うのは、思い上がりではありませんか？」

「ええっ!？」

「金千殿」

関羽さんが怖い顔をしている。

「劉備殿、少なくともはくけ、いや白蓮様は行動し、この土地を人々が笑顔で生きられるように尽力しております。」

私も、その為に働いております」

「それは良く判ります。だから、他の皆も同じように!!」

「それは違う。」

劉備殿がするべきは、ただ漠然と夢を追うのではなく。

一人で一步を積み重ねるか、白蓮様のような、同じ夢を見られる者達を友とし、その者達の旗となる事でしよう」

はい、ここで、運を100ポイント消費して魅力をブーストします。

関係あるかどうか判らないけど、必要能力とか探るのが面倒だから、井勘定で押します。

「!？」

「!？」

あ、パリンとブレイク行きましたね。

劉備さんの条件は、覚醒に手を貸すとか、そういう事なんでしょうか？

「まあ、前者については本来は下策、お勧めは後者ですが、どちらにしる、今の劉備さんのように、ただ徒に時を過ごしているだけよりは、随分とマシでしょうな」

「はうっ」

「桃香様!!」

劉備さんが心臓抑えてばったり机に……すげえ揺れましたよ。

「満腹さん!! わたし、私、目が覚めました!!」

劉備さんは、うつ伏せたままそんな事を仰ると、途端に跳ね起きてブルンっと、じゃなくて。

「先生って呼んでもいいですか!!」

「は、劉備さん?」

「桃香様!?!」

「桃香って呼んで下さい!!」

「ちょ、劉備殿? それ真名じゃ」

「はい!!」

「桃香さまっ!!」

と、唐突過ぎて吹いた。

「そ、それは、構いませんが……」

「よろしく願います!!」

拳を握りしめて、そんなに力込めて見つめられても、いや、落ち着け、チャンスを逃すな。

「わかりました。この金満腹に、お任せ下さい」

という事ならば。

「では、これをお二人にお渡しいたしましょう!!」

そこそこのレベルの政治上げの本を二つ。

「お二人には、それを今から読み込んで頂きましょうか」

「え、ええ。こんなに分厚いのを」

「わ、私もか、いや、私もですか……いや、これも桃香様の夢のためならば。」

うむ、そうだな。

金千どの、私の真名は愛紗だ。

受け取ってくれ」

「よろしいので？」

「ああ、よろしく頼む」

劉備・関羽ゲットー。

「真名をお預かりした変わりと言っては何ですが、これを、お受け取り下さい」

と、さりげなく、二人に指輪を渡した。
さて、流石に、これ以上を引っ張るのは、危険と言っより集中力が切れるな。

リタイアしよう。

8（前書き）

感想なぞ頂きまして、ありがとうございます。

ご期待いただいてると思うと、ドキドキしますが、今後も駄文を生暖かく流し見てやって下さい。

PS・メアリー・スーにならないか心配だというお言葉を頂きましたが……ぶっちゃけ、メアリー・スーになろうとでも言うべき方向性なので、ご注意下さい。

また、劉備さんにご期待とのお言葉もありますが、マイ外史内では、同一武将の複数存在がありえますので、基本ヒヤッハー側は黄巾モブになると思いますが、ダーク 桃香とか出たらごめんなさい。

設定画面から、外史からの帰還を選択。
再度の確認画面にて、是を返すと共に、周囲の景色が現実感を薄れさせ、足元の確かさが失われていく。

はっと、何かしら、居眠りから突然覚めたような感覚。
本日何度目かの感覚から数瞬、今の自分が何をしていたかを思い出す。

「なにか、こう。
自分でビクツとしたのに驚いて、居眠りから覚めるような感覚って、どうにかならない
もんかなあ」

「それは難しいことのようにだぞ。
開発の人間も、人間の脳みその働きがくつきりとデジタルで、ON/OFFをきっちり
認識できれば苦労はないとこぼしておるわ」

またしても世界が震えるような声。
しかし、どこか愛嬌を感じるような貂蝉の声と違い、威厳と言いか威圧をはつきりと感じる。

しかし、どこかカマっぱい気持ちの悪い「やかましいわ」

「わしの名は卑弥呼。
このタイトルでマイ外史の案内人を努めさせて貰うパーソナルじゃ」

どうして、この人選にした。

「さっそくじゃが、説明に入るぞ。

マイ外史とは、お主がゲットした武将やモブ達との邪魔の入らぬエキストラステージで

あり、お主の外史での活躍を助ける、人材・戦力・物資・装備等を整える為の拠点であり
保管庫でもある」

「ほう」

「お主のマイ外史じゃが、現在は先程までの町周辺がテーマとされて選択されておるが、
外史の行動範囲が広がる度に、街や戦場として切り替えることができるテーマは増えてゆくぞ。

また、ポイントショップで購入できるテーマには、現代の街並み等も用意されておるの

で、覗いてみると良からう」

「ああ、なんか学園モノとか、タイアップ物とかあるらしいな」

「うむ、れつつ、えんじょいするがよい」

れつつえんじょいて……。

「では、次に現在のこのマイ外史じゃが、当然の事ながら拠点レベルは¹。

少々大きめの村に砦がくつついておるようなもんじゃな」

「それを大きくしていくつてことか」

「そのとおりじゃ。

各施設などには武将や人物を配置することで、効率を上げたり規模を大きくすることが

可能じゃ。

誰もいない場合には、プレイヤーの能力が基準として割り振られるぞ」

なるほど。

「まあ、政治向けにパラを振ったプレイヤーならば、一人でもそれなりに大きくなっては行くかの」

「じゃあ、武将タイプに振ったら、不利なのか？」

「いや、そこで登場するのが、チュートリアルでゲットしたであろう白蓮ちゃんじゃ。

彼女を副官にすれば、プレイヤーの弱い所を補ってくれるからの。そうすれば、政治が10でも何とかなる。

おおよそプレイヤーと副官、二人の能力の平均値になると思っってもらえば間違いないぞ」

なるほど、普通の人がチュートリアルに来るのは、それなりの理由があつたのか。

「因みに、政治向けに振った場合でも、居ると居ないでは大きく差が出るからのう。

40の能力でも、白蓮ちゃんなら強化してくれるし、治安関連は統率・武力が重要じゃからな、そこが10とかなら、やはり強化は必要じゃ。

むしろゲットに失敗しているなら、キャラクターを作りなおして、チュートリアルから

やり直るのがオススメなレベルじゃな」

流石、万能型だけはあるな。

「とはいえ、武將が複数人になってくれば、能力を見て直接配置した方が効率が良いぞ」

「ふむふむ」

「あと、注意じゃが、外史では副官という形での能力引き上げはできません。」

あくまでも、戦闘部隊の副部隊長なり軍師なり。

内政の場であれば、配下の文官として、その個人に仕事を割り振ることになる。

全てに反映させるということはできんだ。

とはいえ、すべてをプレイヤーが握る場面というものは、早々無いの。

白蓮ちゃんを傍においておけば、その能力を発揮する機会というのは多いじゃろうな」

俺の場合は他にも人物いるから、ある程度振り分けも可能か。

「それから施設についてだが、ポイントで購入できるものもある。

基本的には拠点規模の上限によって縛られるが、便利なものも多いから見ておくと良いじゃろう。

オススメは兵士上限を上げる兵舎・騎馬を編成するための牧場、装備を上げるための工房などじゃな。

この辺りは少ない投資で、購入できるので早期に作っておくのがよいじゃろう。

他には物資収入に効果のある屯田・港・街道、兵士の士気や街の満足度にも影響の出る

「高名な料理人」なども面白いかもしれないな。

まあ、このへんのオプションは高額なポイントが必要だからして、初期には購入しにく

いものであるが。

あと、ここでの兵士の扱いであるが、基本的に外史において所属陣営等で預かるインスタント

な兵士と違い、個々人の私兵扱いとなる。

大凡、インスタントな兵士よりも兵数は少ないが、士気・練度・装備などで優位に立てるので、上手く使うとよいじゃろっ」

なるほど……現状の兵士数の100が最低値か。

士気・武装度・練度が黄巾並みっていう表示はどういう扱いなんだろう？

これより下がるとどうなるんだ？ 袁術兵並みとか？

「とにかく鍛えておけば、切り札になるのか」

「暗殺よけにも重要じゃな」

「ちょ、そういうえば、PK行為って割と推奨気味なのか」

「同陣営で、狙いが被っている時の血みどろの争いは、中々にへびいじゃぞ」

なんでそんなに嬉しそうかなあ。

「ちなみにその部隊にも、人物等を配置できるが、外史で全滅などすると、戦死扱いでマイ外史に送られるぞ。

この時点ではロスト等は発生せんが、大幅に忠誠度が下がる為、それが原因で出奔する可能性はある。

これは、理不尽な行い（平和共存を説いて加入させた武將に、盗賊行為など）を強要したりすることでも起こるので注意じゃぞ」

あれ？

「まあ、マイ外史でのロールプレイなどを考えるなら、仁君プレイや、ヒヤッハー系の無法者プレイではキャラクターを分けておくのがよいじゃろうな。」

考えの異なる人物を集めておくと、忠誠の下がり易くなる環境になる故な」

マジですか……。

「じゃあ、1キャラクターで色々やってみるのは、無理だったりする？」

「あまり想定されておらんな、おそらく難易度は高いだろうのう」

ぐはあ……。

「と、とりあえず、何かアドバイスは？」

「キャラクターで分けられないなら、マイ外史内の拠点を複数用意し、そこを分割して運営することくらいではないか？」

しかし、これは拠点の規模が、ある程度以上に伸びた後、成長が頭打ちになってきた際、新しい拠点を作り、お互いを結び合ってさらに発展する為の機能で在って、お互いを独立させ結ずに拡大していくというのは、人材リソースやコスト諸々、非常に無駄が多く難易度も高いぞ。

本来なら、ひとつの拠点を運営出来る人材がおれば、それを移動することで、次の拠点を開発できるが、それを封じるということは、個別にそれなり以上の人材を確保なり強化しなければならん。

あまりオススメはできんぞ」

ふーむ、忠誠度的には無理は利くにしろ、たとえば劉備さんにヒヤッハーさせるのはどうにもなあ、夢と希望にキラキラしてるしな

あ。

やっぱり、キャラクター分けて作るか？

ヒャッハーするなら、気兼ねなくやりたくもあるしなあ。

どうせ、キャラクター強化する金は、無駄になっても問題はあまりないしな。

「ふむん、だが、メリットもないわけではないのう」

「は？」

「なんじゃ、ワシはデメリットだけを告げるのもどうかと、頭を絞っておったのだぞ」

なんで、こういうところは職務に忠実と言うか真面目なんだ。それなら、真面目なキャラクターを採用しろと言いたい。落差につかれるんだよ。

「それはごめん、色々と考えてて。

それで？ メリットって？」

「まあ、手の内における引き出しの数じゃな」

「どういう？」

「たとえば、仁君プレイをしておっては、流石に暗殺なんぞできる人材を、確保しておくのは難しい。

ある程度の手の内は、ロールプレイに縛られるのは間違いないのだ。

じゃが、複数の違うロール（役割？ 傾向？）を1キャラクターでまかなっておれば、イザという時に手を回す手段は多く持てるわけだのう。

一見人徳者、しかし中身は越後屋プレイといえれば判りやすからう」

判り難いわ。

「まあ、決めるのはお主じゃ。所詮はダイブシステムの中の夢、お主が浸る為のごらくじゃ。」

強制も義務もない。好きにやるが一番だわい」

身も蓋もないな。

とりあえず、この拠点を弄ってから考えるかね。

9（前書き）

にじふあん見てたら、名前出て吹いた。

こんな駄文でも、読んでくれていると嬉しいです。

あと、これを見てる人の他のお気に入り作品見ると……お気に入りが自分と随分被ってて、色々と読み直して来たですよ。

あ、理想のヒモ生活、第一部エピローグだったので、全部読みなおしてきました。

あ、劉表伝と地味は愛すべき　復活しないかなあ。

とりあえずは、両立するにしろ、内政メインで行くにしろ情報が欲しいな。

まとめでも見るか。

FAQ

Q・マイ外史の拠点運営のお勧め、教えて。

A・内政振りプレイヤーキャラクターと、初期白蓮さんのみで、ひたすらマイ外史内政プレイ。

外史？ なにそれおいしいの？

白蓮さんは俺の嫁。

A・ヒヤッハー！！ 新鮮な村人だー！！

初期白蓮さんは、ヒヤッハープレイにも寛容で、忠誠度下がらずにいてくれるので超大事。

金と装備は略奪で、兵力は湧いてくる敵盗賊吸収して、食料だけ生産拠点作れば、結構な戦力を割と簡単に揃えられるので、戦争大好きならオススメ。

あと、兵種は初期のマイ外史から牧場作れるので騎射がいい（異民族とかのモブでも適性持つてる連中が多い）

水軍作りたいなら、一回南に行って赤壁あたりで乙ってくるのと、河賊が出てくる土地に切り替えできる。

ただ、水軍適正持つてるモブは少ないので、荊州あたりでネームド・モブを取っ捕まえる苦勞あり……さいちゅー・さいかとか出てくると、プレイヤーでも取っ捕まえやすいのでラッキー。

A・内政＋南蛮でケモ武将（ケモミミ・モブ武将）を食い物でつって来て、動物王国プレイ。

南蛮のランダムモブは、バカに出来ない。

猫耳だけじゃなく犬耳、狐耳も出るのだ。

レア亜種ネームド・モブで祝融・孟優が出る場合に虎耳・狼耳とか出る場合すらあるのだ！！

しかも祝融はロリじゃなく、みい達の保護者ポジションの犬耳熟女だったりする可能性も！！

大部分は、みいたちに振り回される気弱系ロリだが。

孟優は、概ね虎耳アタイ系？。

A・俺、南蛮巡りしてくる。

A・どこに食いついたのかスゲー気になる。

A・金山・銀山は購入ポイントが高額で、一定期間で消滅する為、探索で見つかればラッキーくらいに思いがちだが、銀山はともかく金山は、最終的に購入ポイントの五割増しのポイントを吐くので、投資としては、そう悪い選択肢でもない。

A・『高名な厨师』はかなり大事。

士気の底上げだけでなく、プレイ中の飯のバリエーションが……。

素の状態だと、行軍中は塩むすびとか出てくるぞ。

A・魏陣営のプレイ後だと、舌が肥えて素の状態には戻れない……
…華琳様と流流ちゃん、マジ偉大。

あと黄蓋さんのチンジャオロースー、ちんこ太守から半分強奪したけど、かなりうまかった。

因みに、序盤の蜀陣営は相当に寂しく切ないので、料理系のアイテムあげると張飛が釣れる。

A・マイ外史を内政系プレイで進めていて、急に外史の狙いが戦争中の武将とかになった時、むりくり兵力をひねり出すより、主拠点から離れた場所に隠し砦系（ヒャッハー系無法者用の拠点）を建てると、釣られて周囲に敵対山賊と略奪用の村が沸くので、そいつらを降伏させて吸収するか、討伐して義勇兵募ると費用抑えて兵力を増やせる。

ただし、練度や装備等がボロボロの連中なので、そのあたりに金を使うことになるのと、敵対山賊連中と略奪用の村は周囲に悪影響を、ヒャッハー系の拠点も他の拠点到悪影響を招くので、用が無くなったら破壊もあり。

ある程度以上離しておけば、それなりに影響度は抑えられるので、その辺りは要調整。

なるほど、両立とまでは行かないにしても、利用する方法が皆無って訳でもないのか。

今の感じだと、まず両拠点は、思いっきり距離を離す。

拠点同士、やり取りをさせないなら、距離はデメリットにはならない筈。

副官は、初期の白蓮さんで固定が無難。

表に見せるのは、仁君プレイ。

ヒャッハー側と表の兵士は混ぜない。

部隊長等も、同じく。

下手に混ぜて中途半端な軍勢になるよりは、数だけで使い捨てても良いヒャッハー部隊と少数精鋭の部隊を使い分けるのが、運営が楽そうだ。

大体、ヒャッハー系の武将は、大方モブ武将になると思われるの

で、そこは数で押す。

あと、綺麗な拠点は食料重視・ヒヤッハー系は金銭重視。
そんな所か。

じゃあ、ちよつとやってみるかね。

あ、南蛮がちよつと興味をひくなあ。

さっそくマイ外史に入ると、ガクツと居眠りから覚めたような感覚の直後に、懐かしい風の匂いを感じた。

「ああ、なるほど。イメージが普通の人の拠点だな」

ついさっきまで、外史の中で働いていた職場にそっくりで、妙な安心感がある。

ただ、自分が太守的なポジションに居るのが、変な気持ちではある。

「基本的にサブ体質と言うかNo.2気質なんだよなあ、俺って」

中高で学級内の委員決める時に、自薦他薦から外れてラッキーを願うよりは、内申と影響力と実務の兼ね合いを見て副委員長に自薦するような。

あれ？ ちょっと違うか。

「えーっと、現在の状況はっ」と

意識を浮かせて俯瞰モードに入る。

眼下に離れていく、プレイヤーキャラのおっさんアバターが自律行動を始め、トコトコと拠点の執務室に入り、ペタコンペタコンと決済の判子を押し始める。

周囲の施設では顔に影の入った、おっさんアバターA・B・Cみtainなのが、兵士や文官に指示出しをしている。

これが、人物の割り振りしてない場合に、プレイヤーキャラの能力コピーが用いられるという意味か……華がねえ。

ただ、能力の反映か、施設が地味に工事で拡張されていくのを見るのは妙に楽しい。

なるほど、FAQの内政ブレイ云々というのも、判らなくは無いな。

自律行動中は、外史中と同じく時間が加速するらしく、しばらく見ていると、施設などの拡張も落ち着いたようだ。

というか、これ以上は何も手を加えず、能力の割り振り分だけでの限界ということか。

「ふむ、まずは普通の、いや、白蓮さんに会いに行くことから始めるか」

俯瞰モードを中止すると、上空からおっさんの姿に重なるように、視点が落ちて行く。

重なる瞬間、意識がふっと遠くなり、次に目を見開いたときには、自分の目として、筆を持つ手が目に入った。

「さて、行くか」

拠点の一角に、人物の私室が連なる棟がある。

一度、人物の部屋を訪れることで、その人物をマイ外史内で活動させることになる。

また、ここを切り替えると、学園シチュとか、オフィスシチュなんかで、れつつえんじょいができるようだが、今はいい。

入り口に立ち、人物を念じつつ、一步を踏み出すと、扉の前に立っている。

この部屋が公孫伯珪、白蓮さんの私室だと感じ取れる。

「白蓮殿、今よろしいですか？」

声を掛けて暫し待つ。

「少し待ってくれ……」

声が返って来て更に暫し。

扉が開いて、白蓮さんに迎え入れられた。

「それで、どうしたんだ？」

椅子を勧められ、茶を目の前に頂く。

女性の所作ついていいよなあ、とかなんとか、ぼうつとしている所で、白蓮さんから話を切り出してくれた。

「ああ、すみません。」

実は、白蓮殿にお力をお借りしたく

「かまわないぞ!!」

うお、ビックリした。

即座の超反応、しかも身を乗り出すようにしてくるものだから。

「ば、白蓮殿？」

「そ、そんなに驚くことか？」

べ、別に、ちよつと暇だから手伝ってやるっただけだぞ」

「いや、そんな、無理にキャラを作らなくても」

「無理って言うな!!」

キャラって言葉はスルーなんだな。

しかし、なんでツンデレ風味になってんだろっ。

でも、そんなのも、妙に可愛らしく見えるのは……。

「ああ、なるほど、肩の力が良い感じに抜けておいでだ」

頑張りすぎな硬い感じが抜け、余裕の分だけ、普通・地味さ加減が、安堵感・其処にあるべき空気感とでもいう、包容力にも似た女性らしい雰囲気になり、こちらへ新しい魅力を伝えてきている。

「そうか、自分では変わった気はしないんだけどな。」

多分、お前に頼れば良いって、判ったからじゃないか？」

「そう言っていたけると光栄ですな」

はははと笑うと、白蓮さんが、ずっと視線をそらし頬を染める。
やべえ、すごい自然に可愛い、普通の人最強すぎる。

メーカー頑張りすぎじゃないだろうか。

AIとかちよつと信じられない。

劉備さんやら関羽さんやら趙雲さんには、あり得ざるような魅力を感じはしたが、こうも自然で魅力的な人物を人の手が創り出すとか……いや、落ち着け俺。

そういう理屈っぽいのは、ポイしておけ。

うん、OK。

俺はメーカーの罠に踏み込んで、嵌つてのめり込むのだ
よし、覚悟完了。

「それで、白蓮殿にお願いしたいのは「なあ、」はい？」

「その言葉遣い、何とかならないか？」

「はあ、しかし」

「ここじゃ、お前の方がって、私もどうかしないといけないか」

「そうですね」

顔を見合わせて、二人で苦笑。

何々大笑できないのは、苦勞性やら貧乏性がこびりついてるせい

だろうか。

「では、白蓮殿。私の補佐をお願いしたい」

「了解だ。任せて貰おう……主殿」

ちよつと恥ずかしそうにする白蓮さんに手を差し出し、了解をもらった。

「なあ、ご主人様とかの方が良いんだったら「いえ、主殿で十分です」そうか」

なんで、落ちをつけようとするのか。

さて、そのまま連れ立って、二人で拠点の執務室へ。

「で、私は何をすればいいんだ？ 主殿」

「白蓮どのには、全体としての補佐をお願いします」

「分かった。じゃあ、何から手をつけるべきかな」

白蓮さんが資料を手にフムフムと頷き、なるほどと納得を繰り返すこと数回。

「現状、税収から足が出ない範囲での拡張は終わっているようだ。流石は主殿、優秀だな」

「随分と過酷な職場で鍛えられましたからね」

「確かに、よく平気で過ごせていたと思うな……今から戻れと言われたら泣くぞ、私」

「「はあ」「」

あまり気にしないことにした。

「これ以上の施設の拡張については、収入に足が出るのを覚悟で行うか、余裕ができるのを待って行うかだが。

むしろ、現状の施設の外へ、新しく縄張りを広げるべきだろうな」

ですよね。

初期の施設だけでは、人の増え方も鈍ってきてるし。

「とりあえず、付近に村を開拓して人口と税収の底上げ。

ある程度の規模になった所から、新規の農地を利水の良い所に固めて配置。

河口に港、街道に宿場と馬駅を置いてマップ外に連絡、物資の過剰や不足を取引でバランス取れるように。

山林に切出し小屋、炭焼き場、「ちよつとまで、「うい？」

「それを一刻にやるつもりなのか？

どうしたって、税収で賄いきれる規模じゃないだろ。

予約にしたって、優先順位を決めてやらないと上手く回らないぞ」

「白蓮殿のご懸念は確かに。

ですが……」

確かに、マイ外史の施設の設置は、アイテム扱いの代物以外は基本、税収の範囲の中でやりくりしていき、税収が伸びた都度、新しい施設なり開発を行うもので、ポイントを持っていたても、なかなか開発には反映しづらい。

だが、時たま見つかる金山銀山は、一時の税収を底上げして、開発スピードを上げてくれるものであり、それ自体は購入できるアイテム扱いのシロモノであるので。

「金山が100もあれば、問題はないと判断しますな」

ポイントショップで、金山を100購入、5万円なり。

金山：購入5000ポイント、一回の税込時に500ポイントの増加。 15回のポイント出力で消滅。

銀山：購入3000ポイント、一回の税込時に500ポイントの増加。 7回のポイント出力で消滅。

ついでに、拠点に「高名な料理人」「高名な厨师」「味霸王料理会加盟店舗」を購入して配置。

味好酒保、菊下楼、味霸王料理会加盟店が出現。

各5000ポイント、差はメニューによるもので、料理人は独創的かつ家庭的な料理・厨师は四川押しやや高級なコースだが、奇抜なものも多い・味霸王料理会は、なぜか辛味が控えめになっているが、オーソドックスかつバリエーション豊富。

どれも、拠点や兵の食事のバリエーションが増え、拠点に人を集め、満足度や士気を底上げする。

更に「三国服飾店」「社練皮革具店」購入、タイアップなシロモノだが、プレゼント用の品物が増える。

あとは、工房やらなんやらが出来てから、親方系のアイテムも購入することになるだろう。

「なんというか……身も蓋もないな」

「身も蓋もないついでにこれを」

「……」

能力UP系の最上位+15を5種類渡す。

凄く普通の剣、軍配がわりの鉄扇、巻物2種・銀のピアス。

各15000ポイントとか、割とトチ狂っている気もするが、自分と白蓮さんで計10個、15万円なり。

ちなみに、これで白蓮さんは、アイテム無しの素の華琳様に若干下回るってレベルの能力値になり、俺はオール55。

ただ、そのまま信用していいのかは、かなり微妙。

アイテムの説明とか見てみると、能力値上昇の効果は、キャラクターについては、パラメーターUPそのままの効果が出るが、プレイヤーについての能力の増加分は、ベースで判定したあとの追加効果分という説明になっている。

例えば一騎打ちの技量については、ベースの40で判定されたあと、追加分の+15を含めた55でダメージ発生といったように、武力の増加分は攻撃力にしか反映されない様子だし、純然たる能力UPと思ってる足元救われるかもしれん（運の消費によるパラUPもベース基準だと思われる）

他にも、騎馬適正上げる鞍だとか鎧だとか、名馬だとか、遠距離適性系統の名弓だとか、雑多な個人用装備とかもあるが、そのへんは軍勢ができてから考えよう。

「ど、どうかな？ 似合うか？」

ピアスつけてみた白蓮さん……赤毛ポニーにシンプルだけど印象的な銀のピアス。

「イイ」

「そ、そうか。 イイか。」

「ワタシモイイトオモウゾ」

だめだー、なんで、こんなベタなドキドキがー！！

絵面は、援交オヤジ一步手前の犯罪っぽいになあ！！

二人してドモツたり黙り込んだりしていると、女官だの文官が決済を積み上げに来たので。

「「仕事するか」しましうか」

とりあえず、先送りしておいた。

仕事を続ける間に、税収が入ってきた。

50000ポイント底上げとか、わからしてくれる規模のポイント増加は、頭打ちだった初期拠点の施設のアップグレードを前進させ、用地の指定だけが済んでいた、新規施設の殆どを初期段階の施設とはいえ、一気に埋めた。

人口、実税収がほぼ倍に伸び、各々が更にアップグレードを繰り返していくことを考えると、まだまだ税収の度に倍々ゲームは続いていくだろう。

「さて、人口は増えたが、治安は悪くなっているぞ。

軍事に金を回さずに抑えるのは構わないが、余力がありながら不具合を拾うのも面白くない。

多少は目を向けてもいいんじゃないか？ 主殿」

「いや、ここまで急に伸びるとは思わなかったのだ。

流石に初期兵力の100だけでは、治安維持も難しいですね」

「私の国も、こうもアッサリ人口が増えると楽だったんだがなあ」

遠い目の白蓮さん。

「こちらだと、どこからともなく流れてきますからねえ、人が。

産めよ増やせよを考えなくていいのは、ある意味インチキですね」

「あと、戸籍が完璧とかな」

あー、楽でいいわーとは、白蓮さんの談。

「なるほど」

「えらい目にあつた」

拠点の一角、趙雲さんの私室の前に立ちつつ、息を整える。

「星どの、よろしいかな？」

「満腹どのか、少しお待ちを」

待つこと暫し、相変わらずの挑発的な格好で、こちらを出迎える趙雲さんは、朱の入った白い肌が艶かしい。

勧められた椅子に腰掛けても直視できない感じで、オドオドしていたら、いきなり酒が出てくるのはどういうことだろうか。

「まずは一献。度胸付けにいかがかな」

「頂きましょう」

うん、割りと言い。

擬似のくせに拘りを感じる。

ちゃんと酒飲んでる感じがするあたりも、成人向けなんだな。

「落ち着かれましたかな？」

「なんとか」

クスクス笑うのは、やめて欲しいが。

「では、参りましょうか」

「はい？」

いきなり、どうした。

「おや？ 違いましたかな？

てつきり、我が槍を用いるべき時が来たかと思っておりますが。
……おう、これは失敬。

伽をせよとの仰せで「いやいやいやいや。 星どのの武勇を必要

としておりますので、はい！！」

それは残念」

くそう、完全に遊ばれとる。

「それでは、参りましょうか」

「はいはい、お願いいたします」

疲れる……。

で、執務室に来たわけですが。

「おやおや、伯珪どの」

「なんだ？」

「いや、ずいぶんところ、見違えましたな」

戻ってきて、いきなり何か始まるし。

「あ！？ 私には似合わないってか」

「いえいえ、よく似あっておりますよ。 嫉妬したくなるほどに、

ええ」

って、こっちにジトーつとした視線投げてくるのはやめてくれません、趙雲さん。

「はいはい。 判りましたよ。

しかし、せつかく白蓮殿へ選んだものと同じでは芸がありません

しな」

とは言ったものの……ポイントショップって、膨大ではあるけど、微妙な代物も多いわけで……強いけど、どう考えても狙い過ぎな、ロンギヌスの槍＋綾波セット（プラグスーツ＋ヘッドセット）とか……。

って、お？

コスプレ用か、オリジナルメンバー衣装各種とかあるのか。

小物が5万から衣装本体20万ポイントって……おい。

ああ、2Pカラーどころか、12Pカラーとかまであるんだな。

しかも、能力付与ありか……白蓮さんにも、こっち送ればよかったんでは……書物とかじゃなくて。

まあ、いい。

この際、趙雲さんに趙雲衣装の色違いを送ってみよう。

恐ろしい事に、青地に金赤で鳳凰とか、黒地に銀青で五本爪の昇竜とか、漢王朝に喧嘩売ってる感のデザインもある。

ここは、あんまりそのへん気にせず、黒の衣装を贈ってみようか帽子、衣装、履物で二十五万ポイント。

帽子に知力・政治＋5、衣装に魅力・統率＋8、履物に回避・移動力修正UPという内訳。

武器の龍牙は、元々で結構な業物なので、そのままに。

「これなどは如何でしょうか？」

どこから出した的なツツコミは特になく、取り出された衣装を見る趙雲さんの目は厳しい。

気に入らなかったか？

「これは……俺色に染まり、二度と他の色に染まる事は許さんという『貴様は俺の所有物！！』的な意味と捉えて「どうしてそう」な

らばこの趙子龍、満腹殿いやさ我が使い手と共に、六道の底、無間の闇、終わる事無き修羅の戦場を駆け「話をきいて」「その爪牙となりて、この槍を振るいましようぞ」どうしてこうなった」
「説明しよう！！」

急に周囲の動きがとまり、停止した時間の中、野太い声が脳裏を震わせた。

「急に出てくるな怖いから」

マッチョ二号の突然さに、思わず素で突っ込んでしまった。

「むう、失礼な！！」

はっ、これはイタイケな漢女心を傷つけ、打って変わって優しい言葉で籠絡しようとする高等テクニ「違うから！！」「イケズじやのう」

気持ち悪いことを言うな。

そんなフラグ出たら死に物狂いで折ってやる。

「それより説明って？」

「少々振り切り気味の趙雲殿のことじゃ」

ああ、やっぱり、振り切り気味なんだ。

「もともと、趙雲子龍のキャラ的に『自分に見合う、仕えるべき相手を探し、己が力を十全に発揮する』という欲求があるのじゃが」

たしかにそういう部分はあるかもな。

「それが転じて、現状……『己が選んだ主に自分を使わせる』という、欲が突っ走り気味のようじゃ。」

通常、こういう暴走気味のテンションというのは、カンストオーバーの褒美やプレゼントで、一時的にカンスト上限を超えた数値になることで起こる症状じゃが、例のタイアップ商品の指輪……忠誠やら親愛やら数値維持の上に更にアゲアゲ状態じゃからな。通常状態に戻らん」

「それってどういう」

「しかもじゃ」

話し聞けよ。

「少々嫉妬入った所での、おねだりに『良い感じの答え』が返されて有頂天じゃな。」

まさに発酵腐女子に燃料投下状態じゃ」

なにそれ怖い。

「じゃあ、どうすりゃいいんだよ。ずっとこのテンションかよ。それに白蓮さんは其処までおかしげなテンションじゃないだろうに」

そのへんもキャラの差か？

「違う違ああうー！ おぬし、女心がわかっておらんのう」

「カママツチヨにダメだしされた！？」

「公孫賛殿の欲求には『支えられる事、共に歩む者が欲しい』等という辺りが含まれておる。」

そのへんが、突っ走って、強度の依存状態になっておるようじゃが」

そうだった？ 割と普通に見えるけども。

「ぶっちゃけ、一番に選ばれて、補佐を頼まれたことで満たされておるからそう見えるだけじゃな。」

ワシには、趙雲殿にちよっかい掛けられて、少々病んでるように見受けられるぞ」

マジか。

「実はここでワシが出張ってきたのは、GM権限での仕様確認のためじゃ」

「バグ？」

「我社はユーザー対応には定評があつての。」

まあ、実際は想定外に近い現象ではあるが、全体への影響は極めて微かじゃ。

だいたいアレを購入した人数は十指に足らん」

そんなに少なかったのか。

「じゃから、個別に確認しておるわけじゃ。」

購入キャンセルも含めた返金、アイテムは保持でのカンストオーバーへの対策、あるいは現状維持。

お主の望みどおりにしよう。

因みに他の連中は、間髪入れず「ナイスヤンデレ、ありがとう御座います」と笑って刺される道を選択したものが多いのう」

なんという訓練された連中なんだろう。

俺の答えは……。

まあ、考えた結果……現状維持、そのままにするという答えに。

実際に死ぬ訳じゃなし、こんなダイブシステムの中か、二次創作の中でもなければ、病んでくれる程に異性に思われる事も無いわけ。

他の大多数のプレイヤーには味わえない、特権みたいなものだと理解することにした。

「それでは！！ 現状維持でいいのだな！！」

無駄に洪くて威圧感のある声で、最終確認を求めてくる髭マッチョ、もとい卑弥呼。

「構わない！！」

気合いを込めて返答する。

「エロタイトルの設定変更の確認承諾に、そんなキメ顔をされてものう」

ほっとけ！！ どうせ一ちゅーねん！！

「では、時間を戻すぞ」

笑いを含んだ卑弥呼の声が遠くなり、周囲に音が戻り始める。

「そして、修羅場復活と」

胸を張る趙雲さんと、角が見えんばかりの笑顔で睨む白蓮さん。かなり怖いが、ここを乗りきれなくては先が思いやられる。

「星殿。これより、兵の内100を預けます。工房と厩舎から、優先で装備と馬を受け取り、調練を施して下さい。」

この先、部隊の規模は大きくなっていくでしょうが、その核となすべく宜しくお願いいたします」

「御意」

「白蓮殿は、引き続き補佐をお願いいたします。」

「了解だ、主殿」

で、暫く時間を進めていくと、再びの税収。人口も増え、実収入も結構な上昇率を維持している。

「人口こそ4000程度とはいえ、これは総て就労人口の上、軍政は完全な常備軍システムですか」

「施設のアップグレードによる効率も考えれば、この先は事実上の小規模地方都市レベルの生産力を持てるぞ」

「副官だと、メタな発言が増えますな、白蓮殿」

「雰囲気重視がよろしいのであれば、設定から副官の発言設定を変更してくれ、主殿。」

表現精度スライダーを具体的にから抽象的側へ、修飾レベルスライダーをメタから雰囲気重視へ移動させると、それらしくなる。

ただし、慣れるまでは数量などが掴みにくいだろうな」

具体的側とメタ方向へ一杯に動かしておこう。

「ふむ、主殿は俗に内政屋と呼ばれるプレイヤーの傾向があるな」

さいですか。

「僅かな数値の増加も喜びにするタイプでなければ、この設定は中々しないぞ」

「そういう所は否定できませんな」

「それで、これからどうするんだ？」

「ダイブリミットの一時間迄には、まだ少々の余裕があるが、外史の再JOINまでのデイレイタイムはそろそろだぞ」

身も蓋もない程にメタなことを。

「時間一杯まで使って、劉備殿達にも仕事を振っておきたい所ですが」

これ以上に修羅場が増えると、少々気が重いな。
なんてことを考えていると。

「ふう、主殿の心配は、少々自惚れが過ぎるんじゃないか」

白蓮さんに呆れられた。

俺は頭の中が読みやすいんだろうか。

「……そうですか？」

ヤンデレ風味の人に言われると、余計にキツイなあ。

「主殿、その目付きは、ちょっとカチンとくるぞ。」

とにかく、桃香達なら、そういう懸念の心配はないさ」

ちよいと眉間に筋立てて、白蓮さんが、そんな事を仰る。

一応、指輪受け取ってくれたから、認められたんじゃないのかね。

「ほう、それはまたどうして」

疑問を返してみる。

「あいつは夢にこだわるからなあ。

あれといい仲になりたかったら、あいつの夢に馬鹿みたいに付き合ってやるしか無いと思うぞ。

でも、主殿はそういう風じゃなく『桃香の夢への導き手』って事で認められたんだろ？

それじゃ、アイツに色恋感じさせるのは難しいだろうなあ」

なるほど、北郷一刀ばりに、外史の一周付き合って初めて、やっと恋愛って事だな。

「となると、セツトの関羽さんも？」

「だと思っぞ。

話を聞くと『桃香の夢を叶える役に立つだろう期待』って感じで、主殿を見るみたいだし。

多分、桃香の思いが叶い始めて、色恋に目が向くようになって、初めて主殿の気分に気が回るって事になりそうだな」

「気の長い話になりそうですな」

「もう、あれじゃないか？ 治安維持の巡回がてら、拠点を回って貰って、その魅力で民の心を掴んで貰えば、治安も安心、桃香も満足ってことになるんじゃないか？」

「なるほど。

ここの治世を見て貰っているうちに、先生扱いから、夢を叶える

パートナーについてことずな」

「私としては、そのまま忘れて貰う方が良いんだけどな」

「あははは、ところで、劉備殿と関羽殿がそんな具合だとすると、張飛殿はどうなのでしょう？」

同じようにセットで動かすほうが宜しいのでしょうか？」

あからさまに話を変えたので、じつとりした目でこちらを見なせる白蓮さん。

それでも、暫く考えこんでのち、答えを返してくれた。

「張飛はなあ、大義よりも家族大事って感じに思えるんだけどな。それに世の中の見方は、あの三人の中では一番ドライだと思うしな」

「あー、なるほど」

「というか、主殿。あれは犯罪臭が漂うぞ」

「いやいやいやー！ 流石に、そういう風には見てないからー！」

思わず、ロールプレイ用の補正がすつとんで、素が出たわー！！

「それならいいが、一応言っておくとだな。

戦争での殺戮行為のリアリティ制限解除、アダルト規制の解除等々には、賞罰の履歴を参照されることが有るし、ダイブシステムの中だからと、あまり酷いハラスメント行為があると、アカウント剥奪の上に記録されることもあるので注意だぞ」

「前科なんてないし、んなことする予定もないからー！！」

いかん、落ち着け。

すーはーすーはー。

よし、OKー！！

「話を戻しますが、白蓮殿には張飛殿はどう見えますかな？
劉備殿と別に扱っても大丈夫でしょうか？」

「今の桃香たちと一緒にしておくと、疎外感を感じるんじゃないか？
むしろ、こちらで構ってやり餌付けして……ああ、一人前の大人
扱いしてやるのもいいな。」

一旦、身内と認められれば、良く従ってくれるだろうな」

白蓮さんが黒いです。

「なるほど……。」

あ、大人扱いといえば確か……」

ポイントショップで外見年齢を変えるアイテムがあったな。

えーと、バストアップパー違う、サイズダウンパー違う……。

あ、メルモ玉（赤・青）各LV1・LV3・LV5・LV10。
これか。

え？ 永続メルモ玉（赤・青）各LV。

青でレベル分の年齢を成長、赤でレベル分の若返り。

通常版の効果期間は1日、永続版は対抗色でレベル分戻さない限り
永久に効果が継続。

ん？ 年齢についての注意？

注意：年齢操作の範囲についてはキャラクターごとの限界値があり、
それ以上には変化しません。

また、年齢操作による能力変化ありません。

キャラクターのパーソナルについての変化は、違和感のない
程度に影響されますが、交流の中での変化が優先されます。

また、若年への変化により、規制の範囲が変わる事も、ご
了承下さい。

ああ、ア　ネスさんがやってくるんですね、判ります。

こいつ使って、張飛を大人張飛に……あんまりイメージ湧かないけど、興味はあるな。

多分、スタイル的には残念な事に、なりそうな気もするけど。

「とりあえず、劉備殿と関羽殿は、セットで動いて貰いつつ、張飛殿は此方で動いてもらうと。」

それでは、少し話してまいりますので」

「ああ、ここは任せてくれ」

ということで、劉備さんの私室です。

「桃香殿、少し宜しいですか？」

「あ、はい　少し待って下さい」

少し待って、招かれた所で、関羽さんが居るのに驚いた。

「愛紗殿も此方においででしたか」

「満腹殿に頂いた書を、桃香様と読み込んでおりましたので」

関羽さんは相変わらず、指輪を受け取って貰えたとは思えない
感じの堅い反応……。

「あ、あの先生、お茶どうぞ」

あ、劉備さんが空気読んだ。

何気なくも、成長しているのか。

お、桃の香りがする、意外にお茶美味いな。

「どうですか？」

胸元にお盆を抱え、此方に笑顔で感想を求めてくる劉備さん……天然っぽい所が抜けて、凄まじい威力を感じる。

そして、小さな盆では隠せざる、胸元の凶器が押し潰されつつ形を変える。

思わず目が其処に釘付けになりそうなのを、理性総動員で動かして体裁を必死で取り繕うと、関羽さんのキツイ視線に意識を向けることで何とか落ち着いていた。

「美味しいですな」

「それは良かったです。」

あ、お茶菓子も用意しますね」

と言いながらパタパタ走って行った劉備さん……コケた。
見事にステーンと。

「と、桃香様！！」

関羽さんが助け起こしに行くと「ひーん」と鼻を押さえて涙を浮かべる劉備さん。

ところで、劉備さんは全開、関羽さんもチラチラ覗いてるんですが……白いのが。

警戒心と言うか、防御力が低いですねえ。

いや、別に何も言いませんが……あ、スクリーンショット取ってください。

「落ち着きましたかな？」

「はい」

赤い顔をしている二人を見やり、話を切り出すことにした。

「実は、お二人にお願いしたい事がありました」

「なんででしょう？」

警戒心が見えるのはどうかと思うな、関羽さん。

「実は、この街と周辺地域を巡回し、何か困っている者がいれば、手を貸してやって欲しいのです。」

「税込から、500ポイントの予算を組みますので、桃香殿の思う通りにして頂いて結構です」

「え、えへええーっ!!」

びつくりして固まるのはともかく、どこから声出してるんだか。

「私も出来るだけの事はやっている積もりですが、目の届かない部分はどうしても出て来るもの。」

「其処を桃香殿に助けていただきたい。」

「この経験は、桃香殿の夢にも役に立つ筈です」

「キリツと魅力に運を161ポイント突っ込んでブースト。」

「あ、わ、私の為に？」

「違います。民と私達の夢の為です」

「あ……」

ポロポロと劉備さんの瞳から涙が零れて行く。

「私、嬉しいのに、なんで泣いちゃってるんだろっ。
こんなに早く夢が」

「違いますよ、まだまだ一步を踏み出した所なのですよ」

とかやってると、ウルウルきてる劉備さんの横で、関羽さんも「
桃香様……」と目を赤くしている。

実は思ったよりチョロかったりするのだろうか。

「では愛紗殿、桃香殿を宜しく補佐願います。

桃香殿、宜しくお願いいたしますぞ」

「はいっ、頑張ります」

「御意!!」

と、というような二人に見送られて、外へ。

しかし、なんで二人一緒に居るのやら。

更に言つと、張飛さん抜けてるし、話も出なかったな……次は張
飛さんどこに行くか。

13（前書き）

ぶっっちゃけた感じ、張飛さんがオリキャラと化してます。

鈴々ファンには申し訳ございません。

ただのチョットしたやり取りだけで、特に踏み込む予定は全くなかったのですが、どうしてこうなった。

色々とやらかしてしまった気がしますが、これくらいは制限なしでも問題ないですね。

一部、誤字修正しました。

まさかの成長鈴々のグラとか有ったんですね……。

ここでの鈴々さんは、想定はプロポーシヨン完成しちゃう前の過渡期くらいのイメージで、また髪も伸ばしてて、ちょっと女性側に意識がシフトしてる感じを想定しております。

「鈴々殿、少々宜しいか？」

「ふむー、おっひゃん？ ひよっほまふのだー」

なんか食ってるのかね？

「む、むぐー！！ うううううう……………」

シーン。

「は？ 鈴々殿？ 張飛殿？」

大きく戸を叩くも返事はない。

いや、微かに呻く声がするか？

いや、でも、流石にそんなイベントがあるとか……………無いとは言い切れないか。

「鈴々殿、入りますよー！！」

幸い、戸に門は掛かっていなかったらしく、押し開けることができた。

しかし…………。

「ちょ、張飛どのーっ！！」

張飛さんが喉に餅を詰まらせ、白目を剥いてピクピクしていた。慌てて体を横向きにし、回復姿勢で背中を叩いても吐き出さない。指を突っ込んで、無理やりあげさせると、やっとこさ餅を吐いて

気道を確保できた。

酔っぱらいの介助で慣れているせいで、なんとか慌てずに済んだが、ゲームの中で救急研修もどきな事をやらされるとは思わなかった。

床と手を拭き清めて、手ぬぐいと水を用意して張飛さんの顔を拭いてやる。

「けほつ、けふつ。 うーん、気持ち悪いのだ」

そりゃ、餅で死ぬ人もいるんだし、楽ではないだろう。

「大丈夫ですか？ 危うく息を詰まらせて死ぬところでしたぞ」
「うーん……おっちゃんは命の恩人なのだ。 ありがとうなのだ」

ふらふらして顔色が青白いとか、冷や汗びっしょりだとか、表現が細かいのはいいけど、こういう日常に近いドッキリを仕込むんじゃない。

下手なホラーより、ビビるんですが！！

「お礼はいいですから、あんまり無茶な食べ方は、おやめ下さい」
「判ってるのだ……でも、愛紗も桃香お姉ちゃんも、忙しいからって鈴々の相手をしてくれないのだ。」

暇で仕方ないから、餅食べてるのだ」

いや、暇＝飯かよ。

それとも……むしろ、これが本当のヤキモチか？

「あの二人は、そういえば書を読むとか……鈴々殿も、一緒になさればよかったのでは？」

「うー、鈴々は難しい字を読むと頭が痛くなってくるのだ。」

それに愛紗が、鈴々は子供だから、見ても仕方が無いっていうのだ」

「それはまた、難儀な」

でも、そんなに年齢差あるんだっけか？

「だから、しょうがないのだ」

いや、其処で諦めたら試合終了って安西先生も……ふーむ、なんというテンプレートな脳筋。

「それでしたら、大人になってみますか？ 年を取るだけです」

「鈴々もおっきくなれるのか？」

「どこの事を言ってるのか判りませんが、三年もすれば、それなりに大きくなるのでは？」

「鈴々は一年でバインバインになれるのだ……！」

いや、そりゃ無理だろ。

「では、この飴玉をどうぞ。 とりあえず、一年成長します」

永続メルモ玉（青）LEVEL1を手渡してみる。

「見てるのだ……！」

飴玉をパクリと。

……

……

……

「「……………」」

悲しくなるほどに変化がなかった。
いや、髪の毛は伸びてるな。

「も、もう一年経てば大丈夫なのだ!!」
「そ、そうですね」

パクリ。

……

……………

……………

「な、なんか大っきくなった気がするのだ」
「一寸（約3センチ）くらいは伸びましたな」
「もう一年行けば大丈夫なのだ!!」
「そうですね!!」

……

……………

……………

「えつつ？ い、痛いのだ!! ギャーなのだ!!」
「な、なんですか？ うわ、目に見える速度で身長が伸びてる。
うわ、すごっ!!」

ビキビキなってるのは骨の音か？
成長痛ってレベルじゃ、ないんではなからうか？

「び、ビリビリするのだ」

「うわ……り、鈴々殿？」

なんか、身長が関羽さんくらいまで伸びてないか？

「お、大っきくなったのだ？」

「ええ、大きくなりましたぞ！！ 愛紗殿にも負けておりません！
！」

「ほんとなのだ？ え、な……なっていないのだあ！！」

なんか悲痛な叫びで、胸をさすってますが……ああ、なるほど。

「そ、そこは、い、一寸くらいは大きくなったんでは」

「おっさんは嘘つきなのだあ！！」「うぐはあ」「」

あ、俺、飛んで、る。

「おっさん、大丈夫なのだ？」

あ、へ、ああ、乙女の一撃で、ぶっ飛ばされたのか。

「ええ、なんとか大丈夫です」

顎がガクガクしますがね。

「ごめんなさい……なのだ」

「かまいませんよ、女性の恥ずかしい事に気が回りませんでした」

「鈴々、女性なの？　だ？」

「鈴々殿は立派に女性ですよ。　今の姿を見て子供だなんていう人はいませんよ」

「本当なのだ？」

まあ、やはりスタイル的には残念ですが、ビビるくらいの大変身ではありますね。

身長と共に手足も長く伸び、顔の幼さも顎からの線が大人びたものとなり、腰に現れた、くびれから腿にかけては、微かにふっくらとした曲線が備わりつつある。

その姿は中性的な妖精じみて……しかし、腕白なまでのパワーは健在で、華奢といって良い姿を大きく見せる程の生氣は、健康的な野生の獣を思わせる。

赤い髪も背中中に達するくらいまで伸び、髪型を整えれば、もっと印象は変わるだろうし。

一体、これは誰の妄想の産物なのだろうか、作品上で、こういう未来の姿ってあったんだろうか？

ぶっちゃけ、若年メンバーに興味はなかったけど、こういう変身を見せられると……すっげー気になる。

まあ、孫尚香、袁術、璃々ちゃん辺りは、遺伝的に期待できる感じではあるのだが、陳Qさんとか、どうなっちまうんだろう。

なぜか、はわわとあわわには、あんまり期待しない自分が居たりするんだけども。

あと孟獲とか……うーん。

「おっさん？　どうしたのだ？」

おっとっと。

「いえ、鈴々殿に見蕩れてしまっておりました」
「ば、馬鹿なのだ。そういうエッチなのは愛紗でも、見てればいいのだ!!」

おや、無自覚にそういう話題を口にして、周囲を赤面させるとかなキヤラクター設定だったような。
意外と耳年増だったり？

「いえいえ、別に男だからといって、女性の胸などにばかり目が行く訳でもありませんよ」
「おっさん、愛紗のパンツ見てたのだ」
「ぶっ」

そっぴや、初っ端の時、そういう事もありましたね。

「あれは見えてしまったのです。
流石に覗き込んだりはしてませんぞ」

「怪しいのだ……」

「そ、それは仕方のないことなのですぞ!!
胸にばかり見とれるわけではないのも嘘ではありませんが、見えてしまった物が気にならないかといわれれば、気になると言わないと嘘になるのです。

男なんてものは、綺麗な女性相手にはどうにもならない事が多いのですよ!!」

思わず拳を握ってしまっただぜ。

「じゃあ、鈴々の事も気になるのだ」

「なりますとも!!」

「おっさん、目が怖いのだ」

ぐっ、落ち着け俺。

深呼吸だ……すーはーすーはー。

「よしって、ぶっ!!」

鈴々どの何をしてんですか!!」

眼の前には、上着を脱いで、ちび丁と短パンだけになった張飛さん。

そう言ってる間にも、短パン引き下ろし蹴り飛ばして、伸びて食い込み気味になってる子供パンツが目に入る。

「汗で気持ち悪いから、水浴びでもしてくるのだ」

いやいやいや。

「鈴々どの、大人の女性は、そう安く肌を見せるものではありませんぞ。

それに、水浴び等せずとも、湯浴みの準備ならすぐにでも」

「風呂は嫌いなのだ」

ガルルとばかりに威嚇してくる張飛さん。

「鈴々どの、大人の女性とは、風呂等を苦手にしていて良いものではありませんぞ!!」

「ううう、でも、あんまり好きじゃないのだ」

「風呂のどこが苦手なのですかな？」

「愛紗が、熱い湯から頭を抑えつけて出してくれないのだ。それに、ゴシゴシされると痛いのだ」

関羽さんエ。

良かれと思うことが、裏目つてしまうのは良くある事ですが、関羽さん、頑固にそのまま行きそうですもんねえ。

「鈴々どの、風呂は別に熱い湯に浸からなくても良いのですよ。

ぬるい湯に、ゆっくり浸かることも良いのです」

「ほんとなのだ？」

「ええ、嘘は申しません」

「ゴシゴシしないのか？」

「それは、あまり肌には良くなさそうですね」

「だったら、入ってもいいのだ……」

よし、説得成功……。

「それはようございます」

「だから、おっちゃんも入るのだ」

「は？ いや、それは」

色々と拙いんじゃないでしょうか？

「だったら入らないのだ」

むう、せっかく説得したんだし、なんとか。

それに、アチラから言ってきたんだから、あまり気にしなくてもいいのか？

「はあ、仕方ありませんね。

ですが、私は髪や体を洗うのは手伝いますが、さすがに一緒に湯に浸かる訳には行きませんよ。

それから鈴々殿には、湯着を着て頂きます」

「判ったのだ」

まあ、そんな所か。

いくら華奢とはいえ、それなりに成長した姿なのを、ちゃんと自覚して欲しい。

いや、まあ、後ろ姿とか、髪長いし、それなりに色気を滲ませている訳ですよ。

本当に頼みます。

「ほらほら、湯着を着て下さい」

「一番なのだ」

裸で走るな、飛び込むな！

色々見えちゃうんですよ。

「ふわー、気持ちいいのだ」

「あまり熱い湯に浸かるのも疲れますからね」

「これくらいの湯なら嫌じゃないのだ」

湯着は着てても、濡れてラインが見えるから、あんまりというか

……余計に艶かしいのではないだろうか。

ひとしきり湯に使ったあと。

「鈴々どの、髪を洗いますよ」

「目にしめないのだ？」

「上手くやりますよ。」

「痒い所はありませんか？」

「気持ちいいのだ」

「流しますよー」

「体は自分で「頼むのだ……」仕方ありませんね」

手拭いに泡を起こして、みずみずしい肌にそつと触れる。

「あん、くすぐったいのだ」

「動かないで下さい」

ちよつと力を入れてこする。

「ひゃん」

「もぞもぞしないで下さい」

首から背中に触れる、

「うあ、ううん……勝手に動いちゃうの……だ」

手指に向かって泡を伸ばすように。

「はふ」

脇から胸へ、そつと。

「ひんっ」

「すみません、痛かったですか？」

「……だいじょうぶ」

腹から、臍の下へ……。

「ひゃん」

そつと触れると、ビクリと跳ね。

尻を浮かせて、腿から足先へ。

体を洗い終わり、湯で泡を流した時には、張飛さんはクツタリと、その身を此方に任せ、ポソリと呟いた。

「……やっぱり、おっちゃん、えっちなのだ」

まあ、しつかり堪能してしまいましたけどね。

全部終わってから気がついたのだが、張飛さんには500ロックの指輪しか渡してなくて、何気に300ポイントほど削れていたことが判明。

慌てて指輪を渡すついでに、バストアッパーも渡してみた。

1カップだけ上がるアイテムだが、全体的に華奢を通り越すような細身の張飛さんが使うと、思った以上に効果が見える。

それを見て言葉を失っている俺を見て、張飛さんはそつと。

「今度は鈴々が、おっちゃんを洗ってあげる……のだ」

呟いた。

どうやら、変なスイッチが入ってる時に、指輪を渡してしまったらしかった。

「で、これはどういことでしょうっ」

なぜか白蓮さんと趙雲さんに、両腕の関節を決められつつ掴まれて、連行されているわけですが。

「其処は主殿の方が、良くご存知でしょう。

先程、見違えるように女の顔をした張飛殿が、艶々の湯上りで通りがかりましてな」

「主殿に湯殿で色々とされてしまったそうだが」

「ちょ、ちょっとお待ちくださいま」「問答無用」「うそお」

色々とされてしまいました。

「ところで、鈴々殿は一体何を？」

白蓮殿と趙雲さんに、服剥かれて風呂に叩きこまれそうになり、彼女達が脱ぎかけの所で慌てて逃げてきた。

こんなオッサン姿を剥くとか誰得なんだ。

いや、そのまま色々あったのかもしれないが、こうも急だとヘタレが首をもたげてくるのだ。

流れで勝手に話が進んでいくのなら、半ば他人事でいいのだろうけども……。

「はあ、まあ色々と柔らかかったし、下着姿も大概エロいものではあった」

とかなんとか、反芻していると、執務机の下に隠れていた涙目の張飛さんと眼が会ったのだ。

「お、おっちゃあ〜ん。

あ、愛紗が、桃香お姉ちゃんが怖いのだ〜」

何がどうしてこうなった？

「とりあえず、出て来て下さい。

そんな所に居ると変な誤解を産みそうで怖いので」

「うん、わかったのだあ」

とかいって、膝にヨジヨジ登って来て、太鼓腹に身を預ける張飛さんは、人の話を聞いてますか。

十分に身長が伸び、私よりも頭半分くらい背が高いくらいの張飛さんが、膝に乗って体をこちらへ向けると、いくらこちらの座高が高いといっても、顔のあたりに胸が来るのですが。

あと、お腹を摘むのはやめてくれませんか、いや「ぷにぷになのだ」とかいわれても。

はい？　なんですか？

手を背中と頭に持つて行かれ……撫でれと？

「鈴々殿？」

「ごろごろなのだあゝ」

いつからニヤンコ属性が！？

「いや、関羽殿と劉備殿がどうかしたのでは？」

二人の名前を出すと、タレニヤンコになってた張飛さんの体がビシリと固まり、慌てて周囲を警戒する。

「……よし、居ないのだ」

「いったい、何が？」

無駄な緊張感に、こちらの声も硬くなる。

「愛紗もお姉ちゃんも、さっき会ってから、急に構ってくるようになったのだ」

「それは良かったのでは？」

「違うのだ。」

二人とも鈴々を着替えさせようとするのだ」

ああ、ピチピチですねって、身長30センチ近く伸びたのに、胸

とお尻が無理やりのくせに、腰回りは余裕というのは、一般女性泣きますよ。

思わず背中に回した手が、お尻に伸びてサラッと撫でてしまうのは、なんででしょうね。

あまり抵抗感なくセクハラしてますが、女性というよりも、綺麗なニヤンコでも撫でてるような気になってるんでしょうか。

「でも、着替えなら別に良いのではありませんか？」

「おっちゃん、えっちなのだ」

お腹を抓らないで下さい。

「お姉ちゃんの出してきた着替えは、フリフリ満載のリボン満載なのだ。」

あんなの着たら、絡まって死んじゃうのだ」

「そんな大げさな」

「それで、途中まで着させられた所で、愛紗が……」

おおっ、顔に影が入ってますよ、張飛さん。

「なんだか、目をグルグルさせて「しおらしい鈴々は……可愛いな」とかいつて、捕まえようとしてくるのだ……」

えー……。

「だから逃げて、ここに隠れてたのだ」

さいですか。

「判りました。」

其処は何かしましょう。

でも、着替えた方がいいのは間違いなさそうですね。

ついでですから、現在の背に合ったものを贈らせて頂きましょう」

とりあえず、裸足はやめて、ブーツ、ニーハイ、デニムの短パン、ノースリーブの襟付き開襟シャツ、背に虎刺繍入りで襟袖モフモフの革ジャンパー、指貫グローブ、スカーフの代わりに鈴チヨーカー、赤のスカーフは髪を纏めるのに使い、そしてベルトには何故かある、オーズドライバー……もどき。

入れるメダルはラトラーターコンボで決まりですね。

因みに、能力付加はグローブに攻撃力UP、革ジャンに防御力UP、鈴チヨーカーの魅力UP、バンダナに士気向上、目玉のベルトは先制奪取、攻撃速度UPと接近戦時に無手だとトラクローがつくおまけ付き。

なんとという前のめりな個人戦仕様……お値段は30万ポイントと普通に服が買えそうな感じです。

「おー、カッチョいいけど、あんまりエッチじゃないのだ」

「私は鈴々殿に、どういふふうに見られているのでしょうか？」

とりあえず、女性がおへそ丸出しなのは、あまり良くありませんよ」

「判ったのだ」

で、着替えたあとの張飛さんが、膝上ニヤンコの態勢でグダつてゐるのを撫でつつ、決済の判子をペタコンしてると、風呂上りの白蓮さんと趙雲さん、フリフリドレス握りしめた劉備さんと、ネコミミカチューシャ持った関羽さんが執務室に勢ぞろいした。

「ああー、先生ずるいつ……」「満腹どのっ……！ 鈴々を……くっ、羨ましい」

いや、その、みんなの夢がどうのと言ってた劉備さんはどこ行っ
た？

「ふうんだ、鈴々はおつちやんのニヤンコなのだ」「ほほう、主殿
は猫属性か、では女豹の衣装で」「膝の上だと……アリだな」

「だー！！！！ おまえら、さっさと仕事いけ！！」

ということで、なんとか皆を追いつけたわけだが。

「鈴々は何をすればいいのだ？」

「鈴々殿は「なあ張飛、そこかわってくれないか」「わかったのだ」
あの、白蓮殿？」

張飛さんと入れ替わりで膝に乗ってくる白蓮さん。

「張飛には護衛兼討伐なんかの時に、先鋒で出てもらえばいいんじ
やないか？」

元々、内向きの仕事には期待してなかったんだし」

「鈴々殿、それでよろしいかな？」

「鈴々、ここで番ニヤンコしてればいいのだ？」

「まあ、そんな所です」

「判ったのだ」

所で……。

「白蓮さん衣装替ですか？」

「ああ、チョットな」

ヒールにガーター、スリット深めのタイトスカート、胸元開けたブラウスにループタイ&カフス、ジャケット。

髪はポニーから結び上げて、耳元に銀のピアス。

手にはバインダーとファイル、胸ポケットにはアンテナ式の支持棒、そしてジャケットの下には何故かホルスターにナイフが吊つてある……ツリ目美貌の女秘書みたいな格好になってますが。

「似合わないか？」

「良いですな」

よく見ると、バインダーとファイルが竹簡、支持棒が鉄扇、長剣がナイフ扱いらしい。

こういう、テーマ替えと言うか、衣装替えは気分で行われるようだ。

そのうち、趙雲さんがウェスタンとかな格好で、出て来ても不思議じゃないのか……。

「ところで、主殿」

「なんでしよう？ 白蓮殿」

「一応、外史の再ジョイン可能の時間だ。」

「どうするんだ？」

そうか。まだ一時間しか経ってないのか、まるっきり数ヶ月くらい経ってる感じなんだが。

「一旦、ログアウトするとしますか」

「判った。それではな」

「おっちゃん、またなのだ」

目が覚めた時、部屋には他に誰も居らず、殺風景なマンション部屋に一人だけというのが妙に堪えた。

時計を見ると、やはり一時間程しか経っておらず、依存対策なのか現実感のない夢のように朧気になった、先程迄の記憶が寂しさを助長する。

そんな感傷に浸っていると、ふとサブコンソールに映る数字に目が行った。

約八〇万円……この一時間に使ったポイント購入代金。

思わず、全てが吹っ飛んだ気分になり、なんだか急に笑えてきた。でも、特に後悔はない。

「さて、まだ昼の一時だし、出前でも取ってから、もう一回ダイブするかね」

俺は器具を外し、出前のチラシでもないかと探しに起き上がった。

15（前書き）

馬券のくだりは要らんかったかもしれん。
現実側の人を出したついでに、勢いで……。

次回から二週目っす。

「出かけるのも面倒だし、手っ取り早いのはカレーかピザか」

ネットとチラシで、近場のデリバリー可能な飲食店探すも、あまりはかばかしい結果ではなかった。

とりあえずで、ドリンクがセットのピザを頼み、暫く待つことにした。

「ふんふんふんーっと」

待ち時間の間、ダイブなしでも見れるサブコンソールで、マイ外史の情報を眺めていた。

あわせて外史へ行く際の兵士や装備の準備もする。

「兵力で最精鋭といえるのは、趙雲さんに預けた1000だけか。あとは二軍の200と、使いきりのアイテム購入で使えるインスタントな兵士か」

インスタントな兵士は、練度・装備がかなり残念なので、使い所に苦しむのだ。

雑魚い装備アイテムや消費アイテムを合成すると、装備や土気などが上昇するが、使い捨てに其処まで手をかけるのもなあって話である。

「早めにヒヤッハー系の施設に手を出すべきかなあ」

ただそうすると、外史で使える兵力には余裕ができるかもだが、人材的に趙雲・張飛さん辺りが使いにくい。

忠誠度は下がらないにしても、辛そうな目で見られたりするのは嫌だしなあ。

まあ、白蓮さんは付き合ってもらうが。

あと、関羽さんと劉備さんは当面外史には出さずにマイ外史で様子見かな。

どうも読めないからなあ。

「ということであれば、次の外史で黄巾か異民族のモ武将を捕まえて引き入れるか。

南で水軍に手を出すのは、まだ早いだろうし、さつきと同じく白蓮さんの地元か、西の方へ行って涼州のほうか……」

異民族や賊のモ武将については、マイ外史のヒャッハー系施設で湧いてくる賊を取っ捕まえても引き入れられるそうだが、こちらの規模レベルに合わせられるらしいので、序盤のうちだと、能力二〇以下とかな一般人と変わらんのしかでてこないらしく、やはり外史で捕まえるほうが良いらしい。

運良くネームドモブなら、プレイヤーキャラにも引けを取らないそうだし。

暫し悩んでいると、携帯の呼び出し音になった。

週末に連絡が入るような相手は、土日のバイトをやめたあとでは、そうそう無い筈なのだが。

携帯の表示を見ると、見覚えのある喫茶店の番号。

今考えたバイト先の番号だ。

一瞬、出ないでおこうかと思ったが、週末は出ないにしても平日の二、三日は出ているバイト先だけに、無下にもできないかと思えることにした。

因みに他のバイト先はカレーうどん屋と深夜の居酒屋。

新聞配達やら引越しもやってたが、大学入る迄に授業料なんかの

目処が立ったので、やめた。

「はい、もしもし」

「ああ、休みのところ悪いね」

ちつとも悪びれた感のない女性の声。

喫茶店のマスターをやってる、二〇代後半の独身。

切符の良い美人で、悪い人じゃないのだが……。

「またですか？」

「ゴメン、ほんとーにゴメン。」

いやあ、引き落とし残高読み間違えちゃってさあ」

「で、どのレースなんですか？」

「いやあ、話が早くて助かるわ。」

10レースからメインまでなんだけどね」

俺は聞いたレースの番号をメモリ、再度確認する。

最近、銀行もサービス競争が激しく、ある程度以上の預金者には、色々と出来ることが多い。

その中には馬券の購入などもあり、本来なら電話相手も利用している筈なのだが、また一口馬主でも初めて、預金がサービス利用金額を割り込んだのだろう。

喫茶店の仕入れなんかは妹さんが居て、別口でやっているそうだが、こうもちよいちよい頼まれると不安になるな。

とりあえず、レースと購入馬券の確認も終わり、メモを見ながらネット経由でマークシートへのチェックをし、購入する。

「終わりましたよ。」

しかし、2万近くって、珍しく張り込みましたね。

一口馬主している馬でも出てるんですか？」

「違うよ、どうみても荒れそうなんですねえ。」

ホントはもつと買いたかったんだけどね、流石に代わりに買って貰うのに無理言えないかなーって。

あ、今度、お礼に当たったお金でデート行こうー!」

「いや、突然週末に店閉めて、競馬場に行く理由にするのはやめて下さい」

「ははは、バレたか。とにかくありがとね」

電話を切ると、先程のレースをネットで調べて見る。

予想情報ではガチガチの鉄板の様子で、荒れそうな感じでは無いのだが。

ただ、馬狂いの類で、結構馬鹿にできない勝率を誇る、あの人がこつも断言するのは珍しい。

応援ついでに、俺も買ってみようかと思い、メモった馬券の投票番号を眺めていくと、恐ろしいことに馬番連勝10万馬券や50万馬券に絡んでいるような不人気馬を軸に賭けている。

それでもまあ、たまには良いかと、被せるように購入してみた。ぶつちやけ、枠で買っても30倍以下は無いようなシロモノなので、軸馬から馬連で総流しとかでも当たれば儲かりそうな気もするのだが、それじゃあ応援にはならんだろうし、確実に当たるとか夢見過ぎだろうと、同じ馬券を買っただけにした。

まあ、購入金額20万超えしてしまったが。

そんな事してる間に、ピザが届いたので腹ごしらえを終えると、再びダイブする事にした。

器具を身に付け横になる。

導入用の音楽を聞きながらリラックスすると、いつの間にか浮遊状態で目の前にはメニューが浮いている。

外史への進入を選択。

登場地域を幽州へ、参加時のロールについては文官を選択。

参加させる人員には、白蓮さん、趙雲さん、張飛さん。

兵数は100を私兵として持ち込み。

ポイントや物資についてはマイ外史の拠点と連動ありに。

「さあ、行こうか」

俺は再び外史にダイブした。

16（二週目開始）（前書き）

毎度短くてすみません。

初期ポメラで8K制限もありますが、画面小さくて読み直しにくくて、どうしても千切りまくってしまいます。

こないだ新しいのが出てますが、なんかポメラじゃなくて良いデカさですよ。

というか、あのデカさで出すなら、WIFIでWEB接続できて、モノクロでいいからブラウジング出来るようにしてくれと思う。

因みに投稿は会社のPCからです（今日は暇で平和です）

あ、外史一周が約一時間で終了とか、ある意味で新しいなとガンダムネットゲーの知り合いに笑われました……名前を変えてんのに、どこからバレたんだろう。

あ、PSVITA、初期不良が怖くて買えません……毎回、なんであんなのか。

なんか、ユーザー名の使い方が、おかしかったようでユーザー名と登録名を合わせました。

16 (二週目開始)

気がつけば、俺は大部屋で竹簡持つて、書付していた。情報を見ると、公孫？勢力で間違いはないらしい。

ただし、かなり下っ端なんだろうな、前回と比べても更に地味でシヨボイ格好だ。

中年設定で、この立ち位置ということは、出世から立ち遅れているのかと思えば、周りもそう変わらない年代の連中も居るようなので、恐らく……人が居ない、ポストがない、ポストの幾つかを普通の人が兼任。

つまり、トップの下には即、現場担当者がいるというような、恐ろしい組織形態になっているのではないだろうか？

中間管理職が居ないのか、居なく『なつて』しまったのか、あまり考えたくないが、出世しないと話しにならないので、少し頑張ってみようか。

では、恒例のまとめWIKI、情報さらってみるとしよう。

初期JOBリスト／文官系まとめ

- ・ 商人売買 備蓄・武器等の購入売却。

俗に言う『おつかい』任務、行つて帰るだけでも達成可能だが、

魏呉蜀のメイン三国では注意。

特に荀？さん登場後の曹操陣営では、適当こいてると命が危ない。

最低限、時間いっぱい出来る限りの効率を求められる。

上限の評価が欲しければ、マイ外史からの持ち出し

で最速で済ませる事。

反面、袁家関連で私腹を肥やすのは、かなり美味しい。

また、董卓陣営で呂布さんのオヤツ購入を受けると、もれなく嫉妬の

陳宮キックが頂ける。

・人材搜索 罷任務。

これで功績を上げるのは至難、最初から断るか、賊討伐でもして適当な奴を。

ネームドモブとか釣れるなら、自分で雇ってリタイアする方が正解。

・物資輸送 地域によっては難易度が高い。

素直に予算で護衛を雇うのが安全だが、私兵を使って予算を浮かせば、

功績UP。

拠点同士の移動で、食料や矢玉の移動であれば、移動元で売り飛ばし、

早馬で移動先へ行き、再度購入かマイ外史からひねり出すと、高評価。

戦場への輸送は、余程の自信がなければ断ったほうが吉。

・文書配達 難易度低いが、功績稼ぎには向いていない。

が、ついでに商売や、人探しができるので、ついでが美味しい。

・外交密使 文書を渡す相手の勢力・身分によって、難易度劇変。特に袁家 袁家、曹魏 袁紹は、大凡どんな時期で

も鬼門すぎるので注意。

どうしても受けないとならない時は、ハチミツ・顔良さんが勝利の鍵。

また、袁術 孫家、袁紹 曹魏は時期により即死罠に変わる。

・開墾建設 単純に能力値とマンパワー勝負。

私兵使つかインスタント兵士使って人手を増やせ。
酒・食い物系のアイテムで士気向上も効果有り。

・会計監査 物資・ポイント等のチェック。

早く正確にが高評価の鍵。

曹魏、孫呉、董卓陣営では楽な任務だが、袁家では泣ける。

特に文官系トップから怪しい袁術陣営だと罠任務と化す。

また、序盤弱小の劉備陣営、貧乏な癖に戦闘機会の多い公孫？陣営では、

うっかり流すと、兵糧切れとか起こって勢力の隆盛に関わる。

・その他 バリエーションや、イベント関連の特殊もあり、完全な網羅は不可能。

人間関係はできるだけ保つ、陣営のキーパーソンとは特に交流を。

なるほど、こんなもんか。

「さて、今持ってるお仕事はと」

えーと、収穫のうちで、必要分除いた売却できる数量の把握ね、会計監査のバリエーションか。

単純に担当から上がってる報告量の合算から、備蓄予定数量を引いてやるだけの簡単なお仕事ですが……なんで、こんなに報告者ごとの数量がバラバラなんだ？

地区ごとの蔵の数は、ざっと見るかぎり揃ってるんだが？

なんで、桁が変わるほどの差が出とるんだ？

こりゃあ……ヘタ打つと、エライ事になるってやつか。

「白蓮殿、備蓄の確認をお願いしても？」

「任せてくれ」

数字が怪しいってレベルじゃねえぞ。

横流しはないにしても、保存しておくべき数量の指示が間違いやら、単純に備蓄を読み違えて報告が上がって来てたりしたら、実際に売り買いた後、蔵が空なんですが？ とか、ありそうで怖い。

太守クラスの仕事を捌ける白蓮さんに、こんな丁稚仕事させるのは気が引けるが、しょぼいわりに危険値高そうだからなあ。

俺の方でも、備蓄量の基数自体が、ちゃんとした数字なのかを、計算しなおした方がいいかもしれない。

下手すると十数年前の数字ですとか言われそうだな。

えーと、次は2〜30人の賊が、近くに居着いて困っていると。

ちょ、これ文官系じゃない。俺の能力値のせいかな？

同じような地域で、似た報告が数件上がってきてるので、恐らく同じ連中だろう。

作業的には、確度が高いと判断した情報を、普通の人にあげて、

「ご出陣願うらしいのだが。」

「星殿、鈴々殿、すみませんが、私兵連中の100人を率いて、磨り潰してきて下さい。」

「頭は出来れば捕縛してきて頂きたいですが」

「主殿の命なれば」

「おっちゃんは大丈夫なのだ？」

「この段階で、他のプレイヤーが、こちらを潰しに掛かってくる可能性は低いでしょう。」

「そんなに目立ってるわけでもありませんし」

「大体いるかどうか判らんしな。」

「それよりも、この程度の事に、普通の人が出張ってたら、仕事が溜まりそうだし、功績上げるのにも良いだろうし。」

「というか、他のプレイヤーもいれば、もう少しマシな状態になってないだろうか？」

「まあ、スタート直後だから、まだ判らんが。」

「で、数日後。」

「備蓄数量の読みなおしと、必要量の計算をやりなおし、まとめた数字で報告を上げ、各地区の保存備蓄量の誤りを正し、適正量に移動させた。」

「賊については、討伐ついでに捕まえた連中から、モ武将を一人召抱え。」

「統率20、武力35以外、オール一桁と中々の酷さだが、忠誠を上げた後、無制限ロックの指輪と、マイ外史の工房で、ぼちぼち出てくるようになった+5程度のアイテムを持たせることで形をつけた。」

「あ、華佗のお守りも、持たせている。」

見掛けは兄貴で、命名『ヤス』

ヒヤッハー要員で、当面は罾っばいところに突っ込んで、踏み潰す役を務めることになるだろう。

「それは酷いですが、旦那あ」

「酒と食い物は好きに食わせてやるから頑張れ」

「エライ御仁に捕まっちゃったあ」

オッサンが泣いても可愛くない。

それから数日後、朝議の席で論功行賞が行われた。

17（前書き）

題名変更しました。

さて、初期取得任務をこなしたので「今日から朝議に顔を出すように」との、お達しがありました。

で、やってきたのですが。

玉座の間と言うか、評定の間と言うか。

人数少なくて、広さが際立つなあ、おい！！

めっちゃ寂しいです。

前の時は時間が進んでいて、既に白蓮さん直下で便利使いされた為、評定と言うか朝議に顔を出す事が、殆ど有りませんでしたからね。

あまり記憶に残ってる印象なかったんですが。

どこに立ちやいいんでしょうか？

まあ、新参なので、文官の人が集まってる所の、一番後ろで、良いんでしょうが。

「主殿、あまりキョロキョロするなよ。

ほら、寝ぐせが……」

あの、白蓮さん……参謀代わりということで、白蓮さんに付いて来て貰っているのですが。

保護者みたいな事、言わんで下さい。

因みに外史内では、マイ外史から連れてきた人材は、基本的に担当プレイヤー以外からは、兵士Aとか文官Aとかなモブにしか見えません。

顔に影が掛かっておるわけですね。

まあ、男女は判るので、イチャイチャしても、変な勘ぐりはされませんが。

ああ、人を連れてると、プレイヤーってバレるんじゃないかって話ですが。

ここに居る人、だいたい誰かしら連れ立って来ておるので、大丈夫じゃないですかね。

全員がプレイヤーだったとしたら、めっちゃ怖いですが。

それよりも、多分外見とか名前で、判断だと思います。

その点、私の埋まり具合は半端有りません。

「で、あそこの白カッターシャツで、白髪赤目のハイティーンは……」

浮きつぷりが半端ないです。

割とイケメン顔なんですけど、あくびやらなんやらで、締まりきりませんね。

立ち位置が武官の一番後ろに居るので、新参の人なんでしょうが、どう考えてもプレイヤーの人です。

しかし、あの余裕と言うか、わざわざあの格好をするというのは、もしかして有名人なんだろうか？

えーと『恋姫＋無双 パラレルダイバーズ 白髪 赤目 カッターシャツ』で検索。

【俺が天の】 銀髪赤目 南郷一馬 3周目 【お使いだー！】

>1 ここは、恋姫＋無双 パラレルダイバーズにおける

天のお使い様こと『南郷 一馬』様を生暖く見守る

キャッシュ

検索一発目に、こんなのが出てくるんですが。

もしかしくなくても、有名人らしい。

初期ロールに『天の御遣い』が、有るっちゃ有るけど、主人公に正面切って喧嘩売ると、プレイヤー速攻バレのリスクに、選ぶ人が居ると思わなかった。

「おっと、そろそろ「太守殿の御成りである」来たか」

みな、居住まいを正し、普通の人を迎える。

とはいえ、普通の人は気楽に歩いてきて。

「ん、楽にしてくれ」てなもんで。

「さて、今日は皆も顔を見たと思うが、将に取り立てようと思う者が二人いる。」

南郷、金千、こちらへ」

「はい」「応!!」

俺は周囲に一礼し、脇に逸れてから上手の方へトボトボ進む。

南郷さんは、文武の官の並ぶド真ん中を意気高く進むって、あっち通ってよかったのかー!!

確かに紹介だから、別に外を大回りする必要はなかったな。

まあ、やってしまったものは仕方ない。

遅れないよう、息切らせながら、パタパタ進む。

先に着いた南郷さんは、普通の人の隣に立ち「南郷 一馬だ!!」
字はない!!」と大きく叫んだ。

「南郷は、何でも天の国からやって来たそうだが、中々の武力を持っている。」

先頃迄は義勇兵をまとめていたが、この機会に将として働いて貰

う事にした」

という、普通の人の紹介に、集まった者は「ほおー」と、興味深げに南郷さんを見つめる。

で、その頃、やつとこ辿り着いた俺にも視線が集まるが、微妙に居たたまれないぞ。

「はあ、金千満腹と申します。 お引き立ての程、宜しくお願いいたします」

そうして、再び一礼。

南郷さんは、此方を見つめながら、微妙に首を傾げていたが、何を考えていたのかは、判らない。

「金千は文官として登用した者だが、賊の討伐に功があり、この度、将として取り立てるものだ」

普通の人の言葉に、再度「ほほう」と声が漏れた。
物資の調査やら移送については、スルーですか？

その後、紹介の終わった俺と南郷さんは、下手に戻り末席に立つ。

「うわーメツチャ見られてる」

なんか凄まじく視線を感じます。

そつと見ようとしたら、白蓮さんに見るなと抓られたので、じつと前を向いているが……。

「では、巡回の強化と、外縁部の村に対して、防備を固める際の補助をすると言う事で、担当の者は速やかに準備を進めるように」

「「「「御意」「」「」

やっと終わった。

このまま、さっさと離脱しようかと思ったのだが。

「金千さん、だっけ？」

南郷さんに捕まったー！！

「はい、ああ、南郷、一馬殿でしたな」

「これから、よろしくなっ！！」

スパツと手を差し出してきた。

だが断る。

「此方こそ、宜しくお願いいたします」

と、お辞儀で返した。

包拳礼とか、どうだろうと思ったが、自信無いのでやめた。

南郷さんは、右手を引つ込めると、包拳礼で「こちらこそ」と、ニカツと笑ったが、なんか微妙な視線は、変わらず此方に向いている、

いや、別にプレイヤーとバレたからといって、どうという訳でもないんだけども。

この南郷さんに付き合うのは、ちょっとなあ、と思ってしまっ。どうやって、この場を抜けだそうか悩んでいると「お、丁度いい所に居るじゃないか」と、普通の人こと、我らが上司の公孫贇伯珪様。

「これはこれは、太守殿」

一礼、腰が痛くなつてきそうだ。

「あ、気楽にしてくれていいぞ」とか何とか、普通の人は言ってくれるが。

「えっと、伯珪さん？ どうしたの？」

南郷さん、貴方みたいにフランクにはできねーよ。

ロールを選ぶと、なんとなくでも、それっぽい表現に引っ張られるはずなんだけどなあ。

って、そうか！？ 天の御遣いロールって、基本フランクというか、そのまんまなのかあ！！

これは不覚。

そういう側面があつたとは。

いや、別にしびれも懂れもしませんが。

「ああ、二人には、今度の賊討伐に出て貰いたい。

兵は私が率いるが、副将に南郷、軍監つーか軍師として金千、頼む」

「任せてくれよ！！」

「私が軍師……ですか？」

ちよつと待てや！！

「なんだ？ 不服か？」

「正直な所、我が身には、荷が重うございますな。

兵站の確保、輜重の面倒でしたらば、なんとかやり遂げてご覧にいきますが。

策を立てよと仰せになれますなら、太守殿の方が戦慣れされておるか」

できないってこた、ないだろうけど。

「ああ、難しく考えさせたか。

後軍の雑事の取りまとめを頼みたいんだ」

さいでつか。

それなら、大丈夫か

「それでしたらば、おまかせを」

「じゃあ、二人とも頼むぞー」

足取り軽く、普通の人が去っていく。

南郷さんも、意気込んでどっかに行った。

俺が役人の大部屋に戻ると、提出した筈の物資数量報告が、今回の陣立て分の物資を計算に入れて再提出との書付が貼っつけてあって、差し戻されていた。

「なるほどね」

ため息ひとつ、書き直しに掛かった。

はい、ちょっと時間飛びました。

あれから資料提出の功も含めて、500人ほどの隊を任される事に。

というか、主に備蓄の確認徹底と物資再配置のお陰でしょうが。とはいえ、輜重隊の護衛ということで騎馬は居らず、主に槍持ちと若干の弓持ちが居る、二軍の下ってレベルの部隊です。

顔見せで目の前に並んだ時の連中……鎧も微妙に揃っておらず、弓の矢玉も十分とは言えない様子を見るに「とにかく歩く分には問題はない」という位の訓練段階で、いきなり引っ張り出された感じですか。

少なくとも、戦闘に駆り出すには「心許無い」としか言えない。

いくら後軍のおまけとはいえ、もうちょっと何とかならなかったのか。

今回の賊討伐、聞くと初期任務の時のような数十人規模の連中ではなく、領内に入り込んだ数百から千近くの連中を、複数相手取る事になるそう。

その為、主力は普通の人が直卒する騎馬3000、中軍に歩兵1000を預かる南郷さん、そして後軍に俺の500と輜重隊という、割と大袈裟な編成である。

にしても、戦力をひねり出すにも、防備の為の一線の戦力に手が付けられないからと、俺の部隊が手薄なのは仕方がないと思うが、万が一、戦闘になった時の事を考えると、背中が薄ら寒くなる。

まあ、今回は行動範囲が領内という事で、山盛り負担になる筈のお馬さん用の水と秣は分割して各地拠点に配置している為、輜重の荷は主に人間さま用なのが救いだ。

お陰で、荷車を長蛇の列にしなくて済む。

ぶつちやけ、本隊よりも規模のでかくなるような輜重隊を、俺の部隊で捌けと言われたら泣くしかない。

今の規模であるのなら、移動途中はともかく、村に籠りでも出来れば、なんとか時間稼ぎくらいは出来るだろう、できるといいなあ。つつても、ポイントでインスタントな一時兵力を出して、敵さんにぶつけりやどうにでもなる話だが、それじゃあロールプレイの面白見がないしな。

ある程度の不利なら、出来る限りはやってみるのも一興、どうしてもダメなら、その時はポイント使うなり、負けプレイの後、皆に慰めて貰うのもアリだし。

等と、ぶちぶち考えながら歩いていた自室への道中、隣から。

「恐らく主殿の部隊は、今回の戦では戦闘ではなく、土木工事等を主任務として考えられているんだろうから、戦闘に関わる事はないと思うぞ」と、白蓮さん。

俺が、変に浮ついてるのを見越したのか、助言のつもりだったんだろうけど。

「土木工事？　というと、戦後の後始末ということでしょうか？」

「主に、襲われた村の補修と、民の慰撫って所だろう」

確かにそれなら、今の部隊でもなんとかなるだろうし、主力についていけなくても問題はない。

それに賊を討伐した後の地域なら、戦闘の可能性もごく低い訳だ。つまり、此方には特に戦闘力を期待されているわけではなく、単に人手があればいいということか。

「なるほど、主力も補給は物資を移送しておいた拠点で行えるのだ

から、わざわざ鈍足の輜重隊を待つ必要は無い……我々は、せいぜい片が付いた戦場で、穴掘りと炊き出しでもしておけと」

あれ？　なんか、ちよつとカチンと来たぞ。

淒く納得はできてるんだが、何だろう？

南郷さんとの差を付けられてるように感じてるのか？

俺って、そんなに感情的と言うか、短気じゃなかった筈なんだけどなあ。

このゲームの中だと、割と恥ずかしい事もしてる気がするし、若干、箍が外れているのか、そういう風な影響つてのがあるのか、兎に角……　なんかモヤモヤする。

「あ、主殿。それは穿ち過ぎの考えだぞ。

戦後の沙汰は重要だからと、こうして訓練も完了していない連中まで動員して、部隊を作って主殿に任せているんだろっし。

けして、貴方を侮っているとかでは無いと思うんだ。

……だから、そんな目をしないでくれ。

そうして見られているのが、私ではない私だとしても……　辛いからさ」

そう言つて、悲しげな表情で縋り付いてくる白蓮さんに、俺の頭も冷えていく。

どうやら俺が、色々考え込んでいる間に、胡乱な目付きでもしていたのか、白蓮さんには普通の人を責めているように見えたんだろっ。

考えてみれば、後軍について話は最初からで、それは俺が文官やつてたからだろう。

恐らくは、趙雲さんが居るとすれば、先鋒は趙雲さんで、普通の人こそ後軍に居たって不思議ではない。

そうであれば、態々文官を、將に引つ張り出すことも無いんだろ

うし。

考えてみれば一々最もな事に、何を腹立ててるかな俺は。

あー、俺は何をアホな事を。

一人で盛り上がって落ち込んで、子供か俺は！！

「申し訳ありません、白蓮殿。

八つ当たりのような、情けない姿を見せてしまいました」

「良いんだ、主殿」

きゅっと縋り付いてきた時の体勢から、両の手を背に回され、抱きすくめられた。

身長差とヒールのせいで、こちらの顔が白蓮さんの胸に半ば顔を埋まるような姿勢になってしまう。

白蓮さんの、早鐘のようだった鼓動が、少しづつ落ち着いていくのを感じる。

この程度のことを取り乱したり、落ち着いたり、忙しい白蓮さんが可愛くて、こちらから抱き返すと、再び、鼓動が早くなっているのを感じて、尚更に思いが募る。

「主殿」

視線を合わせ、唇が触れる。

やばいなあ、妄想だって、判ってるのに。

このハマりようは、本当にヤバイ。

ただ、こちらが見上げるのを気遣って、白蓮さんが膝を地に着け、こちらに合わせてくれたのって……俺がヒロインポジションじゃないか。

やはり、もう少し身長は高くしておくべきだったろうか。

白蓮さんで165近く、比較的長身の多い孫呉メンバーとか、平均165を超えて170くらいありそうだし。

まあ、今更仕方がない話ではあるが。

「とりあえず、あの二軍連中を何とかしてみるか」

出陣まで、あまり間はないのだけでも。

19 (前書き)

A r c a n a O n l i n e 書籍化なんですな。

先が暫く読めないということ、じりじりするやら、まとめて読めるのが待ち遠しいやら。

今回、オッサンばかりです。

あ、やつとこさ文章量50キロ超えた！。

って、55キロちょいで19話って、平均3キロ行っただけ、0

T L

「ほれほれ、飲め飲め!!」

酒場のお姉ちゃん総動員で、うちの部隊の連中に酒飲ませてます。あとは装備を何とかする為に、商店で修正値の雑魚い+1やら+3くらいまでの武器防具を買い漁って、部隊の連中にやったりとか。なぜか部隊に武器防具をやると、全体の武装度が上がります。アイテムとしては消滅しますが。

店売りのある低位の武器まで、わざわざポイントショップで買う必要もない訳だし、経済の活性には、こっちの方が良いだろう。

そんなとこの影響まで計算されてるかは知らんけど。

で、武具の投入が、おおよそ三十個を超える頃、部隊の武装度は一線級つてとこまで上がった。

後は飲めや歌えで、士気と忠誠度を上げるくらいか。

訓練度は、時間的なもので、限界があるだろう。

一応、槍持ちには鈴々さん、弓持ちは白蓮さんを付けて、せめて「いちにのさん」で、ぶん殴る事が出来るくらいの統制は、なんとか形にしたいが。

それと別で、インスタントな戦力を購入しておくか……戦力の質としては、二流もいいとこだが、今のうちの部隊よりは、随分マシなだけに、いざという時の賊相手には十分だろう。

指揮官も、丁度ヤスが空いてるし、騎兵2000くらいでいいか。とか何とかやっていると、大騒ぎしている部隊の面々を横目に、此方へやってくる人影。

俺の近くで飲み食いしていた鈴々さんが、そつと、その行く先を塞ぐ。

その警戒に慌てたのか、人影は立ち止まり、此方に害意がないことの証明にと、両の手を掲げ、此方へと言葉を放った。

「これは失礼を。 私は張世丙と申す商人でございます。
あなた様を金千將軍とお見受けいたし、お声を掛けさせて頂こう
かと思つた次第にて、無作法はお許し願いたい」

ん？ 演義で劉備さんの旗揚げに援助した商人だっけか？
なんか、微妙に名前が、違う気がしなくもないが、自信ないな。
つか、このゲームじゃ、そんなのが出てくるんだっけか？
恋姫十無双では聞いた事がない。
ここは無難に返しておいた方がいいか。

「これはこれは、ご丁寧な名乗りを頂きまして。
將軍等と呼ばれますと身の細る思いがいたしますが、確かに私が
金千でございます」と、一礼。

「……………」

微妙な沈黙が流れる。
じつと、お互いを見合う時間が流れ。

「なかなかどうして、手ごわいですな。
しかし、こうして居ても時間の無駄のようですので、先に自己紹
介させて頂きましょう。

私はご覧のとおり、商人をロールとしているプレイヤーです。
あなたも、同じくプレイヤーの筈だ……金千殿」

あっさりと断定してくれたな。

「どういうことでしょうか？」
「どういうこととは？」

先にプレイヤーバレを告白したことでしょうか？

それとも貴方の事を、プレイヤーと確信した事でしょうか？」

ニヤニヤしている、このプレイヤー……どう考えても、曲者だ。何を考えてるんだか、さっぱりだ。

大体、どうしたって、このゲームの知識・経験では、あちらが優位。

下手な考えなんとやら、ここは素直に話を聞いた方が早そうだ。

「両方ですね。

わざわざ、ここに首を突っ込んで来た要件と、私の事を確信したという理由を、教えていただきましょうか」

「素直に過ぎて面白くありませんが……」。

あなたがプレイヤーだと確信したのは簡単な話です。

プレイヤー以外が、あんな派手な買い物をする訳がありませんよ。キャラクターならば、工房から装備の調達をしますからね。

アイテムの装備化などという手段は、プレイヤー以外にはありません」

く、下らない所から。

「どうしても急ぐのならば、マイ外史からの調達をオススメします」

「肝に銘じます」

「堅いですねえ。」

南郷君ほどに、とは言いませんが、もう少し楽に構えてもいいでしょうに」

はあ、確かにばれてるんだし、それほど気にする必要も無いか。

「南郷 一馬さんですか。」

有名な方の方ですが、どういった方なんです？」

「私はね、他のプレイヤーの行動を見て楽しむのが趣味でね。ここに立ち寄るのも、新人の立ち寄る可能性が高いからでね」
「なるほど」

見事に行動が読まれてるな。

「あるとき、私が孫呉の土地でスタートした直後、彼を見かけたんだよ。

いきなり『俺は天のお使いだ！』と叫んでいるのを見てね。思わず、掲示板に書き込んだら、随分と流行ってしまったよ」

「あの異名は、あなたのせいですか」

はははと笑うのを見るに、この人に下手な所は見せられない。

「それから暫く、見かけなかったが、噂では世紀末拳王様状態で、ポイント稼ぎをしていたようだね」

ヒッパハープレイか、割り切れる人は羨ましくはあるな。

「その後、また孫呉の土地で『天の御遣い』プレイを始めたようなんだが、その時には随分とステータスを伸ばしていたようだよ。

それこそ、あの孫策と手加減はあったんだろうけど、二合受けて、三合目で吹っ飛んでいたから、150から200くらいまでは、運のステータスを伸ばしていたらうね」

「そういう部分を読めるものなんですか？」

「ああ、運の消費の効果については、凡その見当が経験則から導きだされているよ。

大体、100ポイントで、その能力値の+100%、つまり倍のステータスに伸びた判定を行える。

増減による修正も、比例しているようだね」

ポイント分の上乗せじゃなかったのか……。

「運のステータスですけど、皆そのくらいはあるんでしょうか？」

「最近、始めた人達については、言い切れないけどね、サービス開始から続けているプレイヤーについては、みな100程度までは伸ばしているだろうね。」

ポイント稼ぎも文官や、私のような商人プレイをしていれば、2-3周で10000ポイントは出るからね、サービス開始からそろそろ半年、日に三時間くらいプレイしている人なら、150や200ポイントの上乗せがあっても不思議じゃないだろうね。

まあ、キャラクターを複数作る事を考えれば、メインのキャラクターについて、150ポイントステータスに上乗せしているくらいが現在の上限ではないかな？」

その点で行くと、南郷さんは結構なヘビーユーザーなのか。

「それでは、南郷さんって」

「割りとネタキャラ扱いされては居るがね、戦闘系プレイヤーとしては、全体でも指折りの上位だと思うね」

「そうなんですネ」

「まあ、そろそろ、能力制限のキャップも外されるんじゃないかって噂もあるからね、今後のことは判らないけどね」

悔しいが参考になる。

「で、南郷さんは、なぜ此方に？ 孫家にこだわってたのでは？」
「悲しい事があってね」

ふふふとか、薄く笑ってるじゃねーか。
絶対に悲しい出来事とか思ってたねーよこの人。

「南郷くんはね、どうやらお姉さま系のキャラクターが好みなんだよ」

「なるほど、それで孫家と」

「それと、バトルジャンキーっぽいのが多いしね」

「???」

「ああ、孫策、黄蓋、甘寧の攻略にね、殴り合いでの友情って奴を、その突破口にしたのさ」

ほほう、それはなんか、説得力がありそうな気がする。

「実際、割りと良い所まで行ってたね。」

孫策相手に、一撃入れたら、付き合ってたやるとかな約束取り付けて、見事に一撃入れたんだよ」

「それで!？」

「一晩中飲みにつき合わされて撃沈。」

それでも随分と良い感じだったから、このまま初攻略なるかと思つた所で……」

「どうなつたんですか？」

「あれは悲劇だったね。」

彼も、手加減の抜けてきた孫策相手にも、何とか耐えていたんだ。それこそ五斗米道の粥をすすりながら、運の消費使いまくりでね」

基本、二合しか持たない相手だとそうなるか。

「その日は、賊討伐から帰ってきて、テンションダダ上がりの孫策が相手だった」

「それは……死ねるんでは」

「いや、それでも彼は耐えたよ、体はね。
だが、その心は……」

目を閉じ、何かを思い出しながら「ああ、今思い出しても身震いがするね」と、呟き、その時の状況を語る言葉を聞いて、俺は背筋に寒いものが走るのを抑えられなかった。

「南郷っ！！ もつと私に熱をちょうだいよ！！
こんなのじゃ、全然足りないわ！！」

叫び、髪を振り乱しながらも、最後の一線の手加減を、かろうじて忘れていない孫策により、青年はなんとか立上がる事ができた。

そして、立ち上がる度、粥を飲み干し、次の一撃に耐えるべく腹に力を入れ、孫策を睨みつける。

その目は、不屈の闘志をたたえていた。

「いいわ！！ この滾りを叩きつけられる相手なんて、今まで、そうは居なかったわ！！」

「こい！！ 俺が受け止めてやる！！」
「言われなくても！！」

嬉々とした狂気を纏わり付け、模擬刀を振りかぶる孫策に、ギリギリのポイント消費で受け流す青年。
その応酬が、途絶えることなく続く。

青年の中で時間の感覚が曖昧になっていく。

一体、どれくらいの時がたったのか。

ふと、考えた青年に、その時は突然やってきた。

その時……痛みとダメージの累積による行動制限が、青年の体の動きを鈍らせた。

そして、暴風の如き一撃を、まともに受けてしまった青年は、立ち上がることが出来なかった。

「なによ南郷！！ もう終わりだつての！？ 冗談じゃないわ、私は、ちつとも満足してない！！」

立ちなさいよ南郷！！ 若いんだから、さつさと立ちなさい！！ 何？ こんなに早く終わっちゃうの！？ 女を満足させられないなんて、最低よ！！

ただでさえ、一回が早いんだから！！ せめてすぐに立ち上がるところを見せなさいよ！！

南郷！！」

そして、青年は心も折れた。

「……それって」

「単に、たまたま意味的に痛い感じの言葉が並んだだけで、ナニを指してどうこうという話ではないと思うんだけどね。

若い男性には厳しかったようだね。

崩れ落ちたまま、リタイアしていったよ。

それから、彼は孫家には足を向けていない筈だ」

トラウマできてんじゃねーか！！

「それでもね……彼の歩んだ道は、きつと無駄な事なんかじゃない筈なんだ。

だからね、私は彼の歩んだ道を……後に進む者達の為に記したんだ」

「それは、どこまでを？」

「彼の熱闘と、彼女達の反応。」

そして、その後、彼が孫家には目を向けなくなった事を。
これだけ記せば、十分じゃないかな？」

十分じゃねーよ。

それって、攻略完了して別の目標へ向かってるように見える。

まさかトラウマが出来て、避けてるようには絶対に受け取らない。

「一応聞きますが、もしかして、それにチャレンジして」

「わりと大層な人数が心を折られて、プレイスタイルを変えたようだね。」

もう少し頑張って欲しいよね。

それにしても、あの時だけの、たまたまかと思っただけど、割とあの台詞って、再現性があるようだよ。

開発者の洒落なのかね？」

こいつ、悪魔か……。

「それからもね、南郷くんを見かける度に、こうして見守っているんだよ。」

私が君に声を掛けたのは、彼の事を知って欲しかったからなんだよ」

「それで、南郷さんには関わるなと？」

「いや、それは君に任せるさ。」

私が願うのは、南郷くんが周囲に警戒しながら、その動きを鈍らせる事が無いようにという事さ。

むしろ、君と一緒に踊ってくれるのなら、それはそれで楽しい物になるんじゃないかな？」

踊る場所は、コイツの掌の上ってか。

「最後に南郷さんが、ここに来ている目的は？」

「恐らくは趙雲さんだろうね。」

割と洒落のきく、バトルジャンキー気味の人だからね」

なるほどね。

「それでは、失礼させて貰うよ」

はいはい、帰れ帰れ。

こっちはもう会いたくないよ。

「それよりも南郷さんが、どう付き合ったものやらねえ」

20（前書き）

ネット情報でなく、プレイヤーからの説明回……南郷さんが普通すぎた。

あれから数日、商人の張なにがしは、取引を終え、この地を後にした。

ぶっちゃけた話、ホツとした。

そして、賊討伐の出立も目前に迫り、各人に名弓だの、名馬だのというアイテムを贈ったり、自分のステータスアップが、まだ甘いものだど認識したので、パラUPを239個追加したり。

キリの良い所で運を400まで上げました。

あの商人から聞いた話では、そろそろ能力値のキャップ制限である上限40が、緩和の方向で修正されるかもってことですが、無駄にはならないだろうし、気にしない。

しかし、24万とか平気で使うようになってきた……バイトの給料が何回飛ぶのやら。

そういえば気になったのが、南郷さんが、孫策と二合打ち合った後に、吹っ飛ばされたという話。

200の運を、二回に分けて使ったとしても、基本的に武力は80どまり、どうやって、90オーバー（武器込みで100近いかオバー？）だろう、孫策の一撃を耐えてたのだろう？

まあ、相手が手加減してたんじゃない。と言われれば、それで終わってしまうけど。

俺がサクッと斬られた時の話、相手が関羽さんで孫策と武力が遜色ないとして、あれが俺に受けられるかという話。

正直な話、40が80の能力値でも、避ける受けるという事が、俺にできた気がしない。

もしかすると、その部分が、俗にいう『熟練度』という事なのかもしれない。

キャラクターの能力というよりも、プレイヤー側の反応だの行動だの、適応の部分に作用して、劣る能力値でも、しのぐことが出来るようになるのかもしれない。

となると、其処までの境地は遠いと思えるが。

「こればかりは地道に続けていくしかないんだろうな」

なんといっても、半年の差は大きいんだろう。

「さて、本日はお招きに預かり、ありがとうございます」

今、俺が居るのは、この町の酒場や盛り場を纏めている親分衆の、更に元締め邸宅。

先日来より、部隊の連中に、どんちゃん騒ぎをさせた件で、結構な儲けを出したらしい彼らから、接待を受けている訳ですな。

ぶっちゃけると、またプレイヤーが絡んでるんじゃないかと、ドキドキしながらやって来たのですが、そういう訳でもないようです。とりあえず、こういう生々しい行動をしてくるNPC、半端ないな。

因みに、普通の人にも話は通しております。

こついつのも、ある程度は役人の仕事の領分だそうなので、逆に断れなかったりした次第。

「しかし……」

「李氏でございます」「楊氏でございます」

両脇に、お姉さん置いての、お酌攻勢。

なんという中華風キャバクラ。

お見事なまでの接待です。

余りお高い店に、縁のない俺には、微妙に居心地が悪い。

バイト先の居酒屋みたいところで、皆がワイワイ飲んでるのを脇に見つつ、ちまちまと焼き鳥等をつついてるのが身分相応で、お似合いなのですよ。

それに、お姉さん方の事なんですけど、どう見ても、普通の人とかの方が、美人というカテゴリでは上位（絶対にリアルでは見かけないであろうレベル）なんですけど、微妙にリアルに居そうな感じの美人さん（それでも、見かけたら思わず振り返って、呆然と見送ってしまいそうなレベル）のせいで、なんか、先程も言いましたが、生々しく現実感が刺激されて、変にいたたまれなくなる。

説明しにくいですが、キャラクターとして、プレイヤーとは違うと割り切っている部分が、割りきりにくくなってしまうというのか…… なんだかなあ。

そのくせ、目の前の親分さんは、きつちりとキャラクター付けされているような風貌なんだよなあ。

（因みに、二次元作品のダイブシステム用タイトルへの適用における、イメージ補正関連の特許等は、日本が独占してたりしてなかったり。あと、タイトル内でのスクリーンショットは、ダイブシステム内でしか見れません。 現実で、映像としては見れない）

「それにしても、金千殿は太っ腹ですな。

配下とはいえ、あの人数に連日の飲めや歌えの大散財とは。

あやかれました此方としては、これからも末永くお付き合いしたい次第で」

あはははは、ちよいとやりすぎたとは思ってますよ。

「こちらこそ、お願いいたします。

そうそう、太守様からも、宜しくとのお言葉を頂いておりますよ」

「それはそれは、勿体無い、お言葉でございます」

てな事をやっているうちに、なんとか酒の味を楽しめる余裕が出てくると、人物に興味が出てきて、チラチラと目をやってみる。

眼の前の親分さんは、流石というべきか、統率・武力・政治力・魅力で30を超えており、幾つかは40目前という、下手なプレイヤーよりもステータス高かったり。

更に言うと、お姉さん方も。

黒髪ロングの、ちよいとキツメのクール美人である割に、話術が巧みで、思わず杯を重ねさせられてしまう李氏は、知力が45の魅力が60近く。

一見、おっとりしているようで、普通の人の治世の内実を、良く知っていると感じさせられた、明るい茶色でふわふわウェーブでセミロングの楊氏は、政治力が45の此方も魅力が60間近という、高スペックで吹いた。

流石は、街で1、2の妓女らしい。

というか、一般的なモ武将以外の、こういう一般人の中にも、ステータス持っている人が居るのか。

普通の人も、こういう辺りから人材を……って、流石の女性が強い、恋姫世界でも、差し障りがあるか。

なんてことを考えてると、親分さんが変に気を回して来た。

「どうですか？ お気に召されましたでしたら、お帰りの際に……くくくくくく」

お前は黄色いカエルの宇宙人か。

隣じゃ、お姉さん方が、目を伏せつつ頬を染めながら、流し目で秋波を送って来ているし、コンビネーション良すぎるう。

しかし、ぶっちゃけた話、このスペックで（知力・政治の低い方

でも、実は35とか有るし）しかも美人とか、むしろ各地方の大きな街を巡って、人材登用の旅に出たいくらいだな。

ステータスが有る位だから、人材として求める方法もある筈で。

あーなるほど、商人プレイとかすると、こう云う所から人材集めたりするのか？

多分、武将との接点って無くなるだろうし、逆に親分衆とかとの接点は増えるだろうしな。

なんだか、スッキリした所で、率直に聞いて見る事にした。

「お二人を、お預かりするには、どうすれば宜しいので？」

なんとというか、親分さんの、目を白黒させる様が、漫画じみてて此方が驚いた。

「ふむ、ご冗談を仰られているようですが、ない様子。

ですが本来、妓女の身請けというものは、何度も通いつめ、お互いを知り、他の客も納得する者でなければなりません。

それが、太守殿の将とはいえ、一見の方に許したとなれば、筋が通りますまい」

「なるほど、そういうものか」

「しかしですな。

金千殿は、この数日で我らに大きな商いをさせて下さった方だ。

そう無碍にもできません。

それに、この二人、年季も開けており、身請け話も幾つか上がったはありますが、未だ首を縦に振ろうといたしません。

ですから、もし二人が納得するのであれば、私共も、お話を受けて頂きましょう」

「自分で口説けということですか」

「左様で」

なんというか、こういうイベントになってしまうと、恋姫十無双関係ねえなあと思わなくもないが「恋姫十無双に興味がなくても、それなりに楽しめる」という部分では、良く出来てるんだろぅな。とにかく、今日は一旦帰ることにしよう。

思ったより収穫はあったし、まだ先は長いのだし、焦ることもない。

先に賊討伐を済ませてからでも良からう。

「それでは、この辺りで、お暇させて頂きます。

次は、此方から寄らせて頂きますので」

「お待ちしております」

お姉さん方も見送ってくれた。

「ああ、言い忘れておりました。

お二人には、この金千満腹が「お力をお貸し願いたい」と、そう願っております事を、頭の片隅にでも、残しておいて頂けると、ありがたく思います」

最後の振り向きざまに、そっと視線を向けて、頭を下げつつ、魅力チエツクに400消費しておいた。

「これはこれは、铮々たるものじゃないか!!」

普通の人が、陣列を見やり、満足気な声を上げた。

そりゃあ、まあ。

元より最精鋭に当たる主力の騎馬は、公のお金で装備が整えられ

てるし、中軍の歩兵も、それなりに整っている所から、更に南郷さんが、そこその付き合いになると判断したのか、幾らか手を入れているようだし、最後のおまけだった、うちの連中が、袁紹さんとこの親衛隊バりに、ピカピカしてるんだからな！！

「うん、やりすぎだな」

「そうですね」って、南郷さんかっ！？

「いや、中々声を掛け難かったんだけどさ。

流石に、戦闘前に打合せくらいしておかないと拙いだろうと思っ
てさ」

「それは、尤もですね。

といっても、私はまだ小規模な戦闘しか知りませんので、何が重要なのかも把握しておりませんが」

この間の商人さん相手もだが、知らん事を隠しても、時間の無駄
っばいからな。

率直に聞けることは聞いておこうか。

「ふーん、なるほど。

まあ、今回みたいなランダム発生のイベント賊討伐じゃ、悩むこ
とは少ないけどね。

今の時期じゃ、よっぼどの改変がない限り、武将や勢力が絡む事
もないからさ」

「よっぼど、と言うと？」

何か嫌な事があったのか、南郷さんがため息一つ吐く。

「あー、無法者プレイでポイント貯めた俺が言う事でもないんだけ
どさ。

たまたま、知り合い同士のヒッター系プレイヤーが、固まって

しまった時があつてさ。

黄巾に先んじて、兵力糾合して、世紀末状態で大暴れしたことがあつたんだ。

皆、割合に油断してたから、各々3000くらいの兵力で、プレイヤーに喝入れされた、2万以上の荒くれ者と殴り合うことになって、各個撃破でボコボコにされたよ。

おかげで各軍閥の力が激減、黄巾も三姉妹に何かあつたのか起きなかったし、最後まで漢王朝が残っていたらしいしね、何ルートなんだって話だったそうだよ」

あれは酷かつたな。 と、南郷さんは呟く。

「俺は、何とかなんとか抜けだして、早々にリタイヤしたんだけどね。

全滅して、保険のお守りも使い果たして、死亡退場になったプレイヤーは悲惨だったね。

忠誠が下がって、武將の出奔が続出したって話もきいたしね」

「それは酷い」

「つつても、そんな事は、そうはおこらないさ。

一応油断しないでおく程度でいいよ。

退却の時期をちゃんと考えていれば、早々全滅なんてしないんだしさ」

「肝に命じます」

素直に頷く俺を見て南郷さんが首を傾げる。

「やっぱり、なんかアレだね。

よっぽど演技が上手いのかと思ったけど、補正が効き過ぎてるのかなあ。

プレイヤーっぽさが薄いんだよね、金千さん。

当たりは付けてたんだけど、確信が持てなくてさ。

マッコイ爺さんと話してるのを見て、確信したっていつか」

マッコイ爺さんってだれだよ？

「ああ、胡散臭い商人と話してたつしよ。あのオッサン。

名前を変えたりはしてるけど、辺境近くで、品揃えが良くなった
りしたら怪しいね。

うるついてると思った方が良い。そう害はないけどさ」

肩をすくめる南郷さん。

いや、十分以上に害があるでしょ、アレは。

「あつと、話がそれちゃったな。

今回は、殆ど伯珪さんの騎馬だけで、方がついちやうと思うよ。
俺も、こぼれた敵が領内の奥に潜り込まないように牽制する程度
のつもりだし、金千さんは村の補修を宜しく」

「お任せ下さい」

「その辺、スラッと中々出て来ないんだけどなあ。

金千さんって、サービス業の人だったり？」

「ええ、まあ。飲食業のバイトは長いですね」

「そうかあ、って、もしかして、結構若いんだ……なんで、そんな
アバターに。」

いや、リアルは聞かないけど」

ふう、と、一泊置いて。

「村の防御度が落ちてるとき、次の襲撃の時に使える拠点が減つち
やったりして、地味に困るからさ。」

結構重要なんだよ。

だから、方がついたら、俺も工事に向かうけどさ、俺って政治が低いからなあ。

毎回、この陣営じゃ苦勞するんだよ」

「そうなんですか？」

粥やら酒やら呑みまくりの、運使いまくりだよ。 と南郷さんが笑う。

「伯珪さん騎馬だからさ。

工事するにも、一旦戻ってって話になるしね。

そこそこ統率の高くて、知力・政治の高い人ってのが居ると、本当に助かるよ」

「期待にはお答えしましょう」

ははは、と爽やかに南郷さんは笑う。

最初は中二病をこじらせてるのかと思っただけど、普通に主人公属性だったんだな。

「とりあえずは、劉備陣営がやって来る時期までは、お互い協力でもいいかな？」

「そうですね、趙雲さんがやって来るくらい迄は、協力で良いでしょうな」

ニヤリと笑うと、ニヤリと返された。

「じゃあ、其処からはライバルだな」

そう言って、南郷さんは自分の部隊へ戻っていった。

21（前書き）

戦闘とか苦手です……OTL

名前の誤用を、修正しました（ご指摘、ありがとう）
変換の勢いで他にも、やらかしてるかもしれない。

お、なんか良い言い訳を思いつきました。

「この中に、一人プレイヤーがおる……！」

「ちがいますよ」「ちやいます」「ちがいますよう」「

「おまえ、名前云うてみい……！」

「劉備です」

「お前は？」

「玄德です」

「お前」

「桃香ちゃんです」

「お前は」

「劉玄德です」

「じゃあ、お前は？」

「劉備玄德でございます」

「おまえじゃあああ……！！！」

という事が頻発しないよう、表現に誤用含めて揺らぎを持たせているという……とか。

「どうしてこうなった」

現在、うちの部隊は、廃墟となった村の周りに、空堀を掘ったり、柵を強化したり、まあ色々やっております。

なんで、そんな事をやっているかといいますと。

討伐軍主力の普通の人が、敵の賊を捕捉して突っ込んでいき、中軍の南郷さんが牽制しつつ、領内から押し出すように敵を動かして処理をしていき、三つの賊集団を片した所で、空いた安全圏スペースに、うちの部隊が入って、襲撃を受けた村々の補修等々行い始めたのですが……最初の村の補修が終わり、次の村への移動中、いきなり騎馬の奇襲を受けて、命からがら近くの廃村に逃げ込みました。まあ、輜重の粗方を捨てて逃げた御蔭で、時間と命が儲かりましたが、ポイント使って自腹で用意しないと、任務的には失敗が。それから、数時間……。

「槍兵構え！！ 弓兵、引きつけてえー！！ 放て！！」

俺が仕事の無くなった輜重隊の連中を連れて、防御の為の補強工事に集中している間、迎撃の指揮を任せた、白蓮さんの声が通る。

槍兵の前列には鈴々さんが居り、行軍中の飯を目当てに、コッソリと着いてこさせた趙雲さん率いる、私兵の騎馬隊100（普通の人の軍には、まだ料理人の恩恵が無いのです）が、二時間程の遅れで到着した時に、敵の最後尾に一撃くれた後、近くの里山に潜んでいます。

お陰で、前の方は兵数が劣勢にも関わらず盤石、背後は趙雲さんが牽制になって、相手もそれほど積極的でないのも合わせ、敵が回りこんでこない為、工事の手を抜いて前面に集中させる事が出来て

ます。

「しかし、なんで異民族が……」

そう、なぜか賊連中じゃなく、烏丸の皆さんのお越しです。

ちよいちよい敵が寄せてくる都度、工事に出ている連中を柵の中に引っ込めつつ、蛇のように縦列をたなびかせながら、馬上からの弓を放ってくる、烏丸の皆さんに溜息一つ。

「主殿、溜息は幸せが逃げるっていうぞ」

「白蓮殿、敵は？」

「一旦引いたな。」

まあ、あの数が相手なら、ここに籠ってれば負けはないさ」

「あの数だけでしたら良いのですが」

しかし、部隊の装備を強化していたのは、不幸中の幸いというベ
きか。

いざとなれば、インスタント兵力で、と思っていたが……まさか、
拠点が戦闘状態に入ったら、ポイントショップからでも出せないと
か、ヘルプをあまり深く読み込んでなかったのが拙かった。

街の酒場やらで義勇兵を募るのは、確かに平時でしか無理とは、
チュートリアル時に聞いていたが、ポイントショップにあるインス
タント兵力は、他のアイテム同様、場所やタイミング無視だとばか
り。

まさか、プレイヤーの拠点（軍の陣幕だったり、防衛する町や村
だったり）から、其処が戦闘状態でないタイミングでしか、投入で
きないとは。

確かに無制限に出せたら、決着つかんもんな。

「もし、敵方に援軍が来るとなると、少々厳しい事になりますな、

白蓮殿」

「いや、主殿、その辺が判らないんだ。

あの連中、領内深くに切りこんでくる事はあっても、それは足を止めずに動き続ける戦いをする筈だ。

それなのに、なんで劣勢のうちの部隊に、こうまで拘るんだ？

援軍を待つ？ いや、此方は追いつけないんだから、放つという他所に行けば良いだろ。

万が一、こちらの主力が戻ってきたら、どうするんだ？」

白蓮さんに、首を傾げられた。

確かにその通り。となると、目的は村を襲ったりではなく、むしろ此方に動いて欲しくないが為の足止め？

此方を足止めする為だけに、わざわざ五百とおまけの兵力相手に、騎馬を千近くも？

更に嫌な方向に読むなら、こちらに援軍はないと考えている？

「実は、これだけの兵力を割いても問題がない。

主力も当分帰ってこれない事態になっている……等というような話は、勘弁して欲しいものですが」

「おっちゃん、お腹すいたのだー」

日が暮れて、流石に今日はもう店仕舞いと、前線の鈴々さんが、ご飯求めてやって来ましたね。

物資購入は、ポイントショップからでも、マイ外史からでも可能でしたので、補給切れは免れるようです。

あちらにプレイヤーが居ないならば、いくら輜重から物資を奪ったにしろ、根気勝負での負けはない。

「と、安心していいのか、何か拙い状態に踏み込んでしまっているのか……」

オニギリを咥えながら悩んでいると、ヨイショと、あぐらの上に収まろうとする張飛さん。

その場所に座られると前が見えませんし、髪の毛がくすぐつてくるのですが……むう、甘い香りがする。

背中を支えるようにして、斜めに腰掛させると、頭を肩らへんにコテンともたせかけてくる……あ、汗臭くないかね、俺。

「おっちゃん、鈴々は、動かない方が良いと思うのだ」

こちらを見つめてくる鈴々さんが、俺の口元の米粒じゃなくて、オニギリ摘んで食べてしまう。

いや、食べかけなんで間接キスとか思い浮かんで、気恥ずかしくはあるのですが、それよりも思わずソツチカイと、突っ込んでしまいたいそうになった。

仕方なく、次のオニギリを手に取りながら、なんで現状維持がいいのかと聞いてみる。

「それはまた、どうして？」

「勘なのだ」

さいでつか。

だから、なぜ食いかけを態々持っていくのか。

「なあ張飛、それは理由になってないぞ」

流石に白蓮さんも呆れているようだが、視線が俺のオニギリを狙っているような気がする。

ぶっちゃけ、料理人が居ないと、何故かある味噌だか醬を塗った野菜に漬物かじりつつ、オニギリ食べる位になってしまっ……米好

きなので、そんなに不満はないがって、うん、飲みかけのお茶の茶碗を持って行くなよ白蓮さん。

「あいつら、本気でヤル気がないのだ。

だったら、こっちが本気で頑張るだけ、お腹が空いて損なのだ」

俺がオニギリの防御を固めたら、鈴々さんが自分で一口食べたオニギリを、こちらにあーんとかしてくる。

って、あちらさん、本気じゃない？

あ、いただきます。

「あー、確かに連中、牽制しかやってないよなー。

ギリギリまで近づいてきては、適当に弓撃って逃げるしな」

いつの間にか隣に寄ってきていて、やけに赤い顔でさつき持った茶碗に、お茶を注ぎ直してこちらに渡してくる白蓮さん。

恥ずかしいならやめてくれよとか、それに酒入ってないだろうなとか思いつつ、昼間の戦闘を思い返す。

結構な臨場感で、戦闘の雰囲気初めて味わって。

「私としては、かなり恐ろしい思いをしていたのですが……」

「実際、あちらもちかも損害らしい損害は出てないぞ、主殿」

そういえば、そうか。

まあ、部隊の連中が死んだように見えても、一旦消えるだけで、時間経過と共に最大値まで戻るんだけどな。

敗北条件は士気の崩壊と、将の死亡OR戦闘不能、及び撤退、そんな所だ。

「それでは時間稼ぎに、付き合ってしまうのも手ですが」

少なくとも、俺にとっては、表舞台から転げ落ちるにしても、それほどの損はない。

ただなあ、普通の人の陣営が、いきなりコケるか傾くと、先が読めなくなるか。

「ここで、名を上げておくのも、悪くはないですな」

翌日、事を起こす事にした。

朝を迎え、兵が陣を組む中、俺は馬に乗って先へ立つ。

妙な気配を醸しだす此方の陣立てに、あちらさんは戸惑うように動きを鈍らせる。

そこへ、知力へ200、魅力へ200の配分で運を消費した、挑発を割り込ませた。

はい、策とかすぐに思い付く訳無いじゃないですか、こんなもんですよ。

「私の名は金満腹、太守殿が将である！！」

この度の姑息な盗人働き、些かなりと腹が立つ！！

貴様らに、受け継ぎし勇名を惜しむ誇りがあるのなら、ここに出て私と立ち会え！！」

（意識：あーオレオレ、金千てんだけどー、今回のなんかセコクねえ？　ちよつとOHANASHIしようか？）

運の回復にゴッドヴェイダーな粥をすすりながら、適当に考えた事（意識）と口から出た言葉の差に、思わず、補正すげーと感心してしまった。

単純計算、120相当の知力魅力で放たれた悪口は、見事に相手を釣ってくれた。

「貴様らあ！！」

追われた羊のように逃げ惑い、怯えて隠れ潜んでいた分際で、よくもそうも大言を！！」

釣ってくれましたが、なんか……モ武将にしては、えらく迫力がありますよ。

こちらに向かってくるにつれ、どんどんと大きくなる人馬の姿、俺よりも一回りとか二回り以上デカインじゃ！？

「逃げなかったとはいいい度胸だ！！ 大人、丘力居が配下、この？ 頓が得物のサビにしてくれる！！」

ちょ、ネームド・モブじゃねえか！！ シーも女性！！
キャラクターが固定された、ユニーク・モブ以下のレアリティを持つキャラクターは、男女の設定が外史ごとに揺れ動く。

しかし、この世界では、基本的に女性が強いという法則の通り、同じネームド・モブであっても、女性である方が強かったりするわけだ。

それが、武勇に優れたキャラクターネームを持っている場合、下手なオリジナルメンバークラスに強かったり、するらしかったり、するわけだが！！

？ 頓つつたら、丘力居の後継者じゃなかったっけ？
なんで、こんな所で雑魚な軍相手に時間潰しをしてるんだ？
つか、もしかして、烏丸の大人が本腰入れて、攻めてきてるっつか！！

本気でヤバイ事になってたりするじゃないか！！

「こうなれば、さつさと片付けて、伯珪殿を追うべきですね」
「片付けられるものなら片付けてみる！！」

騎馬を走らせ間近に迫り、言葉と共に打ち下ろされたのは、棒先に嘴状の引掛け付けた、敵つい鉄杖をぶん回し、共に馬上でありながら、腕一本では収まらない高さの利を使つての、大上段からの叩きつけ。

とつさに、武力へ400入れそうになる所を、すんでの所で200に留め、なんとか脇に剣で弾く。

「小兵にあつて、よくぞ受けた」
「これは、流石にキツイですね」

再度の振りかぶり、再び200掛けて弾く。
そして、慌てて痒みに似た痺れの走る手を握り直し、馬を操り間合いを開ける。

二回の打ち合い共に、単純計算120の武力で受け、見事に押されている。

しかも、単純な力任せだからこそ反応できたが、反応できて尚このザマ。

何かしら手を打たなければ、次はペシヤンと潰されて終わる。
頭を回そうと、すぐさま粥を嚙って回復させ、知力へ400叩き込む。

そしてまた、粥をすすり、空になった竹筒を投げ捨て、感覚の戻ってきた腕で、口元を拭う。

「南郷さんも、こんなのを受けながら、孫策狙いをやってたんでしょっか」

知力ブーストで思考が加速するも、余計な方向で空回りしている気がする。

ああ、そういえば、一撃勝負の賭けをしていたんでしたか……なるほど、一撃勝負。

ぴーんと、頭にビクリマークが灯る。

馬を回し、向かい合う。

「？ 頓殿！！」

「何だ、小物！！」

小物って、オッサン呼ばわりはともかく、あんたより小さいって意味じゃ、範囲が広すぎるだろうよ。

「ウダウダするのは性に合いません。この一撃で決めましょう」

「なんだとう」

カチンと来たようで。

「良かろう、貴様を乗馬ごと叩き潰し、大地の染みに変えてくれる！！」

「出来るならばお好きに！！」

私も貴女を叩き落としたならば、好きにさせて頂きましょう！！」

「やれるものなら！！」

「やって見せます！！」

双方の馬に活が入り、間合いを一気に削っていく。

片や鉄杖を大上段に振りかぶり、方や剣を下段に構える。

共に、得物同士をぶつけることしか、考えていないかのような構え。

「ここだ！！ 武力に400！！」

「砕け散れ！！」

振り下ろされる鉄杖、斬り上げる剣。

火花を散らし、ぶち当たった得物が砕け散る音が聞こえた。

支え切れない衝撃に、馬からも落とされたが、まだ生きてはいる。眩む視界を振り仰ぎ、敵を見定めんとして、視線の先にその姿を見つけた。

「私の勝ちです！！」

近くに見つけた剣を取り、砕けた鉄杖の残骸を蹴り飛ばし、倒れた敵の胸元に剣を。

「殺せ」

動けないらしい、？ 頓の声。

此方の勝ちが見えた瞬間、動きを見せた敵騎馬勢を牽制せんと、颯爽と趙雲隊が割り込んで来、そして村からも氣勢を上げて、うちの部隊が飛び出してくる。

将を討ち取られた烏丸の騎馬勢は、迷いの動きを見せたが、士気を保てず敗走していく。

「さて、何とかなったようで」

「くっ」

「自害など、お考えになりませんよう。」

勝負に勝った以上は、貴女の身柄は私の預かりとさせて頂きます」
「す、好きにしろ」

涙を浮かべ、屈辱の表情で絶望するとか、どういう風に思われて

んだか。

普通なら、縄打つてというか、首輪付けての捕虜扱いなところなんだけど、そういう雰囲気でもないな。

因みに、首輪にも何種類があつて、逃亡確率下げるだけの見張りが必要な物（500P）、逃亡禁止の見張りがいないもの（1000P）、ここまでのものは、拠点に連れて行く必要がある。

更に上位に、逃亡禁止で装着即、拠点へワープ（3000P）てのもあるようだ。

首輪は付けて置く事で、マイ外史に捕虜用の施設がある場合は、リタイア時に移行できる。

が、捕虜からの説得は、かなり困難で、忠誠の維持も難しいとされている。

ただし、攻略が確認されていない相手に対しては、無理くりの手段しか無い為、時たま行われるんだとか。

話が逸れたが、流石に空気読んで、縄は打たずに？頓さんを抱え上げ、馬に乗つけて陣地に戻る。

さて、皆が揃った所で、ちょっとは賞賛の声が聞けるかと思っただけ……。

「おっちゃん馬鹿なのだ!!」

「自信があるのかと思つたら、運が良かっただけだろ!!」

「主殿、あれは些か許しがたい。

どうして、私に任せて頂けなかったのか!!」

総ツッコミを受けました。

「では？ 頓殿、今回の侵攻について、お話いただきましょうか」

「ふん、元はといえば、貴様らの方が約定を破ったのだろうが！！」

いきなり過ぎて、訳が分からないよ。

「約定、といいますと？」

「密約があつたのだ」

と、？ 頓さんが、ポツポツと話します。

なんでも、前代の太守との間で、緩やかな不戦と外交チャンネルの維持の為に、ある土地で物資や家畜のやり取りを、黙認していたのだそう。

お互いの利になる為、続けて維持されてきたのだが、ここに至って突然の打ち切りと、その土地の役人が夜逃げしており、其処へ取引に行った者が捕縛されたと。

あれ？ それって？

俺が是正しちゃった、物資の在庫不備のせいかな？

怪しい数字つてのは、やり取り用の備蓄だったり？

で、前担当者は夜逃げして、新しい役人が仕事して取引に来た連中を、捕縛してしまったのか。

おいおい、そんな話を初期の仕事に絡ませるなよ…… 1プレイヤーの初期任務から、陣営がコケそうになるイベントに発展とか。

うちの白蓮さんも、知らないと言を振ってるし。

やっぱり、外史自体に仕込まれてる本線じゃなく、イベント設定か。

となると、当事者の俺が解決線といかんのか。

「ヤス!!」

「何すか、旦那」

ざっと、捕縛者の開放を指示する旨を書きつけて、迷惑料がわりのポイントと一緒に渡す。

「コイツを持って行って、捕縛された連中の開放を」
「はいよ」

マイ外史の備蓄物資は……流石に、金山のポイント収入がメインなだけに、物資としての備蓄は少ないか。

そのかわり、ポイントの余剰がアホみたいになってる。

劉備さんの予算、5000でも良かったかもしれないな。

ポイントショップで、金山10個購入……アイテム化すると地図になるのか……説明を見ると、所有者にポイント振り込まれる作りらしい。

「? 頓殿、これをお渡ししておきます。

この先、密約の維持は難しいでしょう。

ですから、これを元手に、新しい約定を太守殿と結ぶのが宜しいでしょう」

「いや、まて。

お前は一体……」

そこで、世界が凍った。

「はあ〜い　お・ひ・さ・し
あなたの天使、貂蟬ちゃんよあ〜う」

ぶっ！！　急に出てくるなよ！！

「だあーれが、アイザックさんも慄く、狂気の宇宙謎マッチョ生物ですってえー！！」

「そこまでは言っていない。」

で、なんで急に？　こんな所でストップかかるとか、フリーズ？　バグだったり？」

「いーえ、むしろ、あ・な・た・の方が想定外なのよ〜」

どういうことって？

「実はねん、このミッション。」

相当な難度の設定で、普通にやってれば、二回目のダイブでなんても出ないの」

「でてるんですが」

「それは、あなたが、ポイントを湯水のように使って、初回で色々やらかしたから、あなたの現状の設定難度が、激上がりしちゃったのねん。」

だから、初期任務に、こんな畏ミッションが出てきたのよん」

「畏ミッションなのかよ」

「あらん、口が滑っちゃったわ。」

というか、この先も酷い事になりそうだったから、ここで止めたのよん。

基本的には、このミッションには正解がないの。

一番の正解は、最初の段階で気付かずにミッション未達成でのペナルティを貰って、素直に難易度落とすこと。

次は、？　頓ちゃんとの交渉で、プレイヤーと白蓮ちゃんと烏丸族

が三方一両損の結果を出すことねん……事前情報無いから、基本無理だけど」

「おいおい!!」

となると、俺の場合は？

「それじゃあ、俺のやり方だと、どこが拙いと？」

「少なくとも、兵力使いまくって烏丸族を相手に俺TUEEEEとかしてくれる分には、判定のしようがあるんだけど。

戦闘に入った状態から、？頓ちゃんを生け捕って、情報掴んでから、高額のポイントをバラ撒いて、事を収めるなんていう判定は、普通は想定外なのよねん」

「じゃあ、どうなると？」

「アドリブで判定させて貰うわねん」

アドリブって、あんだ。

「とにかく、戦闘は起こっちゃったけど、交渉ルートに進めるのが筋道よねん」

「まあ、そうだな」

「それから、三方一両損って意味は、あなたが評価を下げ、白蓮ちゃんの所と烏丸族が、兵力と物資をすり減らした上で、痛み分けの形で停戦ってところなんだけど。

烏丸族、このまま行くと金山貰って儲かっちゃうし、白蓮ちゃんの所も、兵力減らずに済んじやいそうだし、どうせ、奪われた輜重分も補填しちゃうんでしょ？」

「一応、そのつもりで」

「そうになると、条件達成になっちゃいそうなのよね。

これ以上、難度上げてみたいのかしらん？」

「いらねーです」

「じゃあ、処理上は達成しても、難易度は落とす方向で行くわねん」
「ういー」

「あ、そうそう。　？　頓ちゃんだけど、一騎打ちで負けたのに生かされて、今の扱いの上に金山とかの話が出て、グラングランになってるわよん。」

半ば以上、吊り橋効果っぽいけど、このまま押せばゲット出来るんじゃないかしらん。

ネームドのモブだけど、イベント難度が洒落にならない分、能力は高いわよん。

じゃあねえん、あ　でゅゝ」

貴様の投げキッスなどいらんわあ！！
しかし、中々いい話だったかもしれないな。

そして、時が動き出す。

「誓って言いますが、私も太守殿も、密約の事は知らされておりませんでした。」

とはいえ、今回の事が引き起こされた原因の一因で在る事は、間違ひ有りません。

ですから、あなたにはこれを持って、今の争いを止め、丘力居殿との新たな約定を結ぶ為の力添えを、お願いしたいのです」（キメ顔で魅力200押し）

「……判った。　どうせ、この身は生命を握られ、生かされている身だ。　否応もない」

「助かります」（更に200押し）

「くっ！！」

おお、もしかして利いてるんだろうか？

「おっちゃんが、悪い顔してるのだ」

「しっ、きこえるって」

「いやいや、お二人とも十分声が大きいですぞ」

白蓮さんも、張飛さんも趙雲さんも聞こえてますよ。

「それでは星殿、？ 頼殿を丘力居殿の所まで、お願いします。

我々は、太守殿を止めますので」

「お任せを！！」

「我らも出るぞ！！」

一足先に出立した騎馬勢を追うように、うちの部隊とおまけが走りだす。

そして、夕刻には、公孫賛軍4000と、烏丸族凡そ6000の睨み合いの舞台に辿り着いた。

「間に合いましたか」

「満腹さん、無事だったか」

「満腹、どうしてここに？

それに、何か知ってるのか？ この訳の判らん状況について」

「まあ、それなりに……いえ、それよりも戦になる前で良かった。

実は……」

普通の人と南郷さん相手に、カクカクシカジカ、しかくいきゅーぶ。

とかやってる間に、あちらから、白旗上げた騎馬が二騎。

「一人は？ 頼殿、もう一人は……」

「ああ、あれは丘力居だ」

普通の人が仰るなら、間違いはなかるう。
一応、話は通ったのか。

「じゃあ、こちらもあるぞ。満腹、南郷、ついて来い」

戦場の真ん中で、睨み合う。

「それで、引いてくれるのか？」

普通の人が、端的に問いかける。

「まあ、宜しいでしょう。」

どちらが原因としても、今なら害らしい害は出ていませんし。

古い話を蒸し返すよりは、これからの事を問うべきでしょうから
「そう言って貰えると助かる。」

こちらとしても、そちらとの新しい関係を望む。

しかし、もう少し情報が残ってて欲しかったもんだよね……」

割合あっさりと収まる会談に気が抜ける。

「ただし、幾つか条件を付けたいのだけれど」

と思つたら、丘力居さんから、そんな申し出があつた。

「聞くだけ聞いてみるけどさ、無理は無理だぞ」

「難しいことではないわ。」

交渉の担当は、うちの？頼と、そちらは金満腹殿に願いたいわね
「それは、まあ。構わないが。それだけか？」

拍子抜けしたのか、普通の人がポカンとしてる。

「ああ、あと、私は身を引くので、後継者は？頼に任せるわ」

「は！？ あ、の、丘力居様？」

「今回のことを収めるにしても、そのまま私が居座ると、他の連中から弱腰と見られてしまいそうだし。」

「ここは丁度いいから引退するわ」

「そ、そんな軽い調子で言われても。」

それに、私の身は、あの男に握られておりまして」

「あら、盟を結ぶのに、好都合じゃないかしら。」

あんな条件を出してくる相手なら、下手に出ても、そう無碍にはしないですよ。

伯珪殿も、そうよね」

「あ、ああ。 別段嵩にかかるつもりはないぞ」

急に振られたからって、そんなにアッサリ答えちゃっていいんですか、太守殿。

「それに、一騎打ちの勝ち負けでどうこうという話なら、私が満腹殿の虜となりましょう。」

それで、対等の付き合いとして貰えば良いわ。

宜しいわよね、満腹殿」

ムチャぶりくん。

「いや、虜だとかそういう話は「女に恥をかかせるのかしら？」承りました」

「あ、あまり舐めた事をするようなら、噛み千切りますからね」

ど、どこをですかあ！！

南郷さんが、良く判らないながらも、不憫そうな視線の中に、リア充しねみたいな成分を、ちょっぴり混ぜた感じで、こちらを眺めている。

その視線、嫌すぎるので勘弁して下さい。

とはいえ、丘力居さん、20代後半程度に見える、黒髪長髪の色つばいお姉さんだから、色々となんか、虜という言葉にドキドキする部分もあるのですが。

「あー、じゃあ。話を詰めるのは任せるから」

と、上司から、サクッと丸投げされた。

結局のところ、以前に遣り取りをしていた村に、取引用と緊急時の備蓄分の物資を起き、一時避難の受け入れも可能な、暫定非戦地帯とする事にしました。

あとは賊に対する処置の共同や、傭兵契約つばい事も視野に入れてみた同盟を、上司である普通のひと、虜と言いつつ目付としか思えない丘力居さんの了解を貰って、？頓さんと結びました。

こんなにアッサリと、この件が収まるのは、普通の人のワンマン過ぎる組織形態と、皆がこの先の混乱を感じており、話で決着が付く所では、敵を作っておきたくないと思っっているからなのかもしれない。

そんなこんなをして、二ヶ月程が経ったある日、趙雲さんがやってきた。

23（前書き）

あけましておめでとう御座います。

お気に入り登録999人とか驚きで御座います。
今後とも宜しく願えましたら、ありがたく。

さて、今回微妙に性描写を匂わせています。
気になる方は読み飛ばしていただければ幸い。

つつても、4 - 5行書いたところで、まじめに書いたらまずいんじゃないかと気づいて、お茶を濁しまくってますので、制限どうこうにはならないレベルのモンだとは思いますが。

あと、初期趙雲さんが、ややこしいこと&残念な趣味を披露していますが（どうしてこうなった）山本的な趣味とは一応関係有りませ
ん。

「あー、こいつは趙子龍だ。

旅をしているそうだが、今回、縁が有ってな、うちで客将として預かる事になった」

「暫く世話になりますが、余り私の武を刺激して下さるような御仁は、居られない様子ですな」

艶のある目で、ざっと見回し早速で、そんな事を吐いて下さる所は、流石は趙子龍の面目躍如といったところか。

大体読めてる俺と南郷さんは、苦笑を漏らすだけで済んでるが、普通の人含めてモブ文官さん達は、多少の差はあれ、顔が引き攣っている。

まあ、そのうち実力で、認めざるを得ないように、なるんだろうけど。

「はっはっは、あの天狗の鼻、今なら叩き折ってやれないかなあ」

「鈴々なら楽勝なのだ」

「いやいや、ああやって自らを追い込んでおる等、可愛いではありませぬか」

何気にお付の皆さんが騒いでいる。

ここの陣営には、南郷さん以外のプレイヤーは居なさそうだと確認したので、三人とも連れてきている。

あと、丘力居さんも居るが。

向こうを見ると南郷さんも、お付きの人が騒いでいるようだ。

この間は一人だけ見たけど、もう一人付いている。

恐らく、片方は白蓮さんで鉄板、もう一人は誰だろうか？

「これこれ、旦那様よ。」

あの様な事を言わせておいて、何も無しでは、旦那様に負けた、
？頓の身の置き場がないでしょう」

考えていると、後ろから突付いてくる、丘力居さん。

その声は何気に怖い。

「ほほう、そちらに居られる方は、金満腹殿か？」

先の戦で烏丸族の大人と打ち合ったと聞きましたぞ」

げげえ、ロックオンされた。

背後の丘力居さんの視線が「下手な事を言えば、どうなるか判つてますね？」とばかりに感じられる。

確かに「大した事は無かった」等と謙遜すれば、それは？頓さんを軽んじることになり、「恐ろしい相手でしたがなんとか」等と大袈裟にした所で、俺の実力なんぞ読めてしまっただろうから、此方を軽く見られて、それは？頓さんを、軽んじる事に繋がります。

であれば。

「いやいや、お恥ずかしい。」

太守殿の為にとの、命がけの大博打の策が、百に一つ叶ったお陰でございます。

しかし、あのような恐ろしい相対は、二度と勘弁願いたいものですな……思い出すに身が震えます。

この先は、烏丸族が味方について下さるとの事、本当に有難く感じておりますとも」

という感じで魅力に400叩きこんでいた。

あの結果は、力を出し切った上での幸運と強調し、最後には「そんな恐ろしい相手が味方なんですよ」と、空気読んだ感じの発言し

てみました。

こんな所で、いかがでしょうか？

周りの雰囲気的には、ホッとした空気が流れているようで、成功ではないかと「しかし……それでも」まだ言いますか、おい！！

「やはり、私の目で見える限り、それ程の「しゃらくさいぞ小娘！」なんと」

後ろからびつくりしたあ。

まだ先を続けようとする趙雲さんの言葉を、俺の後ろから丘力居さんが、ぶった斬った。

「ふふーふ、この旦那様の力量を、見抜けもせずの大言壮語、片腹痛いですわ」

後ろから、蛇のように絡み付いてくる、丘力居さんの体が色々と柔らかい。

「ほう、私の目が節穴と？」

カチンと来たか、趙雲さんが剣呑な目をして、丘力居さんを睨みつける……筈の視線を丘力居さんが俺を盾にするので、此方に浴びせられる。

此方を貫通する勢いの視線を浴びるのはキツイんですが。

「ああ、ごめんなさいな。

所詮、恋も知らぬ小娘には、まだまだ早かったかしら。

なんせ、旦那様は、武においては將軍級……。

でも……夜の戦場では大將軍ですよ」

とかいいながら、恥ずかしげに頬染めるとか、止めて下さいよ、ホントに。

「『ゴクリ』『』」

其処の皆さんも本気にしない。

こつちを睨んでる方の趙雲さんの視線が、今ので更に、一段下方方向に修正されてるように感じるんですが、気のせいじゃないよな。

「あー、その辺でいいか？」と、普通の人が場を納めてくれたが、妙な空気は朝議の間中、続いてしまった。
激しく居たたまれない。

「まあ、仲良くやってくれ」

なんとなく、投げやりっぽかったが、普通の人が解散を命て、各々は仕事に向かっていく。
そんな中。

「よつ、夜の大將軍」

南郷さんに呼び止められた。

「それは勘弁してくれませんか」

いや、ほんと、切実に。

「ははははは、しかし、とうとう来たな」

「私的には、いきなりのハンデを背負ったような感じですが」

「あれ？　そこまで本気で狙ってたりするのか？」

「そんなに不思議な様子で答えられることでしょうか？
普通、趙雲といえ、誰もが狙いに行く武将でしょうに」

南郷さんは、ちよいと考えこんで。

「いや、確かにそうなんだけどさ、満腹さんって、割と堅実つか、地味なところでキツチリ拾っていくイメージだからさ。

あんまり、難易度高いところは、本気で狙わないかと思ってたんだけどな」

「いや、私はまだまだ未熟でございますので、あまりそのあたりを気にしてはおりませんよ」

「へえ」

なんか、不審げに見られた。

「まあいいさ、それじゃあ、ここからはライバルだ」

「はい。とはいえ、あまり太守殿の胃を痛めるのも何ですので、のんびり行かせて頂きますよ」

「そっか、じゃあな」

南郷さんは早速に走って立ち去っていった。

「さて、仕事しようか」

で、将になって貰ったは良い物の、ぶっちゃけた話、小役人衆の大部屋から上がってくる竹簡・木簡の一時倉庫と、資料を積み上げている書庫と化している、己の個室へと足を踏み入れる。

何時もであれば、白蓮さんが書類仕事を手伝っていたり、趙雲・張飛さんが、調練の合間に点心持ってきてきたり、ヤスが使者の仕事の合間に一杯やっていたり、丘力居さんが、その酒を取り上げ

つつ、ツマミを買いにパシらせてたりするのだが。

「なんだ!？」

いきなり白刃が閃き、文官服の袖と前髪が散った。

風を感じて飛び退りながら、襲撃者の姿を見ると、白い艶姿に剣を持った姿。

「趙雲殿……いや、服を戻しているんですか？ 星殿」

「何を仰っているのですかな？」

私はあのような、完成された主の為の、爪牙の如き麗しい女性等ではありませんぞ」

これはどういうネタなんだろう？

自分じゃない自分を装って襲ってきつつ、自分を見ぬかれてるのを自分を褒めつつ否定するとか、訳が判らん。

「ふ、先程の朝議での恥を注ぐべく、こうして襲いに参ったと云う訳ですよ」

「いやいや、そんな短慮はないでしょう。」

それに襲うつつもりなら、最初の一太刀で」

「ええい、問答無用」

とか言いながら、どう考えても、此方に当てる気が無いと云うか、ゆるゆると、まるで捕まえるとしても云うような速度で振るってくる。謎すぎる……が、危ないといえば危ないので、剣を握る手を掴み上げて、剣を奪おうとした途端、足を払われ体を浮かされ、何が起きたか判らない程に振り回され、気がつくと仮眠用の寝台に、白の衣装を肌蹴け、肌を晒してグツタリとしている星殿に、伸し掛かるようにしている自分が居た。

触れるどころか、押し潰すような体勢の為に、此方が身動きすると、苦しい吐息が漏れる。

その桜色の唇に目が吸い寄せられ、幾度か摘むことを許された時の感触が蘇る。

再びそれを味わおうと、唇を奪うべく、顔を寄せる。

甘い香りが誘うように……って、なんで、こうなってるのか。

正気づいて身を離そうとした所で、体の下の趙雲さんがクワツとばかりに目を見開いて、呆れた声で「主殿、其処で引いてどうするのです」などと仰る。

「いや、訳が判らんのですが」

「むう、この私の完璧なシナリオが無駄になってしまったではありませんか」

袖から取り出した竹簡には「華蝶仮面墮つ 美体侵略絵巻」とか書いてある……。

ヒロインピンチとか、悪堕ちヒロインとか、ニツチ過ぎるジャンルはどこで覚えた。

「つまり、どういう事なんで？」

「いえいえ、先ほどの件で気分を害されているだろうと思ひましてな。

それならば、私を使って憂さ晴らしでもしていただくかと、取り急ぎシナリオを書き上げた訳なのですよ」

このMっぱい所は、どこから湧いたんだろう。

「さあ、主殿、女に恥をかかせる者ではありませんぞ。

この身は、貴方様の剣であり盾であり、玩具でもあるのですから、

遠慮は無用というものです」

「最後の一つがおかしくありませんかな!!」

「何を仰りますやら」

さあ、とばかりに肌蹴たままの姿で手招く趙雲さんは、肌を朱に染め、怪しい光をその紅瞳に閃かせ、此方を誘うように笑う。

「ふう、ここまでされて逃げては、男子と言えないと言う事になるのでしょうか」

釣られるように、妖艶な微笑を浮かべる美貌へ顔を寄せ、乱暴に唇を奪う。

暫く味わい、離れる。

息を荒げる様子を見て、整う前に再度。

併せて胸元に手を這わし、軽く充血した実の中心に、軽く爪を立てると、その身が跳ねる。

弄ぶように繰り返し、支配欲を充足させると、一旦離れ、潤み切った瞳と息を弾ませながら、切なげに此方を見やる視線を見返した。

「主殿、どうかお情けを」

その言葉を合図に、俺はその純潔を奪った。

とかな風に行けば、かつこいいんだろうけどね!!

いやあ、ダイブ中の感覚ってのは洒落にならないね。

肉体感覚無しでの、純粹感覚。

脳みそがそう感じてるだけなんだけど、これって、経験のある人の方がリアルに感じるとか言われてる反面、経験のない人間だと、幻想に嵩上げされてしまう面があるらしいんだわ。

俺の場合もそんな感じ。

ぶっちゃけキスで立ち、肌を合わせた感触でイツちゃっわ、好き勝手に触れることで翻弄していると感じたり、反応を引き出しているのが俺なんだーとか、考えちゃうだけでもイツちゃって、まあ大変。

最後まで行けたは良いものの「良く出来ましたな」等と頭を撫でられるとか……なかなか恥ずかしい思い出ができた。

ただ、疲労感が薄いので、まるきり猿の如く延々と、気がついたら寝台に、白蓮さんと張飛さんまで居て……こう、勢いで済ませるんじゃなくて、もう少しいいムードでとか言ったら、後回しにされる方が嫌だったんだとか。

どうも最近、妓女さんどこに寄ってる理由「出来たらプロの人に手ほどきして貰って」から、が良いかなーとか、考えてたのがばれてたか？

ほんと、女心は難しい、いや、妄想なんだけどね。

「さて、どうしてこうなっているのでしょうか？」

あれから「イケナイ事を覚えたばかりのお猿さん」状態で、一ヶ月の時間が経ってしまい、これではいけないと、なんとか立ち直って、本来の攻略に頭が回るようになって来ましたが「時、既に時間切れ」とでも言わんばかりの様子に、先の台詞が漏れてしまいました。

例えば。

「満腹殿、此方を頼む」

部隊の装備を受領したという、確認の木札を、こちらに持ってきた趙雲さん。

「あ、承りまし、趙將軍？」

俺に木札を渡すと、此方をからかいも挑発もなく目を逸らし、そくさと立去って行く。

で……。

「満腹、この間の話は、そちらで進めて貰えるか」

「烏丸族との交流により得た、良馬の選別ですが、此方については太守殿にも「任せる」畏まりました」

普通の人に、？ 頓さんの所との交流を深めて貰おうと、企画・進言してみた献策を、そっくりそのまま、此方に任せると投げ返され

る。

こういう事が続き、これはどうも、俺が何かをやらかしてしまっ
たのかと、色々考えてみたが、立場や権限は南郷さんと同じく、仕
事した分だけ持ち上げられてるので、仕事上での問題はない筈……
だというのに、何だ？ この排斥感。

「そりゃ、色ボケた目で見られ続けりゃ怒るよ。
満腹さん」

「これは南郷殿、お疲れ様です。 って！？ それは一体！？」

ブツブツ言ってる所を見つかったのか、南郷さんに後ろから話し
かけられ、その内容にちよっと固まった。

色ボケた目って……。

「いやさ、推測での話だから間違ったら悪いけど。

満腹さん……パートナーで連れて来てるの、白蓮さんで、こっち
でなんというか、やっちゃったんじゃない？」

「……」

そんな直接的な話を振られると、返答に困るんですが。

「単純な話、自分のとこの白蓮さんを連れてきて、イチヤイチヤし
ながらで、こっちの白蓮さんに顔を合わせる時、普通の顔ができて
ると思う？」

いや、それは……。

「基本的に、付き合いが深くなると、同じ人物って維持が難しくな
るんだよ」

そうなんですか……。

「たとえば、忠誠の質つてのもあるんだけどさ」

金銭等の報酬による忠誠＞利害・目的の一致による忠誠＞友情・信頼による一般的な忠誠＞愛情・盲信等による、半ば依存的な忠誠つてところでしょうか。

「うん、そんな感じ。」

でさ、ある人物をパートナーとして深い付き合いになると、次の同じ人物に対する視線は、必然的に違う物になるし、そういう視線を向けていると、初対面の相手から、そういう目を向けられる、その周囲の人物にも、自分に向けられる筈の視線を他人に奪われる、今隣に居るパートナーにも影響が大きくなる。

だから、ある程度の付き合い以上になっちゃうと、同じ人物って維持するのは難しいんだよ」

「ゲットするしないに関わらずさ」と、南郷さん。
確かに。

「よく言われてることさ、白蓮さんはゲットしやすいって話があるけどさ。」

返して見ると、ゲットしない・出来ない層が多いからでの話でも有ってさ。

初期の時点で、白蓮さんをパートナーとして、深い付き合いをする率が一番大きい。

つまり、二人目を得ようとする人数が少ないがゆえに、愛着のない人間にとっては、ライバルが少なく、ゲットしやすいって話なんだよ」

それは、そう言われて見ると、確かにそういうことか。

「だから実際のところ、俺も、ここの太守殿には、割と突き放された態度されてるんだ」

「私が特に、という訳ではないと？」

「まあ、俺は第一っていう所までは、付き合い深くないからね。

あー、彼女欲しさに女友達に、手伝って貰っているくらいの感覚が近いかね。

完全無視とかされてるわけじゃないけど、馴れ馴れしいと思われると思うよ。

だから、もしも満腹さんが、パートナーの白蓮さんと、この周回で恋人っぽい事になっちゃったんなら、ここの太守様の視線が一層キツイ物になったとしても、それはドコモおかしくはないよ」

ぐはあ。

「一人のキャラクターで維持できる人物の人数なんて、そう多くは無いんだから。

狙いは絞って、行動するのがいいね。

あと、パートナーにはキツチリ話しておかないと、不安要素になつて忠誠下がりがりやすくなるからね」

「ありがとうございます」

「でもなあ、普通は最初に身をもって思い知る類の話なんだけどな。よっぽど、満腹さんは運が良かったのか、マメにケアするタイプの人なんだね」

あ、あはははははは。

い、言えない！！ 金にモノを言わせた結果だとか、言えない。

「て、事だけど、満腹さんの役に立てた？」
「充分に。感謝いたします」

立ち去る南郷さんに一礼しておいた。
なるほど判りやすい話だった。

……しかし、不味いこともある。
付き合いが深い程に、周回で関わる同じ人物との関係に影響が出る。

パートナーが、女友達レベルの友情というレベルで、周回の同じ人物に、馴れ馴れしいと疎まれるということは、パートナーと関係しちゃったレベルなら「なにコイツ？ 変質者！？」とかになるのか？

なんか、某苟？さんとなら、通常運転な気もしないでもないが。
今の暴走状態で、ズブズブの関係になってる、この現状ではどうなるんだ？

うわー考えたくねー。
次の周回じゃ、このあたりには近寄らないほうがいいかもしれいな。

「ということが御座いまして」
「もしかして、後悔しているのか？」

白蓮さんの強い視線。

「いえいえ、全く。」
単に、これからの事を、ご相談させて頂こうかと」

相談は大切らしいしな。

「どう言うことなのだ？」

擦り寄ってきた鈴々さんを撫でくりつつ。

「現状、太守殿と趙雲殿に、冷たい視線を頂いておりますが、趙雲殿の場合、丘力居さんの関連で、色々と外聞がありますので、そう目立ってはおりません。」

ですが、この先、劉備殿一行がやってきた際に、恐らく張飛殿に睨まれるのを考えると、劉備さん、関羽さんにも、余り良い影響はなさそうで、この陣営に居るメリットというものが、余り無さそうなのですよ……あと、私の精神衛生的にも」

腕を組みつつ、ため息一つ。

「それでは、別の陣営に移るということですか？」

面白げに星さんがニヤリと。

「いえ、流石にそれは不義理かと思えますし、？ 頓さんや丘力居さんのこともありますので。」

できれば、お二人をゲットした時点でリタイアするのも手かなと」

「なるほど、花廊のお二人は諦めると」

「えーと、そちらも前向きに検討いたします」

微妙に締まらない答弁だった。

「そして、早速ここに居ると……」

「どうかなさいまして？」

酌をして貰いながら、曖昧に笑ってごまかす。

「いえ、相変わらず、美味しいなと」

「まあ、相変わらず、お上手ですね」

さあ、もう一献と、逆の手から盃に酒が注がれる。

通い始めて、かれこれ二月ほどになるが、やっとこの酒の味が楽しめるようになった。

まあ、最初はプロの人に云々というつもりで通っていた訳だが、必要なくなったので、普通に料理と酒を愉しむ為に通っている。

とはいえ、態々この二人を指名しているという事もないのだが。

「最近はお話にも出なくなりましたが……私どもの事は、もう宜しいのですか？」

楊氏さんが、ふんわりと笑う。

「いえ、焦らされるのも楽しみかと、そう思えるようになりましてな」

焦る事もないかと……と盃を干す。

「あらあら、ではこちらが焦らされる事になりますのね」

ころころと李氏さんが笑う。

実際の所は、そういう格好のいい事でもなくて、ここの太守さんと趙雲さんを狙うのは無理かと、諦めたせいで余裕ができたと言う

か、吹っ切れたと云うか。

仕事の経験値を優先にしていたりと云うか。

丘力居さんやら？ 頓さんからの、烏丸族関連の要望や仕事に、ポイント投げまくったり、領内整備にもポイント投げまくったりして成果を増大している。

また、雑魚部隊だった筈のうちの部隊が、いつの間にか騎馬になって、800程度の部隊（輜重もくつついた）の癖に、部隊長が強化白蓮さん、強化星さん、強化鈴々さん、丘力居さん、そしてヤス（伝令）なんていう無駄編成で、賊を狩りまくってたりする。

ぶっちゃけた話、補佐が白蓮さん（恐らく）と他の将がいて、更に兵力が2000近い南郷さんとはとかく、兵力1000程度で将が趙雲さん単独の部隊よりも、小回りの分で戦果を稼いでいる感じだ。

お陰様で、丘力居さんの機嫌は良いのだけど、この周回の趙雲さんの機嫌は急降下している。

さらに言えば、丘力居さん「金満腹派閥と思われるようで、不機嫌がこちらに飛んでくる。

それを見て、丘力居さんは大笑いしていたり……勘弁して欲しい。ぐつと、盃を干して天を仰いだ。

「そのお陰で、私に酌をさせて酒を飲めるのですから」

喜べということでしょうか？ 諦めろということでしょうか？

というか、どうして、その話を知っているんですか？

ボヤいていたら、仕事の後に酒家へ連れ込まれてこの場に至ると……。

クスクスと笑う、その様子は無邪気な子供のようであり、瞳に閃

く危険な光は妖艶な女のそれ。
なんとも不思議な人である。

丘力居、ネームドのモ武将にしては、個性ありすぎな感のある人だが。

「では、此方を……受け取っては頂けますか？」

半ば様子見のつもりで、指輪を取り出して見せると。

「受け取るに吝かではありませんけど……一つだけですよ？」

等と仰る。

「そういう事でしたら、構いませんが。宜しいので？」

指輪をもうひとつ。

「あら、義理のおやこd「聞こえません聞こえません」は、好みではないのかしら」

不穏な単語は聴こえない事にしたが、とにかく、？頓さんにも、指輪が渡る事になるようだった。

「あらいけない、勘違いしていたわ。もう二つほど、下さいな」

「おや？ どういう事ですか？」

「こういう事ですわ」

丘力居さんが手を掲げ、二つほど拍を打つ。

するりと戸が開き、お姉さん方二人に捕まった？頓さんの姿。

「はーなーせー」

「あらあら可愛いわね」

丘力居さんの言葉通り、いつもの武人然とした姿とは違う、女性らしい……というか、可愛らしい。

「一つお聞かせ頂きたいのですが」

「なにかしら？」

「？ 頓さんって……」

「たしか、十八になったのよね」

「大人びて見えておりましたので、驚きました」

「はーなーせー」

まだやってるのか。

「落ち着きましたかな？」

「ああ」

無然とした様子で盃を干す？ 頓さん。

なんというか、十八とか聞くと随分印象が違うな。

日で褪せた黒髪をザンバラに切っていたのも、多少整えることで、シャギーカットにも見え、男性的な太い眉も、華やかな印象を与える物に変わっている。

傷だらけの大柄な体躯も、こうしてみると女性らしい丸みを充分に備えており、似合わないと感じているのか、黒の巻きスカートのドレープを弄る姿も妙に可愛い。

某楽進さんは、忠犬方向のキャラと良く言われるが、？ 頓さんは野生方向に超進化しちゃった感がある。

そんな野生の獣っぽいのが、距離感に戸惑いいつも懐いてくる感じなのは、ある意味非常に良いものであるのかもしれない。

「それでは、受け取っていただけるので？」
「ふん、まあいいさ」

無遠慮に指輪を嵌めてくれる姿が、なんとも言えない。

「そちらの、お二方は？」

「「お受けいたします」」

艶然と微笑みながら、指輪を嵌めて下さった。

これで、思いがけず、目標は達成してしまったのだが。

この際だから、冷たい視線対策を試してみようと思う。

唐突に、何を言ってるのかと思われるだろうが、本気で視線が痛い。

次の周回にも、好き好んで此処に来る事はないと思うが、この先の事を考えるに、行く先が段々と限られていくのは、辛い訳で。

多少の不便はあっても、何とかできないかと考えた訳だ。

まあ、最初にそういう事を考えたのは、あるアイテムを見つけたのが切欠であるのだが。

そのアイテムとは糸目・チョイ鼻眼鏡・なまずヒゲというラインナップの代物で、説明文には『あなたのエロい視線もマイルドに、ただし胡散臭くなります』とある。

これらを使つて、この後来るであろう張飛さんに試してみようと思う。

目と目があつた瞬間から氷点下よりは、胡散臭いおっさんと思われつつも、挽回の効くレベルで収まるなら、その方が良い。

ただ、マイナス修正がない相手にも、無駄に胡散臭い印象を与えるのが、デメリットといえばデメリットなんだろうけど。

「どうでしょう?」

「何を考えているのか、読めないが……胡散臭いぞ」

「おっちゃん、006みたいなのだ」

鈴々殿は、なんで張々湖なんて、知ってるんですか。

「なかなか、カッコいいではありませんか!」

うん、星殿、あなたの感覚は信じないことにします。

さて、試しに太守殿に、何かしら用事を持って伺ってみますか。

どうやら、太守殿は執務室にいらっしゃるようで。

「太守殿、此方の決済を、お願いしたいのですが」

竹簡木簡を、幾つか抱えて声を掛けてみる。

「うん？ 誰かと思えば満腹か。

なんだか印象が変わったな、その方がいいんじゃないか？」

「左様でございますか？」

「ああ。 あ、決済の必要なものは、其処に置いてくれればいいぞ」

「では、失礼致します」

おお、なんか当たりが柔らかいぞ！！

これはあれか？ 印象マイナス90相当の、凄まじくエロい目付の二枚目と、チビ・胴長・短足の印象マイナス30相当の三重苦（合計マイナス90）を比べたときには、三重苦の方は合計でマイナス90には、なっていないということか。

俺で云うなれば、エロい目付き・100が緩和されて、エロい目付き・50・胡散臭い・50くらいになっているというべきか。

マイナスのベクトルが違っても云うのか、とにかく・100よりは緩和されている！！

単純に言い切ってしまうのは危険とはいえ、少なくともマシにはなっているのは間違いない！！

「となれば、これで行く事にしよう」

「えーと、満腹さんでいいのかな？」

うわあっ！！

「な、な、南郷さんですか」

「そんなにビックリしないで……って、また凄い事になってるね。ああ、もしかして006？」

「張々湖は、そんなにメジャーなキャラクターなんですか？」

「あんなに鼻でかくはありませんし、あれは糸目じゃないですし、メガネも掛けてません。」

「共通項はナマズひげと太鼓腹と胡散臭い中国人ってだけでしょうがぁ！！」

「って、げっほ、えっほ！！」

「まあまあ、そんなに息を切らすまで叫ばなくても……」

「いや、どうしてもツツコミを入れないと、いけないような感じがしたんですよ。」

「くそう、無駄に息が苦しいわ、こんなところに拘り入れるなよな。」

「それはともかく、なんでまたそんな微妙なアクセサリを？」

「いえ、太守殿の視線が痛いので、何とかならない物かと」

「ははあ、なるほどね」

「でもさ、気にしないのが一番だよ。とか言われても、キツインだからしょうがねえじゃん。」

「とりあえずの劉備さん一行がやって来るまで、時間を潰すにしても、ある程度 黄巾が盛り上がる程度まで 時間がかかる訳だし。」

「まあ、似合ってるし、いいのかな」

という、南郷さんの去り際の一言は、それとなく俺の心をえぐりました。

そんなこんなで、多少は緩和された環境の中で、仕事に勤しんでいたんですが。

『金満腹は、趙子龍を補佐とし、賊を討伐すべし』とかな、辞令が出ました……。

「いや、普通に兵力増強してくればいいですよ。将の数は足りてますので……」的な事を太守殿に申し上げようと参上したら、先に趙雲さんが居たりして。

「伯珪殿、これはどういう事ですか？」

ニヤリ笑いも引き吊りつつの、余裕のない趙雲さんの姿。

「これはも何もないだろう？ この所の賊は、一群の規模が大きくなっている。

それに対応する為にだな」

「ほほう、私だけでは心許無いと」

「そういう事を言っている訳じゃない」

うわあ、入りづらいわあ。

とはいえ、放置もできないしな。

「失礼いたします。

おお、趙將軍もいらっしやいましたか」

「ああ、満腹か、どうしたんだ？」

なんとなくホツとしたような、太守殿の声。

趙雲さんに困っていたか？

「いえ、今後の方針について、お伺いしたく、まかりこしました次第」

「なんだ、お前も不服とか言い出すんじゃないだろうな？」

苦い顔して、そう睨まなくても。

「とんでもない。」

趙將軍にご助力いただけると有れば、万軍の助勢を得たも同然。

むしろ、補佐について頂く相手が私等で良いのかと、気が気ではございません」

「くっ」

趙雲さんは、踵を返し、足音を響かせながら退出していった……こええ。

で、さっきみたいな事を言った上では、やっぱり趙雲さんの助力は遠慮しますなんて、言えませんでしたので、結局は兵を合流させ、2000に足らずという程度の陣容で、賊討伐に励むことに。

とはいえ、近隣の細かい連中は大概狩りつくし、領内の整備はポイント任せにしては、よく治まっている。

こうやって、客観的に見て、やり過ぎ感が半端ない位に。

いや、太守殿の態度の変わり方が半端ないと感じてたが、こんだけやってて、目付き一つで避けられてた方が、おかしいんじゃないかと思えるくらいだ。

そうだよな、こんだけ働く相手だったら、毒になっても使い所を

考えるのが普通ってもんだ。

っていうか、考えたからこそこの始末なんだろうなあ。

そうじゃなきゃ、いくら客将とはいえ、趙雲さんを補佐に回すとか無いわな。

普通なら、趙雲さんを主に置いて、俺をお目付け役に、とかになるだろう。

それがどうしてこうなった……ああ、頑張りすぎたせいで、ご覧の有様だよ。

しかし、これから当分、キツイなあ。

俺は内政をちまちまやっておくので、あとは任せた。とかって
いうのは……ダメなんだろうなあ。

「うだーーーーー!!!!!!」

あー、イライライライライライラー!!

もう、早々にリタイヤしちゃうかしらー!!

「ほらほら、落ち着け、主殿」

OTL状態の俺に、優しく声を掛けてくれる白蓮さん。

「主殿の我慢が切れるのも、判らなくはないですな」

「其処を、星ねえちゃんが言っちゃうのも、どうかと思うのだ」

したり顔で頷く星さんに、すかさず突っ込む鈴々さん。

「いやいや、確かにアレは私ではあるのだが、それを私に言われても困りますぞ」

確かに、この周回の趙雲さんが原因なので、ここに居る星さんに文句をいうのは筋違いだが……言わずに居れる程には人間出来てないんじゃない!!

「星殿、此方に来て下さいませんか？」

天幕の中、火を囲み、車座になって座っている中、対面の星さんを手招く。

「何かな？ 主殿」

うん、いやね、ちょっと八つ当たりしたいかなと思って。
んなことを考えつつも、表情を固めている俺の傍らに来て、腰を下ろし顔を寄せてくる所を、腕を掴んで乱暴に引き寄せる。

「あん」

バランスを崩しつつも、勢いをそのまま受け入れ、こちらの腕の中に収まる黒衣の柔肌を、力任せに抱き潰すと、胸に潰れる双球と両の手に背から腰への艶かしい曲線を感じる。

「急にどうしたのですかな？ 慌てなくとも「すみません。ちょっと八つ当たりさせて貰いますね」それはどういうこ、ひゃん」

背に回していた手を、ソロリと腰の横手に回し、手のひらを開いてサラリと撫で上げた。

「ちょ、くすぐるのはだめでひゃん」

反射的に跳ねようとする体を抱きしめつつ、腕を交差したまま、指先で背をなぞり上げた。

どうやら相当、くすぐりには弱いと見える。

背中、脇腹を指でさすり上げ、頂と耳に息を吹きかける。

面白いように反応する体を、数分堪能しただけで、星さんの体はグツタリと、力を失っていた。

いつもの余裕を見せつつ、チエシャ猫のような、謎めいた笑みを浮かべる表情がアツサリと崩れ、淡い涙を浮かべて、此方を非難するように睨み上げてくる。

うわぁ、ヤバイくらいに可愛い。

拗ねて油断してる所を、最後に一撫でしたら、おこりのように身

を震わせて、果ててしまったらしく、ガチ泣きして「このような使われ方は不本意ですぞ!!」と説教された。

慌てて平謝りすると「判って頂ければ宜しい。この身を使っ頂くのは結構。ただし、片手間の戯れに慰み泣かされるのはたまったものではありません。使い手たるもの、道具に対する礼儀というものがあるのです!!」と、まあ、何処を突っ込んだらいいのか判らない超理論を、こんこんと述べられた。

ようは、抱くなら抱け、ただし面白半分ではなく、ちゃんと気持ちを入れるということだろうか？

これを、女心といって良いのか、激しく悩むが、女心は難しいといっておこう。

という事を、やっていると、天幕の外が騒がしい。

何事かと様子を見に立ち上がろうとした所で、無遠慮に布を引き上げ、夜気を放り込んでながら、ここ最近のイライラの原因がやってきた。

「満腹殿!! 賊の連中の根城を突き止めたとの報告が、やって参りましたぞ!!」

おいおい、まだ次に行く気かよ。

ぶっちゃけた話、この一月ほど、遠征を続けている。

当初、この部隊の合流に不本意を唱え、此方に対して敵意に近い物まで撒き散らしていた趙雲さんだが、此処に至って満面の笑みを浮かべて、此方の名を呼んでくる。

一体何が起こったかというと。

補給>俺が面倒を見る。

指揮>俺が面倒を見る。

情報>俺が面倒を見る。

つまり、一人で部隊を率いていた、趙雲さんの面倒が、ほぼ完全にフリーと化した（まあ、今までも面倒の多くは、副官の人でも立てていたんだろうが）

しかも、将の数が増えたので、無茶してもフォローが入る。

やらかしても、責任は俺持ち。

つまり、思う存分バトルジャンキーというか、ウォーモンガーというか、やっていられる訳だ（敵さんの歯応えについては、色々と言いたい事があるようだが）

お陰で、アツと言う間にご機嫌度は急上昇。

満腹殿、満腹殿とばかりにやってくる。

それはいいんだが……！！

いい加減戻りたい。

遼西郡の周囲から雑魚い連中が居なくなり、大きめの賊集団を求めてこっち、冀州が目の前、并州もそう遠くないとこまで来るとか、どういう事だよ。

南郷さんとも連絡をとっては居るが、こんな州境まで来るはずもなく（おまけに攻略対象をかつさらって、連れ回しているように見えるので、色々と言葉が痛い）

郡を越える度に、賂やら寄付やら袖の下やらで、役人だの偉いさんだのに鼻薬を嗅がせつつ、賊の情報を聞いては潰し、違う土地への繰り返し。

本気で、風呂に入りたいし、先程のくすぐりの一件もそうだが、ぶっちゃけた話、欲求不満がたまってる。

ついこの間、お猿さん状態から脱したばかりで、いきなり禁欲生活とか、出来るわけ無いじゃん。

いや、何度か気分が盛り上がって、そういう事になりそうになったよ！！

でもな！！ その度に、今みたいに割り込んできやがるんだよ！！
本気で殺意が湧いてくるんですが……。

因みに、白蓮さん、鈴々さん、星さんの三人は、チヨイチヨイでも触れ合うことで、ある程度満たされてるそうですが……俺にとっては蛇の生殺しですよ！！

丘力居さんは、外の土地だと面倒だからと、居残り決め込むし。

「満腹殿！！」

「あ、ああ、すみません。」

少々疲れが出ているようでして。

それよりも、賊の根城を突き止めたと？」

「ええ、その通りです。」

その数も4000を越えるとの事、いやあ、腕が鳴りますな」

ちよつとまてい！！

倍越えるような相手と正面から殴りあいとかしたくないわあ。

しかも、そいつらの根城を突き止めたって、攻め手が少なくてどうするんだ。

本当にどうしたもんだろつなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9996y/>

ダイブゲームで恋姫†無双（元：恋姫†無双オンライン）

2012年1月14日19時52分発行